
カオティック・スクエア

陽無陰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カオティック・スクエア

【Nコード】

N0806Y

【作者名】

陽無陰

【あらすじ】

四つの世界が交流する為に造られた世界、学園都市アカディア。少女の願いを叶えるために造られた箱庭の中で少年・少女達は何を志すのか？

学園ハートフルコメディーでもあります、話が進むうちに残酷な描写も時には混じるのでご注意ください。

それとコーヒーも御用意を。

第一章 集う者達

朝の柔らかな日の光を目蓋に浴びせられるのを感じながら、少年は自らの意識が覚醒していくのを自覚する。

起きなければと自身を促すが、朝のまどろみの前に少年は叶わず、自分の傍から感じられるずっと嗅いでいたくなるような芳香と、自分の体を圧迫するも心地よい柔らかな肢体、そして自分よりも若干高めな人肌の体温に誘われ、少年は眠りの園に落ちていく。

そんな少年の多少の動きを感じたのか、少年の体を抱き枕にしていた少女は、そのまるで太陽のような輝きをした瞳をゆっくりと覗かせながら、枕にしていた少年に身を寄せる。

そして、そのまま少年の体温と匂いをまるで自分の中に取り込もうとするかのように、または少年の存在に自身の存在を刻みつけるかのように身体全体で少年の身体に擦り寄る。

数瞬後、少女はその光り輝く宝石の如き美貌を少年の顔に寄せ、啄ばむように何度も、何度もキスをする。

少年は自身の唇に少女の唇が何度も交わるのを感じ、再び堕ちていた眠りの園から自身を引き揚げ、手を伸ばせば届く少女の陽光の如き金砂の長髪を指の間に通し、少女の髪を弄びながら、お返しとばかりに自身からも唇を少女の唇に押しつける。

少年が眠りから覚めたのが少女にも分かり、まだ名残惜しかったが唇を離し、少年に挨拶をする。

「どうやら目が覚めたようだな……透」

嬉しそうに目を細め、少女は黒髪黒瞳の少年、鳴神透の頬にキスをする。

「朝から随分と過激な挨拶だね、フィン」

透は苦笑しながらも、フィンの額にキスをする。

「うむ。妻として夫に対する当然の行為だな」

フィンはそれを誇りに思っており、誰かに譲る気は毛頭ないといわんばかりの声だ。

「朝からそんな過激だと我慢できなくなるんだけど」

「我慢することはないぞ。妾のすべては透のものだからな。ならば透の欲望を受け止めるのは当然のことだ」

透は男にとって歯止めが利かなくなりそうな台詞を平然と言うフィンに多少頭が痛くなるような気がしたが、まあいいかと……そんな彼女を受け入れると決めたのは自分であり、離れるという考えが浮かばないので一向に構わないと結論付ける。

「それに関しては後にするとして、とりあえず朝食にしようか」

もっとかまってほしいフィンとしては多少の不満を感じないでもないが、透のいうことも尤もなので、それに従うことにした。

「それでは、後でちゃんとかまうのだぞ」

そういつて、フィンは大きめのベットから降り、身嗜みを整えるために自身の部屋に向かっていった。

透はそんなフィンの後ろ姿を見送りながら、もう片方のぬくもりに対して声をかける。

「リーネもさっさと起きるように」

「まだ眠い」

リーネと呼ばれた少女、ひびきりんね響鈴音はそう言って、透の方に身を寄せ縮こまった。

透はそんな少女の行動にため息をつきながらも、優しく揺さぶりながら少女の起床を促す。

「あまりみんなを待たせる訳にもいかないだろ」

透はそう言って鈴音を起こそうとする。

鈴音は苦笑する透をちらっと見て、

「じゃあ……私も」

鈴音は何かを待つように唇を若干突き出す。

透は唇を突き出す鈴音を見て、先ほどまでフィンとしていた行為を鈴音が見ていたのを悟る。おはようのキスをしない限り起きそうもないと観念して、鈴音と軽く口づけを交わす。

鈴音はキスをされたことに満足したのか、えへへとにやける顔を見せ、透に抱きつく。そして彼女も身嗜みを整えるために部屋から出て行った。

透はやっぱりあいつもフィンに負けず劣らずの甘えん坊だな、と苦笑し自身も朝食を摂るため身嗜みを整える。

透が朝食を摂るためにリビングに来てみると、そこには既に先客がいた。

「おはよう。ノルン、ルーナ」

透は一月前からの付き合いの同居人二人に挨拶する。

「おはようございます」

先に挨拶を返してきたのは、ノルンⅡベルウルド。

彼女は現在、確認されている四つある世界の内の一つ、カノンフイルの和平派の筆頭議員であるスルドⅡベルウルドの一人娘。

彼女の付き人曰く、空前絶後の絶世の美少女であり、どんな美辞麗句でさえ彼女を表現できないとのことだ。

彼女の容姿は付き人の言うとおり、言葉では尽くすことはできない。いや、言葉にしてしまえば彼女を貶めてしまう。人間として理想的だと思われる顔のパーツの大きさと配置、女性の黄金比を表したかのようなスタイルの良さ、澄み渡る蒼穹の蒼でさえこれほどの色彩を出せないのではないかと思われる腰のあたりまである蒼髪と蒼穹の瞳。その顔は常に無表情ではあるものの、それさえも魅惑的にさえ感じられる。

「……お、おはようございます」

今にも消え入りそうな声で返してきたのが、ルーナⅡドラニコル。彼女はガイアノークの龍皇族族長、ソルガⅡドラニコルの娘で双子の姉。

彼女もノルンほどではないにせよ、十分美少女であるが、常におずおずとした態度で、そのせいかいくらか魅力を落としている印象を受ける。

彼女の髪は白銀色に輝き、肩口のあたりまで伸びており、瞳は紫紺。彼女の身体は透達と同年代であるはずだが、まるで十三〜十四

歳あたりではないかと思われる、未成熟な身体が特徴的だ。

二人に挨拶をし、席に座るとさほど間をおかず、先ほどまで同じベットで寝ていた二人の内の一人が入ってきた。

「皆、おはよう」

今にも鼻歌を歌いそうな声で挨拶をしたのが、フィンⅡヴェルデイン。

彼女はヴェルディンの王族の第三王女で、今現在王不在のため最高権力を持つ宰相、ラグナⅡヴァーラスの養女となっている。

彼女はまるで太陽のような色鮮やかさを持つ金髪、金色の瞳が相俟って、光り輝くような絶世の美少女である。

そして、彼女は名目上は透の婚約者であるが、彼女は一向に気にせず妻を名乗っている。

そのフィンにやや遅れて入ってきたのが、響鈴音。

透と同じアースフィア（透達は地球と呼んでいるが、三界ではそう呼ばれているためそう呼ぶのが通例となっている）の出身で幼馴染。透は彼女の事を呼びやすいという理由からリーネと呼んでいる。夜のような黒の長髪、黒い瞳を持つフィン達と同じ位の美少女だ。そして、他の三つの世界から認識されている数少ない人物の一人で、彼女も名目上は透の婚約者であるが、フィンと同じく妻を名乗っている。

そして全員が席に着いたのを見計らっていたかのように、フィンの付き人であるルキⅡネルトウスが朝食の用意をする。

「では、皆さま朝食にいたしましょうか？ 今日には四界が初めて協力し合って造り上げた研究学園都市アカディアの入学式なのですから。皆さまはその代表としてしっかり精を付けてもらわなくては。……特にフィン様、あなたは生徒会長なのだから、立派に役目を果たさなくてはなりませんよ」

そう諫めるルキにフィンは胸を張り、踏ん反り返る。

「任せておけ。妾はその役目をしっかりと務めるぞ。……昨夜もしっかりと可愛がってもらい精気を養ったからな」

頬を少し赤く染め、透をちらっと見て、昨夜のことを思い出したのか黙り込んだ。

そんな可愛らしく、弄れば面白くなりそうなフィンに目をキラんと輝かせて、種火を大火にするためにからかい混じりに面白そうに言った。

「透様に口にするのを憚るようなことを、一晩中ねっちよりぬっちよりくっちよりされたと……いけませんよ、透様。フィン様はまだ開発途中。女性を自らの色に染めてしまいたいという殿方の気持ちはわからないでもありません。今はまだあせらず、じっくり、ゆっくりと蓄を愛で、しかるのちに大輪の花を咲かせるのです……なんでしたら調教の仕方を教示してくれる本等をご用意いたしますが」

「いや、そこまでしていませんよ。それにずっと傍に置くつもりですから焦っていません。……後、何かの参考にもなるかもしれませんし、一応用意してもらえませんか？」

「かしこまりました。最高級のものををご用意させていただきます」

そう答えた透にルキは面白くなりそうだと、にんまりとほほ笑んだ。

「妾は調教されてしまうのか!？」

顔をさらに赤く染め、フィンはやがて来るであろう己の未来に戦慄した。

「いやなら、やめるけど」

「いや……その……妾のすべては透のためにあるのだ。だから……その、透の色に染まってしまうのはむしろ本望ではあるのだが……できれば、優しく頼む」

これ以上赤くなれば倒れてしまうのではないと思われるほど、顔中を真っ赤に染めている。もじもじとしながら、次第に声が小さくなつていくもすっかりと透に届くような声量で自分の意思を透に伝える。

そんなフィンに透はクラッとさせられ、釣られる様に透の顔も赤く染まる。

「わ、私も透君のすることなら何でも受け入れるよ！」

張り合うように声を挙げる鈴音に透は若干の冷静さを取り戻して、場を取り繕うように咳をする。

「その話はまたその時に、ということだ」

そう締めくくった透に、ノルンの呆れが多分に混じっている、刺す様に冷たい氷のような視線と正反対に湯気が頭から出ているようなオーバーヒート気味なルーナの姿に、透は冷や汗を流しながら、朝からするような話ではなかったと反省した。

こんな日常がこの家では会合した一月前から続いている。

現在において、四界は表面的な平穩を保たれているが、およそ五年前まではそうではなかった。

今現在はカノンフィール、ヴェルディン、ガイアノークと分かれているが、この三つの世界は元々同じ世界の出身である。

それが分かれてしまったのが、いわゆる権力闘争が元になっている。幸か不幸か、その敗北者たちの出身世界、カノンフィールは非常に優れた科学技術を持っていた。そしてその技術の内の一つ、異世界を渡る術が敗北者達を別の世界に渡らせた。敗北者たちはそれぞれ渡った先で各々の理想とする世界を築きあげていった。

大抵は渡っていった世界で環境を整えていくのが先決で、元々いた世界、カノンフィールに干渉せず、ガイアノークのように独自の文明を築くのが定例であった。

その例外がヴェルディンである。ヴェルディンでは力を信条としており、カノンフィールで敗北したことが認められないでいた。また渡っていった世界の環境が良くなかったためか、カノンフィールを宿敵とすることでモチベーションを維持し、カノンフィールへの再戦をヴェルディンは国策の中心とすることによって、国家を維持していった。

そしてヴェルディンが環境を整える一環として実施していたのが、他世界の搜索であった。

世界を渡る術を持っていたとしても、人が暮らせるような環境を持っている世界は稀であり、見つけるには相当の根気と運が必要であった。

そうしたヴェルディンの搜索が実を結んだのか、発見されたのがガイアノークとアースフィアであった。

発見されたガイアノークに対して、ヴェルディンは支配下に置くため侵略を行った。

ガイアノークは元々同じ技術を有しており、幾ばくかの年月の差

か、若干科学技術が劣っていたが、魔法技術は独自の進化を辿っていた。そのためヴェルデインの侵略に対し、始めのうちは抵抗できていたが、次第に状況が悪化し、支配下に置かれることとなった。

そしてヴェルデインのもう一方の侵略対象であるアースフィアは圧倒的な差でその勝敗を決した。

ヴェルデインとアースフィアの戦いは科学技術が劣り、さらにアースフィアではまだ実験段階に過ぎなかったため魔法技術が大きく劣っていた。戦らしい戦にならずヴェルデインの大勝となった。

そうして、力をつけたヴェルデインはカノンフィールに過去に受けた屈辱を晴らさんとカノンフィールに戦いを仕掛けた。

ヴェルデインとカノンフィールの戦いは仕掛けた当初、ヴェルデインが優勢であったが、ガイアノグがカノンフィールと密約し、カノンフィール側に着くことによってヴェルデインは劣勢となった。そしてその状況を打破せんとヴェルデインが行ったある実験の結末によって、四界は闘争から共存へと転機を迎えたのだった。

四界研究学園都市アカディアの入学式の一月前、透と鈴音は鈴音の母親である、響風音ひびきかざねに今後の予定を聞かされていた。

「何故、一月も前からアカディアに移動するんですか？」

「それはね、先方からの頼みだからよ」

突然のことに驚き問い質した透に風音は彼女の容貌、雰囲気と同様なふんわりと間延びした声で答える。僅かに波打つ彼女の漆黒の髪が揺れる。

学園都市アカディアはその特殊性から、入学試験時より大きく篩にかけられる。

例えば、アースフィアでは三界の魔法技術を学ぼうと各国が躍起になって各国の次代を担うエリートを送り込もうとしている。

しかし、選考基準は学園都市理事長の一人、ラグナ・ヴァーラスがその権限を強く持ち、また他の二界も同等の権限を持っている。

だが、三界ともアースフィア各国の思惑を多少は汲んではいるが、基本的にアースフィアという枠で彼らは判断しており、ある一つの国を覇占するなどということは全くしない。三界にとってアースフィアは文明がかなり劣っている世界であり、同じ土俵に立っているとは考えられていない。

そんな事情もあってかアカデミアはアースフィアの世界中の一般枠からも公募しており、アースフィアの主要国の中から一、二人程度はアースフィア各国の推薦した人材を入学させることを許可しているが、大半は一般枠からの募集である。

また、アカデミアの入学資格者は一定の年齢に達していることが条件とされており、下限は十五歳相当、つまり義務教育終了程度であり、上限は成年相当とされている。

これは四界の年齢の基準は誤差があるため、年齢によって入学できないものを少なくするためとされている。

さらに、アカデミアに入学した時点でその人物の処遇はアカデミアによるものとされ、四界の各々の干渉は制限される。

技術的に劣っているアースフィアにとっては是が非でもその恩恵を少しでも多く被りたいと思っているが、他の三界にとっては一時的な休戦の理由として受け入れられており、他世界の分析、および自世界の補強に労力を注いでいるのが三界実情でもある。

四界にとって共通しているのは、そこに送り込んだ人材をどう扱うのが最善なのかという、将来的な人材の処遇が問題とされている。透と鈴音はある事情から四界から注目を浴びており、その入学が既に決定事項となっていた。

故に二人にとっては入学することではなく、何故他の者たちよりも一足早くアカデミアに移住することになっているのかを問題とし

ただ。

「ママ、先方の頼みって？」

「それはね、鈴音ちゃん達に生徒会を運営してもらうことになって
いるから、そのメンバーとの顔合わせ。後、生徒会を運営するにあ
たって、覚えてもらうことがたくさんあるから、一足先に移動して
学園都市での生活に慣れてもらうことになったの」

「「え!？」」

そんな風音の突然の言いつけに二人は驚かされ、何故自分達がと
半ば答えを予測していたものの確認の為に問い質してみる。

「アースフィアには俺達よりもふさわしい身分の人がいるでしょう
？」

「確かにアースフィア内ではそうだけど、これから行く場所はそん
なものが通用しないところに行くからね」

アースフィアという枠を見ている三界にとって、アースフィアは
文明後進国であり、アースフィアの地位は低い。

また国の数も多く、アースフィア内では文明の発展の差は大きく
とも、三界からすれば五十歩百歩であることから、区別することが
面倒だというのが本音であり、覚えるのは一部の個人で十分とされ
ている。

その覚えられている個人に数えられているのが、透、鈴音、風音
である。

ふんわりとした雰囲気には惑わされるのだが、風音は学園都市内部
において他の三界との交渉役の一人として他の三界に指名されてお

り、アースファイア勢において最も権限を持っている運営スタッフの一員である。

そんな風音の事情を知っていたので、透は尤もだと頷き、いつ移動するのか、準備するものはないのかと話を促した。

「それに関しては、これからあちらとお話するから……はい、これ」

そういつて、風音が出したのは宝石らしきものが埋め込まれたシンプルな形状の指輪であった。

「これは？」

「メモリーリングといつて、学園都市ではこれを常に身につけていなくてははいけないわ。これが学園都市での身分証明品で、生活必需品でもあるの。例えば、言語の翻訳だったり、システムの起動認証だったり、支払い手段だったりね」

学園都市では四界が共に生活する。アースファイアを除く三界は言語、通貨といったものは元々同じ世界であったためか誤差はほとんどない。

しかし、アースファイアと三界は言語、通貨、法と異なるものが多々挙げられる。特にアースファイアが世界規模でその違いを有していたので、一元化を図らなければならなかった。

その統一手段がメモリーリングに搭載されており、学園都市に住むのであればその手段であるメモリーリングをつけることは必定といえた。

「使い方を説明するわね。そうねえ、中指にメモリーリングを嵌めてくれる？」

透と鈴音は言われた通り、適当に右手の中指に嵌めてみる。

「メモリーリングにある宝石が光れば登録完了ね」

しばらく待ってみると、メモリーリングの宝石部分が光を発した。

「後は宝石を見つめるなり、触ったりして宝石に意識を集中させてメニューと声に出して言ったり、心の中で唱えたり、あなた達ならエーギルを流したりすれば画面が投影されるはずよ」

指示に従うと、いくつかの項目が出ている画面が目の前に投映された。

「これって目の前に表示してるの？」

鈴音はアースファイアの技術をはるかに超える三界の技術を目の当たりにして、少し茫然自失となるも、これが現在どのような状態にあるのかを確認する。

「いいえ。外部からは覗くことはできないわ。でも、画面に公開か非公開かのどちらかを選ぶ項目があるはずよ。それを決定するには画面に触るなり、どちらかにするという思念を送ればできるはずよ。あ、閉じるには閉じるという項目があるからそれに触るか、閉じると思念を送ればいいの」

鈴音が確認したい、と透を見ていたので透はメニューを閉じる。合図すると鈴音の前に画面が浮かんでいた。透は覗きこんでみる。

「見える？」

「ああ、俺と同じ画面だ」

鈴音は透の言葉を確認すると非公開にし、メニューを閉じる。

風音は二人がメモリーリングの基本的な動作を確認したのを把握すると、時間を確認するため時計の方を見る。

約束された時間が迫っていたので、迎えが来る旨を二人に伝える。それを聞いた二人は時間が来るまでメモリーリングの項目について確認したりして時間を潰した。

そうして時間を潰していると、来客を告げるチャイムが鳴ったので風音が来客を迎えるため玄関に向かった。

玄関に来客を迎えた風音が行きとは異なり、一人分の足音を伴い居間に戻ったのだが、二人は若干目を見張ることとなった。

なぜなら、風音の後ろにはセミロングの薄桃色の髪をもつ美人のメイドさんがいたからだ。

「二人に紹介するわね。こちらはルキネルトウスさん。見ての通りメイドさんよ」

紹介されたルキはエプロンドレスのスカートの端をつまみ丁寧にお辞儀をした。

「本日お迎えにあがりました、ルキネルトウスでございます。私の事はルキとお呼びください。透様、鈴音様、これから長い付き合いとなります。末永く宜しく願いたします」

挨拶された二人はメイドというルキに若干驚いたものの、すぐに落ち着きを取り戻し挨拶を返す。

挨拶をし終わった四人は迎えに来たルキを先頭に玄関に向かい、

靴を履く。

そして外に出て玄関の施錠を確認すると、ルキは三人を見て相手を安心させるかのようにほほ笑み、これから移動する旨を伝える。

「どういった移動手段をとるんですか？」

「私共にお任せください。では、三秒ほど目をつむっていただけですか？」

そう言われて三人は目を閉じた。

ルキは目を閉じたのを確認すると秒読みをする。

「3、2、1、目を開けてください」

透達が目を開けてみると、周囲の景色が一変していた。

外にいたはずなのに目の前には見るからに重厚な扉があり、その脇にはルキが微笑を浮かべながら立っていた。周囲を見渡すと何処とは知れない建物の中の廊下であることが分かる。

鈴音の方を見ると哑然としており、三界の技術が自分達の想像の遥か上を超えていることは既に分かっていたが、こうして身をもつて体験するといやでも実感させられる。

風音は既にこのことに慣れていたのか、全く動揺はなかった。透達が見ているのに気づくと、前を見るように促す。

透達が落ち着いたのを見計らうと、ルキはゆっくりと扉を開けた。

「では、皆さまこちらへご入室ください」

そうして部屋の中に入室すると、

「透！」

天使の鐘のような可憐な声とともに黄金の塊が透に飛びついた。

透は飛びつかれた衝撃で尻もちをつくも、柔らかなクッションが衝撃を抑え、襲われるはずだった痛みは感じなかった。

飛びついたものの正体を確かめると、それは太陽のように光輝く美少女であり、どこか見知った少女であった。

見知った少女ではあるが、年月の経過と共に姿も変わっている筈であり、本人かどうか戸惑いを覚える。

だが、透は己の中のエーギルが歓喜に震えるかのように活性化されるのが分かった。五年前に似たような現象が起こったのを思い出し、その時知り合った少女の面影が目の前の少女と重なる。いや、記憶のままの少女だった。——確信した。

「フィン」

自然とその名前が出た。

透が彼女の名前を呼ぶと、フィンは感情の赴くままに、二度と離れないように、ぎゅっと身をさらに寄せ抱き付いた。

「もう一度会えるのを何度夢見たことか……もう二度と、二度と離れぬぞ」

柔らかな肢体も天使の鐘のような声も身体から感じられるエーギルの波動も、フィンを構成する存在の何もかもが透の身体に何の違和感もなくスーッと染み込んでいった。

透も自らの感情が赴くままフィンを抱きしめ返す。

「俺も会いたかったよ、フィン」

心が歓喜に震えるのを止められなかった。

自らの半身ともいえる存在に優しく、穏やかに自分も会いたかったのだと告げる。

同じ気持ちでいたのが嬉しかったのであろう。フィンとは花が満面に咲き誇るかのように、見るだけで幸せになれるかのような満面の笑顔だった。

透はそんなフィンを見て己を抑えきれず、その柔らかな唇に自分の唇を近づけていった。

フィンは透の行動の意味がわかったのか、そっと目を閉じる。その姿は、やがて来る幸福が訪れるのを静かに待つかのようだ。

唇が交わった瞬間は、もはや言葉では言い表せなかった。いや、これは心に刻みこめるものであって、言葉に表すのは無粋というものだろう。

余韻を味わっていると、後ろから生存本能が訴えられるような禍々しいオーラと地獄の底から響く声がセットになって一人の人物から発せられていた。

「と・お・る・く・ん・な・に・を・や・っ・て・る・の・か・な？」

阿修羅がいた。

顔は笑っているが、目は全く笑っておらず、夢を見れば確実に悪夢となって魘されるのは間違いがない雰囲気をもつ阿修羅がいた。

うん……今すぐ逃げ出したい。追われるのはわかりきった結末だろうけど……逃げたい。というか、土下座してもいいから逃がしてほしい。

透が軽く現実逃避をしていると、その存在に若干怯えつつもフィンを話しかけていた。

「む、そこにいるのは鈴音ではないか。久しぶりだな。これからよろしく頼むぞ……妾は透の妻になるのだから」

それを聞くと鈴音はまるで般若のような顔をして、渡さないと言わんばかりに後ろから強く抱きついてきた。

「駄目に決まってるでしょ！ 透君のお嫁さんは私なんだから！」

「何も問題はない。ヴェルディンでは複数の妻を持つことは珍しくはないのだから」

それを聞くと鈴音は口籠った。

「妾としては透の傍にいらればそれでよいのだ。妻でも、愛人でも、奴隷でも……形なぞどうでもよい。他人からどう思われようと透の役に立ち、透に可愛がってもらえれば、妾はそれで幸せなのだ」

フィンはそれを胸を張り、堂々と誇るように言った。

鈴音はそんなフィンに気押され、透にどうするかを尋ねた。

「俺としては一向に構わないけど……幸せになるなら二人より三人の方がいいからね」

鈴音は透の言葉に何か思うことがあるのか、さらに強く抱きしめるだけでそれ以上何も言わなかった。

「さて、話をしてもいいかな？」

声をかけられた方を見ると、にやにやと笑ったり、唾然としている複数の人がそこにいた。

透は何処にいたのかをすっかり忘れていた。自らの失態を誤魔化すようにすぐさま立ち上がった。それに伴い、二人も立ち上がったが、二人とも離れる気配は一切なかった。

「腰をかけるといい」

そう言われてテーブルを中心に四方に配置されており、空いている座り心地の良さそうなソファに腰がける。隣には当然、といわんばかりに二人が座る。

「まずは、自己紹介といこうか。私はラグナ・ヴァーラス。ヴェルデインの宰相であり、研究学園都市アカディアの理事長だ。そして隣に控えているのが、妻のフィレス。君の隣にいるフィンの母親だ」

そういつて二十台前半の年齢であろう金色の長髪でやや細めの美青年は隣に座る、フィンを成長させ儚げな雰囲気になればそっくりになるであろう絶世の美女の腰を引きよせた。

「そして君達の左にいるのが」

言葉を区切り、撫でつけた蒼髪を持つ紳士然とした青年を見遣る。

「カノンフィール副議長スルド・ベルウルドです。こちらは娘のノルン」

双方信じがたいほどの美形で、ただ座っているという仕草だけでも周囲を華やかにしていくようだった。

「右にいるのが」

「ガイアノーグ龍皇族族長ソルガッドラニコルよ。儂に続いて、妻のプリティ、双子の娘のルーナ、ステラだ。どうじゃ、愛らしからう？」

人が想像しうる大男というイメージを凝縮させたかのような筋骨隆々たる銀髪の巨漢は、その厳つい顔にある顎鬚をさすりながら自分の血族を自慢した。

確かに愛らしかった。愛らしいことには変わらないのだが、彼女たちの容姿は一人を除き非常に幼かった。

妻と紹介されたプリティはその身長も相俟って、ソルガの娘といわれても何の違和感もない。

娘達の方はルーナの方が父親似の白銀の髪、ステラの方が母親似の紫銀の長髪である。ステラが透達と同じような年だと思われるような容姿であるのに対し、ルーナの方はそれより数歳ほど幼い容姿をしている。

自己紹介を終え、これからが本題とラグナは口を開いた。

「さて、ここに来た理由を教えられたのかな？」

そう問われ、首を横に振りここに来て話すと言われたと告げる。

「なるほど。では説明するでしょうか。君たちの知っての通り、四界は戦争状態にあったが、現在は平穏を保っている……五年前からね。私としては停戦を結んだこの機を逃したくなかった。そして実を結んだのがこの研究学園都市アカディアだ。もちろん、ここにいる者達の協力がなければ果たすことはできなかったことだ」

「ヴェルディンでは反対意見はなかったんですか？」

「もちろんあったよ。むしろ、今現在でも反対派が多数ではある。」

しかし、国王であったフィンの父親が逝去したことで国内が不安定であったこと――そして、決め手となったのがフィンだ」

ラグナはフィンを見る。フィンはこくりと頷き、誇るかのように言った。

「ヴェルディンでは力の強きものに従う。故に妾が和平に反対する者を無理やり黙らせたのだ。和平が叶わなくては透に会うことができなかったのにな……全ては透の妻となるためだな。透……褒めるがよい」

透はフィンがすごく褒めて欲しそうなので頭を優しく撫でてみた。フィンが気持ちよさそうに目を細め、擦り寄る。もっと褒めてと主張するかのように。尻尾があるとするならば、千切れんばかりに振っていた事だろう。

ラグナは甘えるフィンを優しく見つめ、話を続けた。

「彼女との利害が一致してね。私は彼女を義理の娘にすることで今の地位に就くことになったと言っても過言ではない」

ラグナは自嘲気味に笑う。彼とて自身の力ではなく、掠め取るような結果になった事に不満がないわけではないが、確かな結果が眼前にある以上認めないわけにはいかなかった。

「彼女はヴェルディンでは最強といってもいい。故にしばらくはこの情勢が続くだろう。しかし、情勢というのは不安定なもので如何様にも向きを変えてしまう。だからこそ流れを調整するものが必要となった。それが研究学園都市アカディアであり、今日君達を呼んだ理由でもある」

「どういことですか？」

ラグナに透が問うと、画策しているような笑みを浮かべる。

「君達に生徒たちを統べる生徒会をやってもらう」

透は状況から臆げではあるが、理由は推測できるものも念のために聞いてみる。

「君とフィンとの関係が一番の理由だよ。仲良くしていこうというのに、トップが不仲というのはおかしいからね」

透は苦勞しそうな役職に頭が痛い思いがするのか、顔を顰める。

「一月も前にこちらに來させたのはそれが理由ですか？」

「それも理由の一つだが……もう一つの理由として君達……フィン、透君、鈴音君、ノルン君、ルーナ君には同じ家に暮らしてもらう」

透は言われたことに処理が追いつかず、茫然としてしまった。
だが、右の方から信じられないとばかりに怒声を上げた存在がいた。

「何じゃとおおおお！！ 儂は聞いておらんぞ！」

目を血走らせ、ソルガはラグナに詰め寄る。耳を塞ぎたくなるほど大声を上げるソルガに顔を顰め、冷静になるようにとソルガを慰めている。

「私が許可しました」

みっともなくうろたえる夫にうんざりし、プリティはため息をついた。

「ど、どういうことだ、プリティ。儂の可愛いルーナに男と一つ屋根の下で暮らせと言うのか！」

「ええ、その通りです。というか、貴方がそういうと思ってこうして黙ってたのですよ」

「いやじゃい、いやじゃい！ 儂は娘達と暮らすんじゃい！」

「……いい大人が駄々をこねるんじゃありません」

「儂は反対するぞ。泣くぞ。喚くぞ。駄々をこねるぞ。いーやーじやー！」

「……いい加減にしないと……しばらく放置しますよ？」

「頼む！ それだけはやめてくれ！ 儂はかまってくれないと寂しくて死んじゃうぞ」

「じゃあ、聞き分けなさい」

「……じゃが、じゃが……」

「……最後通牒ですよ」

プリティが譲歩してくれないと悟ったのかソルガは部屋の隅に行き、メソメソ泣き始めた。

シユールな光景だった。夫婦の関係であるとはいえ、彼の巨軀の半分もない女性に終始彼は尻に敷かれていた。

子供のように駄々をこねる髭面の巨漢。矮軀の女に叱られる巨軀の男。幼女に縋りつく大男。

あり得ない光景に軽く現実逃避する。

二の句も告げないでいると、プリティが見苦しいところを見せたと詫げる。

「何故彼に事前に教えなかったんだい？」

ラグナが尋ねるとプリティは朗らかに笑いこう言った。

「こうなることが目に見えていたことと……場を和ませようと思つて」

場が和んだかどうかはさておき、少なくとも場の雰囲気はある意味一変したともいえよう。

「まあ……話を続けさせてもらおうよ」

ラグナは取り繕うように話を進めていった。

「君達と一緒に暮らすのは、君達が生徒会役員であること。そして、同じパーティーメンバーであるため友好を深めて欲しいことが理由に挙げられる」

透は聞きなれない単語が出てきたので鸚鵡返しに尋ねた。

「ここは名目上では四界について学び、四界の平和のために役立てる人材を育て上げることと新しい技術の共同開発を銘打っている。

しかし、實際何を学べるかという点と難しい問題を孕んでいる。誰もが他世界の技術を欲しがっている。だが、自世界の機密技術を晒したいなどとは思っていないだろう。……そうになると授業として学べるのはかなり制限されてくる。そこで授業として取り上げられるのが各世界の文化と魔法技術だ。アカディアの授業形式は二通りとなる。まず、各世界の言語と文化を学ぶ座学形式。次にこちらが用意する仮想世界で課題に取り組む実践形式。大きく分けてこの二つだ。先ほど言ったパーティーメンバーとは実践形式で組むメンバーのことだ。メンバーの最低人数規定は各世界から一人ずつの四人、最高でも八人のパーティー。メンバーは以前までの情勢を顧み、初期メンバーはこちらがランダムに決めるが、君達は同じパーティーにする。理由はわかるよね？」

理由は透達が生徒会役員になることと一緒だろう。五年前まで戦争状態にあったのだ。例えば和平の証として学園都市が造られたとしても、そう上手くいくものではない。そこに入学するのであれば多少は協力的ではあるだろうし、平和を作り続けようとはするだろう。しかし、敵であったものを受け入れることなど人として情情的に難しい。だからこそ、トップに透達を据え、形から入らせることによって不和の解消のきっかけとするのだろう。……同居させるのはその一環ということだ。

有効的な策であるので、了承の旨を伝える。

「では、後日迎えをよこそう。家と家具はこちらで用意するから君達は着替えなどの最低限の荷物でもかまわないよ。それと生徒会として必要な書類やその他の資料もその時に渡すよ」

この場はこれで解散となった。

「それでは、また会える時を楽しみにしておるぞ」

フィンは嬉しそうに言い、頬にキスをして離れて行った。
透は後ろから刺すような視線が痛かった。

その日の夜。

荷物を纏め、後は就寝だけとなったのだが、控えめにノックがされた。

部屋の扉を開けると、そこには何か言いたげな鈴音がいた。

部屋に招き入れ、鈴音が口を開くまで待つと、恥ずかしそうに頬を染め、今にも消え入りそうな声で懇願してきた。

「一緒に寝ていいかな？」

一緒に寝ること自体頻繁とは言えないけれども、珍しくはなかった。透は承諾の意を唱えた。

共にベットに入り、鈴音の温もりと柔らかな肢体を感じながら彼女の髪を梳く。

しばらくその状態が続き眠気がしてきた頃、ぽつり、ぽつりと話しかけてきた。

「透君、いいの？」

言葉が欠けていたが彼女が何を言いたいのかわからないわけではない。

「フィンのこと？ 俺としては五年前から彼女のことも受け入れるつもりだったから、今回の申し出は正直ありがたかったかな」

実際問題、ヴェルディン王女とアースフィアの住民では恋仲になれる訳もなく、婚姻関係になることは夢のまた夢、妄想もいいところだろう。それに……。

「それもそうだけど……フィンちゃんは……正確には三界は……透君の両親の仇でもあるんだよ」

彼女の言うことは一部正解でもあるが、一部間違っている。透にとっては自分の両親と鈴音の父親が死ぬきっかけとなった五年前の実験では、実験の暴走の遠因とはなったものの、直接的な原因ではなかった。それから透は響家に引き取られることとなったが、別に実験に対しても、四界に対しても、両親の死に対しても透は何の感情も抱いてはいない。自分でも冷酷ではあると思うのだが、物事――特に人間の感情に由来するものに対し、感情を排し、あるがままに受け入れ冷静に評価する癖がある。物事を理解するためのただの一つの情報として、感情を処理する。そこから導き出された結果、自分の中ではたいした問題ではないと五年前の実験に対して評価している。基本的に自分はある事柄以外に対し執着心が薄いと自分を分析している。

「リーネ……そういうことを言いたいわけじゃないだろう？」

「……うん。私は透君がフィンちゃんに盗られたくないだけだね」

盗られたくないといわんばかりに鈴音はしがみつき、自嘲していた。

「リーネ……それは違うかな」

「違う？」

「うん。漫画や小説なんかで三角関係というのはよく取り上げられるだろう？」

「私たちみたいに？」

「そう……板挟みにあった男の主人公はどちらかを選ぶ。女はその男を取り合う。俺はああいうのは好きではないね」

「どうして？」

「特に全員が親しい関係があるのに対して思うんだけど……どうしてみんなで幸せになる結末を選ばないのかなって？」

「それが最も認められる形だからじゃないの？」

そう……アースフィアの大抵の国では一夫一婦制をとっており、一夫多妻制をとっている国はほとんどない。透達が暮らしている国は一夫一婦制であり、鈴音の考えが正常であり、透の考えの方が異常なのだ。

「そうだね……でも俺はリーネともフィンともこれから一緒に思い出を重ねていきたい……リーネがいない生活も嫌だし、フィンがいない生活も嫌だ。俺は三人で仲良く過ごす世界がいい」

そういつて透は優しく微笑みかける。鈴音は目を逸らし、言い淀む。

「でも……」

「俺は場所……そうだな、家みたいなものだよ」

「家？」

「そう……家。住んでいる人が安らげるように保護し、ありのままにいられる場所。もちろん誰でも招くわけではないけど、居たいのなら誰でも住める場所……リーネ、もしお前が自分だけを愛してほしいと思うのなら、俺はやめた方がいい。俺は誰か一人だけを愛し、他の誰かを拒絶することはしない。俺は俺の傍にいたいという人がいて、その人を受け入れると決めたら何人でも受け入れる」

鈴音は透が譲らないと悟ったのだろう。言葉に詰まり、自身の思いに考えを巡らすかのように悩んでいた。

やがて、諦めたように溜息を吐く。

「ねえ、透君。私が透君の傍にいたいって言ったら受け入れてくれる？」

「もちろん。ただし、他の人も受け入れるという条件付きだけど」

「……最低な答えだね」

「自覚してる。……でも、変える気はないよ」

「……仕方ないか……透君」

「何？」

「傍にいてもいいんだって……安心できるように、私に透君のものだって証を刻んでくれる？」

「リーネが安心できるまでいくらでも刻んであげるよ」

鈴音の可愛い懇願に応え、透は優しく証を刻んでいった。

透君が私に優しく触れ、私に証を刻んでくれている。

透君に私だけを見てほしいと思う気持ちは確かにある。でも、私がそういえば透君は私を拒絶するだろう。拒絶されるくらいなら受け入れられる方を選択するのがベターだろう。

私には透君から離れるという選択肢はない。私だけを愛してくれる人を探す気もない。仮にいたとしても、私は透君を選ぶのは間違いない。

なぜなら、私にとって透君は切り離せない世界だからだ。

私は五年前まで身体が弱く、外出することは滅多になかった。私の両親と透君の両親は私の身体を良くしようとナノマシンの研究に没頭した。両親達の研究で世界はマナで満ちていて、それを操作できれば物体に干渉できると判明していたからだ。ヴェルディンという実例があったことがそれに拍車を掛けたと言ってもいい。

私の身体が弱いため、交代で顔を見せていたが、基本的に研究の方を優先していた。薄情と思われるかもしれないが、私の身体を根本的に治す方が得策だと思ったのだろう。それに、万が一の時の為に透君が私の傍に常にいた。

私の記憶には透君が必ずいて、彼がいないときの記憶はおぼろげだ。最早私にとって透君は私の一部であって、切り離そうとは思わない。

六年前、ヴェルディンの人が両親の研究を自分達に活かすべく私達に目を付けた。両親は私の身体の治療を条件に研究に協力した。

それから全てが変わる契機になった五年前の実験。

実験の暴走には多くの人が巻き込まれたが、私とママは自宅で待機していたので助かった。ママは何が起こったかはわかっているが、私は知らない。知っていることがあるとすれば、透君とフィンちゃん以外助かった人はいないということだけだ。

あれから私達は人目を忍ぶように暮らした。幸い、私の身体は治療の甲斐もあって健康体となった。ママは度々どこかに姿を晦ました、透君は私の傍にいた。

透君は時折、どこか遠い処を見るような眼をしていて、私は置いていかれないように必死にしがみついた。彼はしがみつく私を振りほどくことはなかったが、どこか寂しげではあったと思う。きっとフィンちゃんの事を思っていたのだろう。

透君は今、寂しげな雰囲気をしていない。フィンちゃんに会ったからだろうか？もし、フィンちゃんと反対の立場になれば彼は同じようになってしまうだろうか？

このような事を思っても仕方がない。彼の心の片隅に私を置いてくれるのならば、今はそれでいい。いずれ彼が私を切り離せられない一部だと思ってくればそれでいい。

透君は私が傍にいたいと思っているならば、置いてくれるのだ。ならば、これからも傍にしよう。

――ずっと傍にいるつもりだから覚悟してね！

第二章 これからの日常

これからの生活を祝うかのような快晴の中、透と鈴音はこれから住むことになる住居に目を向けた。

外観はテラス付きのやや大きめの一軒家で、十人程度は軽く住めそうであった。

家の所々は三界の技術を用いているのだが、習慣等は特に不都合はないらしく、透達に合わせることもなったとのことだ。

玄関で待ち伏せていたフィンに案内がてら部屋の配置について透達は尋ねた。

「妾達の個室は二階で、リビングなどの共用施設は全て一階だな。個室には簡易ではあるがバス・トイレがついておるぞ」

「どの個室を使っているの？」

「どの部屋も今は空いておる故、どの場所でもかまわんぞ。ただ、透の部屋の位置は決まっておるがな」

「どこ？」

「うむ、案内しよう」

案内されたのは二階の奥の部屋で他の部屋に比べて大きめな部屋だった。

「ここが透の部屋だ。妾の部屋は隣にある……いつでも夜這いに来てもよいぞ」

羞恥のせいで耳が赤くなっているが、それでもはっきりと透に伝えるフィンに透はなんとなくほほえましい気持ちになるも部屋の確認と、着替えが入った荷物を置いたため指定された部屋に入ることにした。

鈴音は向かいにすると伝え、自室になる部屋に入って行った。

部屋に入ると机やクローゼット、ベッドなどの家具しかなく、まるで豪華ホテルの一室のような部屋だった。

——ある一点を除いて。

透は疑問を解消するべく、真相を知っているだろう後ろの人物に尋ねる。

「フィン」

「む、何だ？」

「なんであんなにベットは大きいのかな？」

そう、問題にしたベットはシングルサイズではなくキングサイズほどの大きさのベットである。

「うむ。妾だけが夜伽をするのであれば、シングルでもよいのだが、場合によっては鈴音も混ざるやもしれんからな。その場合大きい方が何かと都合がよからう」

うんうん、と頷くフィンを見て透は脱力しそうになるが、フィンの言うことも尤もなので文句を言わず、別のことを口にする。

「あれだけ大きいと一人で寝る時寂しくなりそうだな」

「安心せよ。けして一人では寝かせぬ」

抱きついてこい、といわんばかりに腕を広げるフィンに毎日一緒に寝るのかと言いたくなかったが、藪蛇が出そうなので何も言わないでいた。

「うわ、おっきい！」

荷物を部屋に置いてきたのか、鈴音がフィンの後ろに立ち、同じくキングサイズのベットを見て驚愕していた。

「三人でも一緒に寝れるようにだって」

鈴音が意味を悟ったのか顔を真っ赤に染め黙り込んだ。

「荷物が運び込まれるまでテラスに行ってお茶でも飲もう」

透達がフィンの勧めに従ってテラスまで降りていくと、ルキがタイミングを見計らったかのようにお茶会の準備をしていた。

「既に知っておると思うが紹介するぞ。妾達の使用人のルキだ。ルキには妾達の世話をしてもらうことになっておるので何か用事があれば言いつけるがよいぞ」

「お世話をさせていただくルキでございます。どうか遠慮なさらずなんなりとお申し付けください。……夜のお世話でもかまいませんよ」

からかうようにんまりとした笑顔で、過激な発言をしてくる。その煽りを受けてかフィンが負けじと言う。

「妾が受け持つから問題ないぞ」

「それでしたら、殿方を誘惑する秘訣をご教授いたしますね」

「う、うむ」

おほほほ、と真っ赤なフィンを慈しむように見守り、後は透達に任せようと一歩引いて給仕に勤しむ。

しばらく談話に花を咲かせていると、誰かが来たのか来客を告げるベルが鳴った。

来客はルキに任せ、茶をすすりながら誰が来たのかと待っていると、ノルンが従者を連れてテラスに来た。

「皆さま、これからよろしくおねがいます」

無表情ではあるが優雅な仕草でお辞儀をする。そして透達に自分の従者を紹介した。

「こちらは私の従者のメリル・ルリエルです」

ノルンに紹介されたのは生真面目そうな顔立ちをした浅葱色の髪をしたショートカットの美少女だ。ノルンに紹介された彼女は、一歩前に出て耳を疑うようなことをその口から発した。

「ノルン様の肉奴隷であるメリル……きやうん！」

聞き間違いかな、と思うようなことをメリルが発した瞬間、ノルンが素早くメリルの足を刈りとり、体勢を崩させ、メリルの身体を地面に叩きつけた。

「……何を言ってるのかしら？」

「ああ……ノルン様に踏みつけられ、冷たい瞳で蔑まれ……ノルン、感じちゃう！」

信じられないことを言う己の従者に冷たい瞳で見下し、顔をぐりぐりと踏みつけるノルン。

そんなノルンの仕打ちを恍惚と受け入れ、今にも昇天しそうな表情をするメルルを見て透達の心は一つとなった。

——ためだ、こいつ！

透達の無言の訴えに気付いたのか、ばつが悪そうにノルンは謝罪した。

「この子が変態ですいません」

「変態じゃありません！ ノルン様専用の変態です！」

どちらにしても変態じゃないか、とつつこんだがメルルにとっては違うらしく、どう違うのか憤慨しながら説明した。

「いいですか！ 私がマゾであることは否定しませんが、誰にでも苛められて感じるマゾではありません！ ノルン様に苛めてもらうからこそ、私は昇天するのです！ いいですか！ ノルン様に苛められる、ここが重要ですよ！ 例え苦難が待ち受けていようと、ノルン様にご奉仕できることを思えば、不肖このメルルルリエル、あらゆる困難を越えて見せましょう！ ノルン様に尽くすこと、これこそ我が運命！ ノルン様最高！」

何やら熱弁しだしたメルルに透達一同は頭が痛い思いがした。

重苦しい空気を発しながら、ノルンはメリルに部屋を整えるように命じた。

了解いたしました、とすぐに二階へと駆けていった。

なんとも言えないような空気が漂っていたが、透達は雰囲気を払拭すべくノルンと一緒に茶でも飲んで、話でもしないかと誘った。

誘いを快く受けたノルンを加え、話をするが、やはり話題となったのはメリルのことだった。

「邪険に扱うわけじゃないけど、どうしてメリルちゃんがノルンちゃんの従者なの？」

鈴音の問いに、なぜだか若干驚いたように思えるノルンは愚痴混じりに応えた。

「以前から私に従者をつける話はあったのですが、なにかと理由を付けて断わっていました。その理由は省かせていただきますが、学園都市が設立し、入学が決定事項となってからは、父の強い勧めもあってか断ることはできず、従者を募集したのです」

一息つくように紅茶を飲み、話を続けた。

「しかし、募集が殺到し何かと面倒だったので篩をかけるべく、厳しめの試練を与えたのですが……その中で最も優秀な成績で試練を越えたあの子を断ることはできず、仕方なく採用したのです」

当時を思い出したのか遠い目をしたノルンにフィンが疑問を投げかける。

「ふむ、元からそうだったのか？ それとも、その時に目覚めたのか？」

「いいえ、その時はまだ生真面目な子でしたよ」

確かに外見、雰囲気はその名残があった。もはや総崩れだったが……。

「私に付いた当時、正直あの子が疎ましくて自分から辞めるように扱いたのですが……それをいつのまにか快楽に感じるようになって……」

重苦しい溜息を吐いたノルンに何も言えず、陰鬱な雰囲気を払拭しようとは話題を変えた。

これから一緒に住むことになるので、お互いの趣味や各々の世界の習慣について談話していると野太い声が玄関から聞こえてきた。

「ルーナよ！　パパは寂しいぞ！　いつでもパパの元に帰ってきていいからな！」

気になり向かってみると、そこにはルーナにしがみつくソルガが居り、まるで今生の別れのように号泣しながら娘との別れを惜しんでいた。

「見苦しいところをお見せしてしまって申し訳ありません」

同行してきたプリティがソルガの見苦しい姿を詫びる。

すると、透達に気付いたのかソルガが威圧感を伴って脅してきた。

「娘に手を出すと承知せんぞ！　ああん！？」

「いや、出しませんよ」

「何い！　こんなに可愛いルーナを目の前に手を出さんとは！　お主についておるのか！？」

強面を前面に出して脅すソルガに手を出さないと抗議するも、手を出さないと言えば手を出せと言わんばかりの言葉に、透はどうすればいいという心境になった。

大人げない態度をするソルガにプリティは制裁すべく背後に回り、その折れそうなほど細い腕をソルガに突き刺した。

――尻に。

その衝撃は如何ほどであったか、悶絶して崩れ落ちるソルガを一瞥し誰もいない空間に話しかける。

「後は頼みましたよ、ハティ」

「承知いたしました。奥方様」

そこに現れたのは犬耳、犬の尻尾が生え、ぶかぶかとした服を着た長い前髪を持つ茶髪の女性だった。

ハティは自分が注目されているのを察すると、恥ずかしそうに姿を消した。

「あら……恥ずかしかったのかしら。皆さん、彼女はハティⅡマーニルム。娘のルーナともどもよろしくお願いしますね。彼女、いつも姿は見えないけど、ルーナの傍には大抵いるから何かあれば呼んでくださいね」

プリティはどこから取り出したのか鎖を手握っており、その鎖はガイアノークの人々が例外なくつけている首輪に繋がっていた。

「では私たちはお暇します。……お互いの同意の上なら手を出してもかまいませんから」

過激な発言を残し、プリティは去っていった。

——気絶したソルガを引きずりながら。

あの人達と関わりと場が一変するな、と透は思いながら顔を真っ赤にしたまま固まるルーナに声をかけた。

「ひゃい、な、なんでしょうか!？」

先ほどプリティにかけられた言葉を気にかけているのか焦り、言葉を囁むルーナに中にいるルキに空き部屋はどこかを尋ね、そのあと一緒にお茶会に加わらないかと透は尋ねた。

「わ、わかりました」

ぎこちなく足を進めるルーナに微笑ましく思え、透達は彼女を加えたお茶会を開催すべくテラスに戻った。

その後ルーナを交えた歓談を終え、部屋を整えた後、仲良く皆と食事をした透は現在、フィンに風呂場で背中を流してもらっていた。なぜそうなったかという点、フィンはルキに夫婦仲を発展させ、保つ秘訣として一緒にお風呂という魅力的な提案に食いつき、実行した次第だった。その提案が出された時、フィンと鈴音がどちらが先にするかと揉めたが、今日は一緒にお風呂がフィン、一緒に寝るのが鈴音で明日はその逆と二人は協定を結び、今後は基本そのローテーションでいくことになった。

フィン は 背中 中 に いる た め 姿 は 見 え ない が、最 低 限 を タ オ ル で 隠 し た フ ィ ン を 見 て い た た め、理 性 が が し と 削 ら れ、今 す ぐ に も 襲 い か か り た い 衝 動 に 駆 ら れ て い る。

透 が 我 慢 し て い る と 背 中 の 方 を 洗 い 終 え た の か、フ ィ ン が ま だ 洗 っ て ない 部 分 を 洗 う べ く 前 方 に 来 る。

先 ほ ど か ら 恥 ず か し さ の た め か、お 互 い 最 低 限 の 言 葉 し か 交 わ さ な か っ た が、フ ィ ン の い つ も は お ろ し て い る 髪 を 結 い あ げ て い る 姿、女 性 を 象 徴 す る 触 れ ば 離 し た く な る よ う な 綺 麗 な 半 球 を 描 く 胸、そ し て 淡 い 先 端、し っ か り と く び れ た 曲 線 を 描 く 腰、程 よ く 引 き 締 ま っ た 脚 線 美、真 珠 の よ う な 白 く な め ら か な 肌、一 つ で も 男 を 惑 わ す よ う な 裸 に 理 性 が 保 た れ て い る 間 に 大 事 な 問 い を 問 い か け る。

「フ ィ ン、本 当 に 俺 で い い の？ 今 の お 前 な ら 誰 で も 振 り 向 く と 思 う よ」

フ ィ ン は 視 線 を そ ら さ ず、真 摯 な 声 で 透 の 問 い に 答 え た。

「透 よ、妾 が 求 め る の は 透 だ け だ。有 象 無 象 の 輩 な ど ど う で も よ い。妾 は 透 だ け に 尽 く し、愛 せ れ ば そ れ で よ い。透 以 外 は 何 も い ら ぬ。妾 は 存 在 そ の も の が……い や、足 り ぬ な。妾 は 魂 に 至 る ま で 全 て 透 の も の だ！ 故 に 妾 は 捧 げ ら れ る も の す べ て を そ な た に 捧 げ よ う。透 よ、受 け 取 る こ と を 拒 否 す る こ と は 許 さ ぬ ぞ！」

透 は 彼 女 の 一 点 の 曇 り も ない 熱 い 思 い に 嬉 し く な る。

「フ ィ ン……す ぐ く 嬉 し い よ。……お い で」

フ ィ ン は す ぐ さ ま 透 に 飛 び つ く。

「ね え、フ ィ ン……俺 が 地 獄 に 行 く と し た ら ど う す る？」

「透が地獄に行くならば妾も行くまでよ！死ぬ時は一緒だ！」

フィンの全身全霊の愛の言葉に応える言葉は一つだった。

「フィン、いつまでも一緒にいよう……愛してるよ」

「妾も愛しておるぞ」

誓いを交わすように透達はキスをした。

全身が火照り、痺れるような快楽が身体中に駆け巡る中、フィンは目の前にいる優しい顔をやる男が自分の全てだと自身の心から次から次へと溢れてくる思いに従い、確信していた。

思えば彼と過ごした時間は異なる時間の中で過ごした時を除けば、一週間にも満たない。しかし、短い時間ではあったものの、今この胸にある熱き思いが根付くには十分であった。

過去を振り返れば、現在では最強と言われているが、幼かった頃は欠陥品と言われ、蔑まれてきた。だからこそ、自分と母親を周囲に認めさせるため、我武者羅に力を追い求めていた。

この可愛くない口調も虚勢を張るため、誰これかまわず噛みついていて時に身に付けた。いまさら他の口調に戻すことは難しく、透に直した方がいいかと皆でお茶を飲んでる時に尋ねたが、透は『俺としては意思を伝える際の飾り付けた口調などどうでもいいかな。意味が通じるのであればそれ以上のことは気にしない』と、今の自分を肯定する言葉を掛けてくれた。嬉しかった。

自分達の力は先天的なものに依存しており、後天的に身につけられるのは戦闘技術、制御法、と力の底上げに多少役には立ったが、

力もつ者が認められるヴェルディンでは他の者も他者に蹴落とされないように、力を身につけるので差が埋まることはなかった。

だからこそ、妾は藁にもすがる思いで、一応安全といわれていたが未知の実験だったため効果が果てしなく疑わしい実験のモルモットに志願したのだ。

透とはそこで出会った。

透は実験のもう一人の志願者で、彼は実験責任者の息子だった。

妾と透は実験の成功率を上げるため、三日程寝食を共にしたが、当時の妾は今ほど余裕を持たず、一方的に透を嫌い受け入れようとしなかった。

何の因果か、当初の目論見とは違っていたが実験は成功し、妾は最強と呼べる力を手に入れた。

実験が成功した理由は、いや多数の者が巻き込まれ、その中には当時の妾を軽く超える父上やカノンフィルの戦士達がいたにもかかわらず、生還できたのが妾達だけだったのは、おそらく透の適性が異常なまでに適合していたからだろう。妾一人では決して成功できず、力の無さを嘆きながら実験の暴走に巻き込まれた者達同様消えていっただろう。

妾が透を愛するのを理由づけるのであれば、透のおかげで力を身につけたからではなく、あの時成す術もなく絶望していた時に、常と変わらない在り様に心を揺り動かされ、力もなくみつともなかった自分を受け入れてくれたことだろう。

——そして、妾の全てが透に再構築された。

この時、妾は透に自らの全てを捧げようと決めたのだ。

妾の思いは誰に非難されようとも、困難が阻もうと必ず成し遂げる。邪魔するものがいれば滅ぼしてくれる！

妾の願いは叶った。後は一秒でも長く続かせるだけだ。

——ああ……お互いの身体を洗いあった時から疼きが止まらぬ。溢れださんばかりの思いが身体中から零れてくる。本能が目の前を男を求めよと咆哮する。

透、これ以上耐えられぬ。――早く鎮めてくれ！

透はフィンに膝に乗せ、頭を撫でながら湯船につかっていた。

お互い息を整えながら、居心地の良さに身を委ねているとフィンから奇妙な笑い声が漏れてきた。

「むふ、むふふふふ」

「変な声をあげてどうしたの？」

「なに、透に可愛がってもらえて嬉しさが止まらぬのだ」

フィンはにやける顔を止めようとはせず、己が心中を吐露した。

「ああ……止まらぬ、止まらぬぞ」

フィンは透の背中に手を伸ばし、抱きつくと透の胸に自分の胸を押しつけた。

「透、聞こえるか？ 妾の鼓動が。伝わるか？ この思いが」

透はフィンの鼓動に意識を集中させた。フィンの思いが伝わってくるような気がした。

それと同時に、フィンの柔らかな胸も意識してしまい、一部がひどく反応した。

フィンはそれを察すると、透の耳に顔を寄せる。

「妾はかまわぬぞ。いつでも妾を求めるがよい」

艶めかしく誘うフィンには出会った当初よりも色気があった。

透は誘いに乗るのもいいかなと思ったが、フィンの体調も気にかかったので名残惜しくはあるが断ることにした。

「さすがにフィンもきついだろうから今日はやめておくよ。……慣れてきたら、遠慮なく可愛がるけどね」

フィンは気にしなくてもいいのにと、頬を少し膨らませたが、透が自分を気遣ってくれて嬉しさがこみあげてくるのでさらに強く抱きついてみる。

「透、透……甘えてもよいかな？ もっと甘えるぞ？ 甘えさせろ！」

「いくらでも甘えていいよ。男としては甘えてくれた方がいいからね」

「うん！」

——この時、甘えん坊將軍フィンが爆誕したのだった。

フィンがゴロゴロと甘えていると、フィンの脳裏にルキから教育された“殿方への御奉仕の仕方全集”が浮かんできたので、実行してもいいかと尋ねた。

透は了承してもいいが、その前に聞きたかったことがあったので聞いてみる。

「そういえば、フィンとルキってどんな関係？」

「ルキはラグナ殿の義娘になった時から世話になっているメイドで、

その時から度々透へ奉仕するにはどうしたらいいのかと相談に乗ってもらっていたのだ。ちなみにルキはメイドであることにこだわりの持っているようなので、それ以外の呼び方を嫌っておる。なのでメイド以外の呼び方をするでないぞ」

「へえ、そうなんだ」

フィンは待ちきれなくなったのか催促する。

透はそんなフィンに苦笑し、奉仕するようにとフィンに命令した。

「うむ、任せよ！」

「……ほどほどにね」

「安心せよ。鈴音の分はちゃんと残しておくぞ！」

透はフィンがひどくはりきっていたのでそれ以上何も言わなかった。

透とフィンがにやんにやんしていた頃、ラグナ達は記念という名目で宴会を開いていた。

「さて、まずは学園都市成功の一步を辿ることができたことを祝って乾杯しよう」

ラグナが音頭をとり、互いにグラスを重ねあった。

「儂としては複雑この上ないが、酒を目の前にしてこの憂鬱は失礼に値するな。景気づけに飲み干すとするか」

ソルガはグラスに入った度の高い酒を一息に飲み干し、次の一杯を飲み干すべく酒瓶を片手に持ち次から次へと飲み干していった。

「あまり、飲まないでくださいね。後始末が大変なんですから」

「なに、固いことを言うな。儂はプリティがおるからこそ遠慮なく飲めるのだ」

ソルガから寄せられる信頼に悪い気持ちかせず、照れ隠しなのかプリティはソルガと同じように次々と飲み始めた。

「しかし、できる限り手を尽くすつもりだが、本当に大丈夫なのか？」

スルドは酒を少しずつ飲みながら、ラグナに肝心要の要素は大丈夫なのかと尋ねた。

「心配いらないさ。少なくともフィンと透君が仲睦まじければ、いくらでも手は打てる」

「おう……それよ、それ。貴様を疑うわけではないが、奴はあの化物を本当に抑えられるのか？」

ソルガの言う化物とはフィンのことである。ソルガとしても化物呼ばわりしたいわけではないが、瞬く間に制圧していったフィンを形容するにはこの言葉しかなかったのである。

「貴方、失礼ですよ」

「うむ、すまん」

娘を化物と言われたフィレスとしては、憤慨すべきところではあるのだろうが、客観的に見るならばソルガの言葉は的を得ているのでフィレスは口を噤んでいた。

「そこは安心していいよ。フィンは透君の意にそぐわぬことは彼に危険が迫る時以外にはしないからね」

「そうになると、問題は彼か……仮に、彼に危害を加えようとしたらどうなる？」

「間違いなくフィンは危害を加えようとするものを滅ぼすだろうね。彼が殺されようものなら世界を滅ぼした後、自害するのはありえないことじゃない。……もつとも、彼が死んだら後を追うことは確実だが、世界を滅ぼすかどうかは半々だけだね」

重苦しい空気が場に漂っているが、スルドは聞かなくてはならないうことがあったので、振り切るようにフィンの行動を推測できるであらう目の前の男に尋ねる。

「では、彼が世界を望めば？」

「フィンは世界を征服するだろうね」

あつけらかんと言うラグナに頭痛がするが、できる限りの手を打っておきたいスルドは情報を得るべく、仲良く女性同士三人で場に固まっているその一角、風音に透の性格がどのようなものか尋ねた。

「そうねえ、透ちゃんなら……まあ、興味無いでしょうね」

「興味無い？」

「ええ。彼なら『面倒くさい。そんな時間があるなら、こいつらといちやいちやする』って言って鈴音ちゃん達とラブラブするんじゃないかしら」

場の雰囲気吞み込まれず、のほほんとした風音の態度にスルドは毒気を抜かれた。

「彼らに関しては手を出さないのが得策だよ。むしろ、問題なのは私達の方ではないかな？」

スルドとソルガは己たちの世界の現状を指摘され、口を噤んだ。確かにラグナの言うとおりだった。

五年前まで戦争状態にあったのに学園都市などというものが短期間にまかり通ったのは、フィンが存在に各世界が頭を痛めたからだ。アースフィアは言うに及ばず、カノンフィールとガイアノーグ両軍合わせても彼女には及ばない。いや、できるかもしれないがその時は壊滅状態にあるだろう。現に、ヴェルデインのトップの不在を好機と捉えた両世界はフィン一人に返り討ちにあっている。

世界が隔たっている三界の戦争は、各世界に乗り込んで破壊活動を及ぼす類のものではない。各世界を繋ぐ道の途中にある人が住めない荒涼とした、なりそこないの世界で行うものである。

もちろん、各世界に乗り込むことは可能である。過去、アースフィアは乗り込まれ、瞬く間に敗北した。

しかし、三界は元々同じ世界の出身であり、有している技術も大差ない。その技術の中には、乗り込ませないように世界を閉じる技

術があり、侵攻するルートはそれゆえに限られていた。

だからこそ必然とも言うべきか、三界では各世界に乗り込み、対象を選ばず破壊するのではなく、戦いは侵攻ルートを制圧する軍だけに限られていた。

そこを制圧したものが勝者であり、被害を拡大させないために敗者は投降するのが習わしだった。

圧倒的なまでにフィンに屈服させられた両軍は、学園都市などというふざけた提案を吞まざるを得なかったのだ。……その心中は別として。

学園都市というさしてメリットというべきものがないものを、諸手を挙げて喜んでいるのはアースフィアぐらいのものだろう。

今現在、停戦を結んでいるが種火はいくらでも残っており、いつ大火になるかわからない自世界を認識している二人は慎重にならざるを得ないのだった。

「私達は別に過去に起きた戦争が過ちであり、二度と繰り返さないために学園都市を築きあげたわけではない。各々が和平であった方が都合がいいから協力しているだけだ」

そうだろう？ とラグナは共犯者である二人を見る。

ラグナの言うとおりであった。二人には各々目的があり、ラグナと共に学園都市を和平の象徴として盛り上げることで、自分の世界に協力を呼びかけたのは、そっちの方が都合がよかったからだ。いや、学園都市を成功させることでしか目的を達せられないと判断したからだ。

「……確かなな。儂らには成さねばならない目的がある。儂は、目的が達せられるならばいくらでも手を汚そう。……貴様らにその覚悟があるか？」

ソルガは覚悟を試すかのように二人を睨みつける。

「上に立つ者として既にその覚悟は済ませている。私は私が最良とする未来を手にするために手を惜しむ気はないよ」

「ようやく巡ってきた機会だ。必ず僕は成し遂げよう。……利用する彼らには悪いとは思うが、彼らにとっても悪い話ではないからそれで勘弁してもらおう」

スルドとラグナは引くつもりはないとソルガに毅然と応じる。

そんな二人に気を良くし、ガイアノードで誓いを交わすときの儀式をしないかとソルガは持ちかけた。

二人は首肯し、説明を待った。

「簡単なことよ。お互いの血を交えた酒を飲む、それだけよ」

「酒がまずくなりそうな儀式だね」

「なに、気にするな。ほんの一滴程度だ」

ソルガは軽く指を切り、酒が満ちた三つのグラスに血を垂らす。二人はそれに倣った。

そして、三人はグラスを持ち、誓いを共にするかのようにグラスを合わせた。

「では、誓いを共にし、必ずや目的を成し遂げることを誓って！」

ソルガは音頭をとり、三人は血が混じった酒を飲み干した。

「よし！これで儼らは運命共同体だ。さうて、飲み明かすぞ！」

ソルガは三人のグラスに酒を注ぎ、酔いつぶれんとばかりに次々と酒を飲み干した。

ラグナとスルドはソルガに続き、酒を飲み、騒ぎ出した。

女性陣はそんな男達の騒ぎあいに、溜息をつきながらも彼らの乱痴気騒ぎを話のタネにし、親睦を深めていった。

ちなみに、彼らが翌日二日酔いに悩まされることになったのは言うまでもない。

透達は親睦を深める一環として、ルキからの提案で学園都市郊外にある草原地帯に足を進めていた。

メンバーはルキを除く全員であるのだが、相も変わらずハティはその姿が見えなかった。ルーナが言うにはちゃんとしてきてるらしい。

透の両腕には鈴音とフィンがくっついていて、歩きにくいことこの上ないのだが、時が経つにつれお互いの歩調を知り、共に歩くことに慣れるだろう。

そして後ろには、ノルン、ルーナ、メリルが透達の歩調に合わせてついてきている。

「ノルン様。私達も腕を組みませんか？」

何度断れても諦めることなく誘うメリルに感心するも、やはりというかノルンは相も変わらず無表情にメリルをあしらう。

最初の頃はまだ返事をしていたが、今は面倒になったのか無視を続けている。

「やっぱり、どこもまだ準備中だな」

そう、都市中でなく草原地帯に行くことになったのは単に都市がまだ完成していないからだ。

ここ、学園都市アカディアは四界が交わるところだ。

しかし、戦争状態にあったのはまだ記憶に新しい。

そこを顧みて、アカディアは無秩序に入り混じった都市構造ではなく、はっきりと四つに区分された都市構造となっている。

中央には四界が交わる象徴として学園があり、そこから四方に大通りの道が敷かれ、その間に各世界の街が建造されている。

学園の近くには各寮が建てられており、生徒の大半はそこで暮らすことになっている。

ちなみに、俺達の居住は学園敷地内部にある。

そして、都市の郊外にはそれぞれ大規模な地帯が存在している。

北には草原地帯、東には丘陵・山岳地帯、西には海岸地帯、南には森林地帯と分かれている。

自然的にあり得ない光景ではあるが、ここアカディアは人工的に造られているので、このような場所を造ることも可能だということだ。

郊外はいわば、生徒達の演習、娯楽といった様々な目的のために設置されたとのことだ。

「生徒達の入寮が始まる頃には準備が終わるとのことだ」

フィンが透の呟きに応じて、適当な答えを返してくれた。

「いつぐらいになるの？」

「うむ。丁度入学式の一週間前程度だな」

「へえ、楽しみだね。じゃあその時はみんなで街中を探索しようよ」

鈴音とフィンは性格的に似ているところが多々見られ、昨日のお茶会の時から仲がいい。いわゆる気が合うというものだ。

「それは良い提案だな。その時を楽しみにしておるぞ」

「透君との二人きりのデートも混ぜようね」

「うむ！」

よく物語的にはここでちょっとした修羅場が起こるのだが、二人は透の意を汲んでか喧嘩せず、透を共有の物と認識していた。

「ルーナちゃん達はどうする？」

鈴音は後ろにいるルーナ達に透と二人きりでデートするのかと聞いているのだろう。

「え、えっと……ボクは……」

ルーナは口籠り顔を俯かせている。知り合って間もない男とは、やはりそういったことはしたくないだろう。

「そういったものも親睦を深めることになるのでしょうか？」

逆にノルンは面倒というか、したくはないがしなくてはならないのか、とデートは義務的なものかと尋ねてくる。

「うーん。あくまでパーティー単位での親睦が大事だから個人的な

ものはしなくてもいいんじゃないかな？」

「そうだな。そういった個人的なものはしたくなったらすればいいのではないか？」

フィンがそう締めくくりこの話題についてはこれで終わった。

都市を見下ろせる位置でルキお手製の弁当を食べ終えた透達は、昨日と同じくゆったりと歓談していた。

こうやって都市の全容を見ると各世界の街の特色が出ているようにも思える。

カノンフィールは優美な装飾が目立つ建造物が多い街。

ヴェルディンは華美な装飾ではないが合理的で質実剛健な建造物が多い街。

ガイアノーグは樹や花といった自然と一体化した街。

そしてアースフィアは主要国がそれぞれの自国を強調した混沌とした街。

景観を眺めてみると各世界がどのような思想をもっているかわかるようだった。

草原を駆け抜ける清らかな風と後頭部に感じるフィンの太腿の感触が透に実に良い心地を提供していた。

フィンがどうしてもやってみたかったらしく、こうして身を委ねているのだ。

鈴音は鈴音で透を枕にして寝転がっている。

なんだか人と話すような姿勢ではないのだが、ノルン達は早くも透達の行動に慣れたらしく普通に話している。

透としてもなんだか、水を差すような真似で言いたくはないのだが、実習でいずれ知っておかなくてはいけないことなので聞いてお

くことにする。

「魔法について聞いておきたいことがあるんだけどいいかな？」

「魔法のことですか？ ある程度のことは知っているのでは？」

確かにノルンの言うとおり、透達は他のアースファイアの住人に比べ、魔法について詳しく知れる立場にいる。

「そうだけど……魔法についての情報の齟齬があるかもしれないだろう？ パーティーを組むことになっているから知っておいた方がいいかなと思って」

それもそうですね、ノルンは返答し、考え込んだ。どこから話すべきか、どこまで話していいかと考えているのだろう。

そんなノルンの考えを断ち切るように、フィンが話し始めた。

「では、妾が全て包み隠さず説明しよう」

「待ってください。何を話すべきか相談しておくべきでは？」

ノルンの言うことは尤もである。三界の軍事力は基本的に魔法であり、それに伴う技術が三界の機密事項となっている。自らの生命線を簡単に話すべきではないとノルンは指摘しているのだ。

「妾も他のアースファイアの住人なら概略程度しか話さん。だが、二人は別だ。透が妾の夫であることもそうだが、二人は妾達と同じ……いや、初期型にアースファイアの技術が加わったのがこの二人と云えよう」

ノルンは目を見開き、どういふことか詳しく説明しろと詰め寄る。

「聞いておらんのか？」

「あまり詳しくは……父なら詳しく知っているのでしょうが」

「ふむ、そうだな……透達への説明を進めながら話そうか」

フィンはこほん、と喉の調子を整え、説明し始める。

「まずはそうだな……妾達が魔法を使えるようになったきっかけから話すことにするか。元々、妾達は魔法を使えたわけではないのだ。アースファイアの住人と同じだったと言ってもいい。にもかかわらず使えるようになったのは、医療技術の副作用で偶然手にしたといってもいいだろう。……アースファイアと同じようにな」

「医療技術の副作用？」

「その通りだ。魔法を使える以前はアースファイアの大半の国と同じように、銃器がメインの兵器だったのだ。……だが、民間でも広く使われており、それを悪用しての犯罪も多かった。故に、それを防ぐ、もしくは撃たれたとしても治療が間に合うように開発された医療技術が魔法の元となったのだ」

「そういえば、簡単に侵略された理由の一つに銃が無効化されたってあったっけ」

「当然だろう。そのために開発されたのだから。威力が強めであれば効果はあるのだ。……もっとも軍上層レベルではほとんど意味がないがな。こっちの民間でもハンドガン程度なら同じ結果となろう」

フィンは水筒から紅茶を取り出し、喉を潤してから話を続けた。

「で、その開発された医療技術というのが透達も知っておる、ナノマシンのことだ」

「あれ？ でもあれって体調を整えるためのものじゃ」

鈴音は自分の体内にあるものにそのような効果があったのかと驚く。

「それも機能の一つだな。確か、透と鈴音の両親は鈴音の身体を治すために妾達とは違うナノマシンを開発したのだったな」

そうなのだ。鈴音は今でこそ健康体だが、五年前までは常に体調を悪くし、床に伏せている時間がほとんどなのが彼女の人生だったのだ。

「じゃあ、私もフィンちゃん達と同じような魔法が使えるってこと？」

「訓練すればな。ただし、鈴音はまだ馴染んできたばかりだ。妾達のように何代も重ね、適合し、改良し、遺伝子レベルまで馴染ませた妾達に比べれば、たいした魔法は使えないだろう。良くて妾達の世界の民間レベルではないか？」

「そっかあ……」

鈴音は少し落胆しているようだ。

「透よ。今までの話もそうだが、これから言う話は特に注意しておいてほしい」

フィンは真剣な眼差しで透を見下ろしている。

「わかった。で、何？」

「妾達の体内にあるナノマシンの機能の一つに体調を整えるというものがある。これは保持者を健康体にするだけでない」

フィンは区切り、ゆっくりと透達に言い聞かせる。

「透。見てきたのならばわかるだろうが、妾達の母親を含め、三界の住人は外見が若すぎのではないか？」

フィンの言うとおりだった。彼、彼女らは精々20代程度にしか見えなかった。

「想像はつくだろうが、ナノマシンには保持者の身体を最善にしようとする。代謝行為は行うが、老化は含まない。いや、老化はするがエーギルで補填するといってもいい。少なくともナノマシンがある限り、外見的には老化しない」

確かにこれは公表すべきことではないだろう。いや、いずれは察するだろうが彼らのナノマシンが軍事機密事項に値するものならば、決してアースフィアに渡すわけにはいかない技術だ。このことはいずれ大きな問題となるだろう。

フィンは技術的なものもそうだが、何より透達のことを心配しているのだろう。アースフィアがこのことを知れば何としても透達から、そして三界の一般生徒から情報を引き出そうとするだろう。…

…手段を選ばずに。

だから了承と感謝の気持ちを込めて、軽くフィンの頬に手を添え、撫でる。

フィンは透の行動の意味がわかったのか、うつとりと受け入れ、なされるがままになっている。

「じゃあ、老衰ってないの？」

鈴音の言葉にフィンは我を取り戻し、説明に戻った。

「あるぞ。意味合いが異なるがな。妾達は悪意を持って行動しない限り、死にくくなかったと言っても過言ではない。……だが、寿命と縁が切れたというわけではない。妾達は老化はしない。だが、外見に表れないだけではおるのだ。ここでエーギルで補填すると言ったことと関係するのだが、妾達の寿命はそれと関係しておる」

「どうということ？」

「妾達のナノマシンがエーギルを保持しておるといったが、個人差はある。保持量、生成速度、変換効率といったものがな。先ほども言ったが、妾達の身体はナノマシンで保護されておる。だが、老化し始めるころから妾達の身体は……ナノマシンが保持しているエネルギーを妾達はエーギルと便宜上呼んでおるのだが、エーギル体に徐々に変換されていく。その時、保持量、生成速度、変換効率が身体に追い付かなくなってくる頃から痛みを発してくる」

フィンがそういった時、ルーナがビクン、と動いたが透は気にしなかった。

「痛みに耐えられなくなった時、その時がいわゆる、妾達の寿命で

習わしとして自殺することになっておる」

「自殺!？」

鈴音は自殺という物騒な言葉に狼狽している。

「妾達のナノマシンにはいつでも自殺できるように、自殺プログラムが内蔵されておる。これは己の意思以外では決して作動することはない」

透にとってすれば、自殺という言葉には嫌悪感を発しない。意見の是非はあるのだろうが、透は肯定的な方だ。生きたいのであれば生きていればいいし、死にたいのであれば死ねばいい。個人の人生はその人個人のものだ。故に生死に関することその人が決めるべきだと思っている。……周囲の人のこともあるのだろうが、死んだ者には何の関係もなくなることだ。そういったことも含めて自殺したいのであれば自殺すればいい。透にとっては大事なのは個人の意思なのだ。

「そうになると、エーギルが多ければ多いほど寿命が長いってことかな」

透の問いにフィンにはこりと答える。

「そうだ。……透。妾の全ては透のものだ。透以外のものになるつもりはないし、透以外の誰かに変なことをされようものなら妾は跡形もなく消滅する。透、そなたが死ぬなら妾も死ぬ。だから透だけは決して妾より先に死なないでほしい」

フィンは何の気負いもなく告げる。

「わかった。好きにすればいいよ。……いざというときは一緒に死ねばいいだけだしね」

「その時は私も一緒だね」

と、鈴音も輪に加わる。透達はそのを当然とばかりに受け入れる。

「妾達ヴェルディンにとって、長く生きることはいしたことはない。如何に生きるかが問題なのだ。妾は愛する者のために生きる。今のこの状況は妾にとっての至福の時間だ。妾にとってこれほど嬉しいことはないぞ」

透達が説明そっちのけでいちやつきだしたのにうんざりしたのか、ノルンが呆れ声で俺達に戻ってきなさいと言う。

「嬉しくてつい忘れておったぞ。……今までが機密事項で、これらが一般……つまり学園で公開される魔法についての説明に入るぞ」

「魔法の使い方ってこと？」

「うむ。まずは、言葉で説明することにすることにしよう。ナノマシンが生成し、保持しているのをエーギルというのだが、魔法を使用する際はこれは二種類に分けられる」

「二種類？」

「うむ。魔法を行使する際、エーギルを加速させるのだが体内に向けるか、体外に向けるかの差だな。便宜上、体内に向けるものをフオース、体外に向けるものをエーテルと呼ぶ。そして、この優先す

る魔法の度合いがそのまま各世界ごとに異なっておるのだ」

フィンはノルンを見た。ノルンはフィンの意図を察し、自世界の魔法について説明し始めた。

「カノンフィールとヴェルディンは基本的に一緒なのですが、カノンフィールはエーテルの方に重きを置き、精密な制御を優先します」

「ヴェルディンは両方使うが、エーテルは制御よりも瞬間的な破壊力だな。ただ、ガイアノーグは妾達とは事情が違っておるのだ」

ルーナは自分を落ち着けるようにゆっくりと話す。

「ガイアノーグではほとんどフォースを使います。なぜならボク達はエーテルの制御が苦手で、身体から少しでも離すと通常時ではエーテルが霧散するからです。その代わり、ボク達には獣化と呼ばれる特殊な戦闘方法があります」

「獣化？」

「はい。これは種族ごとに異なるのですが、自身の種族に応じた姿になることで戦闘能力を上げます。……制限時間がありますが」

「ルーナなら龍ってこと？」

一瞬ルーナが怯えたような気もしたが、ルーナは透の質問に答えた。

「はい。ハティなら狼ですね。数ある種族の中で龍皇族がガイアノーグで纏め役になっているのは戦闘能力が一番高いからです」

「そういえば、呪文なんかは唱えないの？」

リーネは能天気な漫画とか小説でみられることについて質問する。

「呪文？ ……ああ、アースフィアの文化でよくあるアレか。……結論からいえば、ない」

「どうして？」

「言葉にすることで存在を確かにするという過程を踏むということ
は否定はしない。現に妾達が魔法を行使する際、名をつけること
によってイメージを固めるというのはよくあることだ」

「カノンフィールではその練習と称して、絵画を描くことがあります
すしね」

「妾達はそのようなことをしないが……魔法は戦闘で使われること
は既に前提となっているのでそのような多大な隙をつくる行為は
ない」

「そっか。……なんか残念」

鈴音は自分が呪文を唱えて魔法を使う様でも想像したのか少し残
念がっていた。

「別に呪文は唱えてもかまわんぞ。あくまでそのような物好きはい
ないというだけだからな」

「うーん。それはそれで恥ずかしいから遠慮しておく」

「精々つけるとしたら、魔法名くらいだな。イメージしやすいから、制御や威力の向上にも繋がりやすいしの」

フィンは説明するのに疲れたのか一息入れる。

「言葉で説明するのはこれくらいかのう。後は基本的なことを学んでから、必要に応じて説明すれば良いだけだしな」

「そうですね。後は実際に見てみるのもいいでしょう。……メリル、的になりなさい」

空気と化していたメリルにノルンからいきなり物騒なことを言われ、メリルはうるさく抗議する。

「ええ〜!? どうして的にならずにちゃいけないんですか!？」

「丁度いいが他にないからです」

「嫌ですよ! 痛いじゃないですか!」

「痛いのは好きでしょう?」

「ノルン様に直接苛められるのがいいんです! 怪我とかするのは嫌ですよ!」

(精神的に苛められるのに快楽を得るタイプか……)

にべもないノルンの命令に駄々をこねるメリル。そんなメリルに飽き飽きしたのかノルンはメリルの意思を覆す言葉を口にする。

「私がいいというまで避けければ御褒美をあげます」

「シャアー！ バッチコーイ！」

見事なまでに豹変したメリル。今までの抗議はなんだったのか、今ではどんどこかかってきなさいと張り切っている。……まさか御褒美欲しさに駄々をこねた？

「よいのか？」

「ええ。遠慮なく殺ってください」

なんだか違うニュアンスに聞こえたのだが気のせいだろう。

「さあー、かかってきなさい！ ハリー、ハリー！」

彼女の命運は尽きたように思えるが、本人が望むのであるならば気にしないでおう。

「あ、あの……ボクは遠慮していいですか？」

「どうしてですか？」

「えっと……あの……」

ノルンに何故かと聞かれ、ルーナが口籠って話したくなさそうなので助け船を出す。

「別にいいんじゃないかな。俺としては気にしないし」

「……わかりました」

ノルンも大して気にしていなかったのかあっさりと追及の手を緩める。

「え、えっと……ありがとうございます」

「気にしないでいいよ」

透は身体を起こし、ルーナの頭を撫でようとするとルーナは怯えるように身を竦ませる。

「あゝ……ごめん」

「ち、違うんです……こ、これは」

涙目になり、罪悪感に浸っているルーナを見てこのままにしておく訳にもいかないと思い、透は触れることが嫌いでないことを祈りつつ、もう一回今度は口にしてから撫でてみることにした。

「撫でても？」

「え、えっと……その……はい」

ゆっくりと相手が怯えないように手を近づける。

今度は心構えができたのか、怯えず頭に手が置かれるのを受け入れた。

ルーナはぼうっとして、撫でられるままに委ねていた。

「まゝだでゝすか？ 早くしてくださいよ」

空気の読めないメリル。

そんなメリルにノルンは溜息をつき、殺れといわんばかりにメリルを指し示した。

フィンは苦笑し、座ったまま魔法を発動した。

「まあ、ほどほどにしておこう」

フィンの頭上に次々と光の矢が出現する。鏃がメリルの方を向き、一つずつメリルへ射出される。

「多すぎですよー！」

そうばやくが、姿が霞むほどのスピードで次々とかわしていく。
……時折、あひゃとか、おひよとか、うにゃとか、変な奇声を発しながら。

「おお！！ 面白い！」

フィンは奇声をあげながら避けるメリルを目を輝かせながら面白がっている。

「でしょう？」

ノルンもそう思っているのか、フィンに賛同する。

「私は面白くないですよ」

冷たい主人に訴えながらも彼女は必死に避ける。動いて避けられ

ない場合は、氷の盾で防ぎながら。

「アースファイアの魔法を見せていただけませんか？」

「う、うん。わかった」

鈴音は自身の右手にある腕輪に意識を集中させ、魔法を発動させた。

変化は何も見られなかった。

「え、何で!？」

メリルの足が先ほどまでしっかりと踏み込めたはずの地面に埋まる。

「くっ！」

メリルは突然の事態に一瞬慌てたものの、すぐに冷静に判断を下す。

全方位から迫る光の矢を、先ほどまで掌ほどの大きさだった氷の盾を、拡大し、帯状に変化させ、光の矢を逸らすと、地面に埋まった足を抜き、そこから離脱する。

「今のは？」

ノルンの疑問に答えるべく、アースファイアの魔法について説明する。

「アースファイアの魔法はいわば、変化だよ」

「変化ですか？」

「そう。アースファイアの魔法は物体に内在するパラメーターを変化させたり、物体の形状を変化させたり、物体を違う物体に変質したりするんだ。といっても基本的にその物体が辿る変化に限定するけどね」

「中々面白いですね」

ノルンは自分達の魔法とは違う魔法に素直な感想を述べる。

三界の魔法はいふなれば、創造であった。外部、内部に新たな法則を持つ物体を創造し、外界から干渉するのが三界の魔法だった。だが、アースファイアの魔法は三界の魔法とは正反対で、内部そのものを干渉する。

「それぞれの魔法についてある程度理解が及んだことだし、お開きにするか？」

フィンはメリルを狙うのに飽きてきたのか、退屈そうに言うてる。

「御褒美、御褒美♪」

攻撃の雨が止み、ノルンから御褒美が貰えると思い、声が弾んでいる。

「何を言ってるんですか？」

「「「「え!?!」」」」

ノルンに注目が集まる。

「え、で、でも躲わしきりましたよ?」

「まだ私がいいと言ってませんよ」

「でも、もう誰も攻撃してきませんし……」

「安心してください。あなたが当たるまで私が攻撃し続けますから」
無表情ではあるが、獲物を前に舌を舐めずっている捕食者のような雰囲気
のノルンに、メリルは己の運命を悟り青褪める。

「さあ、始めましょうか」

「い、いや~~~~~~~~!!」

二人を見て一同は思った。

「なあ、これって」

「う、うむ」

「うん」

ルーナはぶるぶると震え、何も言えないようだった。

「メリルがマゾなのって、そうじゃなきゃ精神が持たなかったのもあるのかな」

「そうかもしれぬな」

果たして、彼女がその資質を持っていて目覚めたか、精神の均衡を得るため無理やり得たか……今ではそれを知る者は誰もいない。

「ああ、これが御褒美なのですね」

ビクン、ビクンと恍惚するメリルに誰も何も言えなかった。

ルキはラグナの執務室のドアをノックした。

「入りましたまえ」

すぐさま入室の許可が下りた。部屋の主も待ち侘びていたのだろう。

「失礼いたします」

ルキは自らの存在を悟られぬような静かな動作で入室する。

「では、報告を聞こうか」

「はい。かしこまりました」

ルキはラグナからのある任務を受けている。

それはフィンと透の監査と二人が万が一でも別れないように調整することだった。

彼女がラグナの元にやってきたのはその定期報告のためだった。

「フィン様と透様の仲は至って順調。その他の方々との関係も上々です。ここ最近では、アースフィアの文化である、娯楽関係に嵌り、それを通じて関係を深めているようです」

「ふむ。確かに、あそこの文化は興味深い。あそこは未熟であるが故に、空想の産物を生みだそうと様々な分野に手を出し、その結果多様性のある文化を獲得しているからね」

「はい。私としましても新たなネタを仕入れてくるのに役立っています」

ルキが快楽主義者であることを知るラグナとしては不安の種ではない。

「それは……それは。頼むからフィン達の仲を壊すような真似だけはしないでくれよ」

「当然です。玩具というのは壊すためでなく、楽しむためにあるのです。壊してしまつては楽しみがなくなつてしまいます」

ルキがメイドであるのは自分が直接関わるのではなく、影から相手を動かすことで、彼らが紡ぎだすストーリーを傍から眺めるのが楽しいからである。

そんな彼女にとって今一番楽しみなのはフィンだ。フィンは透と仲良くなるためだったら何でもするだろう。これほど面白い人物はそうはいない。ルキが彼女の世話役となつたのはそういう事情があるからだ。

「あはは……それはそうと、フィンには避妊はしているかい？」

「はい。しばらくは夫婦だけで楽しむように、とちゃんと言い聞かせています」

「いずれは、と思うのだが……今はまだ、早い」

「フィン様は総い方です。現状はしっかり認識しています」

彼女の戦闘力でもっている現状において、戦闘ができないというのは致命的だ。せめて、四界の和平が上手くいくか、代わりの戦力が用意されるまでは避けたい事情ではあった。

余談ではあるが、コンドーム等の避妊具は必要ない。なぜなら体内にあるナノマシンがその役目を果たすからだ。ナノマシンは保持者の認証がない限り、常にその状態にある。……必要はしないが、場合によってはつけることもある。（ちなみにフィンと鈴音はゴム一枚とはいえ、透と隔たれるのは嫌だと断っている）

「そうか。……ちなみに透君とフィン以外との女性の関係はどうだい？」

「良好といえるでしょう。鈴音様はフィン様と透様を仲良く共有されている様子。ルーナ様は触れ合うことに何やら怯えています。透様達の傍を離れようとはしません。ノルン様は無表情であるためわかりにくくはありますが、少なくとも負の感情を抱いてはいない様子。好意というよりむしろ興味が湧いている、といったところでしょうか」

ラグナはルキの報告を聞くと、何やら考えを深めるように目を閉じる。

ルキは差し出がましいと思ったが、今後の方針を定めるためラグナに指示を仰ぐ。

「ルーナ様とノルン様はいかがなさいますか？」

「それはフィンと同じ立場にするか、ということかな？」

「はい」

ラグナはしばらく自身の考えを吟味して、出した結論をルキに聞かせる。

「そうしておいてこちらに損はない。……但し、フィンから心が離れるようなことはするな」

「かしこまりました。では、そのように」

ルキは優雅に一礼して、執務室から出て行った。

ラグナはルキが出て行った扉をしばらく見詰めた後、息を深く吐き、椅子の背もたれに身を委ね、虚空を眺めた。

「彼女は優秀だが、変な方向に行かないか心配だな……人選間違えたかな」

ルキがフィン達にもたらすであろう災厄が若干楽しみではあるが、同時に不安でもあるのでラグナはそうぼやいた。

「リーネ、フィンお願いしたいことがあるんだけどいいかな？」

夕食を摂った後、透達は風呂の順番を待ちながら、漫画を読みふけていた。

「何だ？ なんなりと言うがいい」

滅多にない透のお願いに気合が入り、フィンは何が何でも叶えようと意気込む。

「今日は三人一緒にお風呂に入って、そのあと三人で一緒に寝よう」

「へ？」

唐突な透のお願いに、鈴音は素っ頓狂な声をあげる。

「それはかまわないのだが、どうしたのだ急に？」

フィンの言うとおりここ二週間、彼女達はそれぞれ一日交代ごとに役目を変えていたのだ。二人同時にした事は今まで一度もない。

「うん。やっぱり時には仲良くなるために、みんなでしょうかなと思っ」

「そっか。そういったことも必要かな」

「うむ。時にはよからう」

鈴音とフィン、双方ともに否定の言葉は口から昇らず、彼女達はどういったことをするかに議論が移った。

「何を話してるんですか？」

風呂上がり特有の艶めかしさを漂わせながら、ノルンは風呂が空いたと告げに来た。

「今日は三人一緒になさるそうですよ」

風呂上がりの主人にすかさず冷たいジュースを渡しながら、メリルはノルンの疑問に答える。

「相変わらず仲が良ろしいことで」

すっかり日常と化した透達の色事にノルンは慌てることなく見守る。

ルーナがなにやら熱暴走を起こしているようだが、これもいつものことだ。

「何でしたら、完全なフィン様達主導の御奉仕なんかいかがです？」

ルキは熱暴走を起こしているルーナに冷たいジュースを渡し、迷っているフィン達に救いの手を差し出す。

「「完全主導？」」

何やら聞き慣れない言葉に二人の言葉は重なる。

「はい。普段の情事を聞くとところによると、お二人ともほとんど受身の御様子。それでしたら今回は最後まで攻め手に回ってはいかがでしょうか？」

二人はルキの言葉に思うところがあつた。確かに、最初のうちはもつのだが、後半になるとただ成す術もなく蹂躪されるだけ。今回は二人いる。ならば今回は最後まで透を攻めることは可能ではないか？ そんな打算が二人の脳を駆け巡り、それを成すべく最善の答えを導き出す。

「「ルキ、グッジョブ！！」」

二人はルキにいい笑顔でサムズアップする。

息がぴったりの二人に透は苦笑し、念のために二人に自分の気持ちを告げる。

「別に俺は気にしてないよ。……二人を可愛がるの好きだしね」

「そういつてくれて嬉しいのだが……透よ、偶には妾達に全てを任せてはくれぬか？」

「うん。私達だって透君を気持ち良くしたいよ」

どちらかという攻めるのが好きな透としては、我慢できなくなりそうではあったが、二人の熱意に押されたことと、偶にはいいかと思つて二人に任せてみると決めてみた。

「任せておけ。妾達が天国に逝かせてみせよう！！」

「さあ、逝こう！ 私達の桃源郷へ！！」

二人は透を引きずり、意気揚々と桃源郷に向かった。

「お二人も混ざりますか？」

「遠慮します」

「……………／／／」

全て妾達に任せよというフィンの言葉に従い、服を脱がされ、彼女達自身の身体で自分の身体を洗ってもらっている。

「透君、気持ちいい？」

「ああ、気持ちいいよ」

「羨ましい……妾も早くしたいぞ」

一糸纏わぬフィンに膝枕をされ、両手を拘束されているため、身動きは取れない。

鈴音は身体全体を利用して、絡め取るように一部の隙間もないように擦りつけてくる。

正直に言って我慢ならないが、『最後にはどうせ、透に妾達を可愛がってくれと強請るのだからそれまでは我慢してくれ』という可愛い懇願に負け、今こうして我慢している。

床はもちろん身体を痛めないためと、いろんなシチュエーションに対応できるようにとマットを敷いてある。ルキがいろんな道具を取り寄せているが、まだ使われてない。……今後は使われる予定だが。

鈴音だけがこれをするのではなく、次は同じことをフィンがする

ことになっている。

透にとってある意味拷問であり、理性が持ちそうになかった。

「交代だね」

「おお……待ち焦がれたぞ」

二人は立場を入れ替える。

「なんか……すっごくエロい」

「だろう？」

「透に喜んでもらえるのなら本望だが……妾の方が我慢できなくなりそうだな」

「まだだめだよ……せめて皆洗い終えるまで」

「……先は長そうだ」

「次はリーネの番だね」

「妾が鈴音を洗うから透は触れてはだめだぞ。……これで我慢せよ」

「あああ!!」

「……正直辛いですけど？」

「出したければいつでも出してよいぞ。……動くのは駄目だが。さて、鈴音よ。透を楽しませるためだ。覚悟するがよい」

「ちよっ……やめ……」

「復讐するは我にあり」

「そんな獲物を甚振るような顔で妾を見るでない！」

「主は申された。次はてめえだと」

「さあ、懺悔なさい。……許す気はないけど」

「こ、これ以上はやめよ！ 耐えられなくなる」

「私、信じてる。フィンちゃんなら越えてくれるって」

「お願い……これ以上は……」

「Amen」

舞台は変わり、

「時は来た。さあ、我が身に溜まった鬱憤をその身に刻むがよい」

「く……あれほど攻めたのにまだ力が残ってるなんて。ああ、神様。この哀れな子羊に救いの手を」

「……キャラが変わっておらぬか？」

「ただのノリだから気にしない、気にしない。……鬱憤を晴らすのは本当だけど。いつもより乱暴になるかもしれないから気をつけてね」

「いつもはすごく優しく、丁寧にしてくれるから、妾なぜだか少しわくわくしておるぞ。……捕食される身としてはおかしいが。……まあ、愛する者からの仕打ちならではの楽しみかの」

「フィンちゃんもわくわくしてるの？」

「鈴音もか。やはり、妾達は気が合うな」

「まあ、二人とも少しMな部分あるしね。俺も少しSだし、やっぱり気が合うね」

「当然だ。妾達は結ばれる運命にあるのだからな」

「もう、結ばれてるけどね。でも、なんかしっくりくるね」

「そうだね。さあ、二人とも覚悟はいいかな？」

透を含め三人は息も絶え絶えでベットに横たわっており、直前の運動の激しさを物語っているかのようだ。何の運動かは聞かただけ野暮というものだろう。

「どうして、そんなにもつの？」

鈴音の疑問は尤もだ。透は体力的には消耗したが、精神的なものは衰えていなかった。

「それはナノマシンのせいだろう」

その疑問の答えは鈴音と一緒に腕の中にいるフィンが答えた。

「ナノマシンは体調を整える機能がある。透が衰えないのは、ナノマシンが一定量消耗された途端、即座に補充しておるからだ」

「体力が消耗したのは？」

「体力も命ずれば、消耗されない。だが、緊急でもない限り、自動ではその機能は解放されない。そういったことは野暮というものだからな。それだけでなく他の事でも同じように制限されているのだ」

「それもそうだね」

自分と相手の身体など境界線があってないようなものだ。息遣い、温もり、体臭、鼓動と五感を総動員させて相手の存在を感じる。透達は今はただ、この静寂の時を過ごす。

心地よかった。幸せというものがあるならまさしくこの瞬間だった。

「二人ともどうだった？」

やはり疲れているのか、二人からは眠そうな声がする。

「よかったぞ。できれば、またやりたいくらいだ」

「そうだね。また今度しようね」

よしよしと頭を撫でる。くすぐったそうに、だけど気持ちよさそうに受け入れている。

「二人とも疲れただろう。……今はおやすみ」

「「おやすみなさい」」

「うん。おやすみ」

透達は三人一緒に仲良く眠りに就いた。

「大丈夫ですか？」

ルーナが透を見ての第一声がそれだ。

「うん……なんとか」

透はテーブルに突っ伏し、回復を図る。

ちなみに、女性陣二人は補充したかのように元氣満々で、色艶もいい。

「昨夜はお楽しみでしたね」

どこかで聞いたようなセリフをルキは言う。
それに答えるのは当然、

「なかなか良い一夜だった。また、やりたいものよ」

「それはよう御座いました。さあ、朝食の準備が整っております。
席へどうぞ」

「うむ」

「今日は何して遊ぶ？」

透は鈴音の身も蓋もない言い様に何も返しようもない。呆れた意味ではなく、純粹に疲れているからだ。

「とりあえず、透が疲れておるようだから……今朝はゆったりと過ごそうではないか」

「別に気にしなくてもいいよ」

「夫の疲れを癒すのは妻の務めだ。庭に大樹があることだし、そこで過ごそう」

フィンの言葉に反対する者はなく、午前中はそう過ごすことになった。

突き抜ける風は何処までも清澄で、降り注ぐ陽光の熱は透達を優しく包む。

「俺は寝る」

「ならば妾も」

「じゃあ私も」

次々と透が続いてくる。二人は昨夜のこともあるだろうことは、透にも理解できた。

だが、しかし――

「なんで、俺を枕にする」

「丁度いい枕があるからだ」

透は腹に太腿にと群がってくる甘えん坊ズに一言声をかけずにはいられなかった。

「さいですか」

透としても特に気にならないので放置する。風が心地よく吹き、気温も適温であったため、どうしてもよくなったのだ。昨日の疲れもあってかすぐに眠気が透を襲う。

「ルーナちゃんも一緒に寝よう」

鈴音はルーナに抱きつき、そのまま抱き枕にしようとする。

ルーナは触れられることに最初は怯えていたが、慣れてきたのかビクつくだけで抵抗はしない。

「ノルン殿も混じるか？」

「私は読書するので遠慮します」

「寝転がって読むのもよいのではないか？」

「はしたないですよ？」

「妾達しかいないのだ。周囲の目など気にする必要もあるまい」

ノルンは仲間を作ろうとするフィンに溜息をつく。

「しかし、こんなにのんびりしてもいいのでしょうか？」

「む、どういう意味だ？」

「いえ、私達の双肩に今回の平和の成功がかかっているものですか
ら」

「別に気を張る必要もないのではないか？ これも役割といえば、
役割だし」

「そう、そう。気にしない。気にしない」

鈴音はルーナがお気に入りなのかもふもふと愛でている。ルーナ
も満更ではなさそうだ。

「日常を謳歌することは悪いことじゃないよ」

「うむ。文句を言う奴はブツ飛ばせばよいだけだ」

「そこまでは言わないけど。……でも、俺としてはこう……世界の平和に奮闘するよりも、上を目指そうと躍起になるよりもこうやってのんびりしてるほうが性に合うかな」

「妾も力を奮うことが好きではあるが、何より透と過ごす時間の方が一番だな。その中でもあれば別格だがな」

ぐふふ、とフィンは奇妙な笑い声をあげる。

ノルンはそんな二人に何故か心がざわめいた。彼女の中に得体の知れぬものが芽生える。

「お二人は御自身の世界や四界の平和についてどう思いますか？」

詰問口調ではなかったが、それでも問わずにはいられない声だった。

「特に何も。俺にとってはこいつらと過ごすことが絶対条件なので後は……まあ、ついでかな」

「妾も同じだな。そんなものより透の方が大事だな」

「私も」

透達三人は何の気負いもせず、それが当然とばかりに口にする。

「……それでいいのでしょうか？」

「良いか、悪いかで言えば悪いだろうね。……でも、俺は法や倫理、道徳は秩序のためや自己肯定のためにあると思うからね。それに……どんな過程を辿ったとしても、俺が選ぶ結末は変わらない。俺は

こいつらといちゃつきライフを選ぶ。ありとあらゆる否定を受けようとも、俺はこの結末を何度だろうと選ぶ。だからこそ、俺にとつて他のことは全て瑣末なことだよ」

透がフィンの顎下を撫でてみると、ゴロゴロと懷いてきた。

「妾の全ては透のためにある。故に透への思いを貫くためなら、そこに他のものが存在する余地はない」

「……私も」

眠いのだろう。鈴音は同じことを繰り返してるし、声も小さくなっている。しっかり目が覚めてても同じことを言うのだろうが。

「……変わってますね」

「自覚してる」

透達はあるさりしているが、本気だと悟ったのか溜息をつくど、

「なんだか疲れました。……私も休みます」

如何なる心境の変化か透を枕にする。

「……お前もするの？」

「お嫌ですか？」

「別に。好きにしたらいいよ」

「そうします」

ノルンはかまわず本を読み始めた。

透は葉が風に吹かれ擦れあう音と四人の息遣いを子守唄にしながら眠りに就くことにした。

それを見ていた三人の従者は、

「あらあら、仲がよろしいこと」

「なんて羨ましい！」

「……シャッターチャンス」

とそれぞれ感想を漏らしていた。

そんなこんなで一月が過ぎ、時間の経過とともに人の営みがその賑やかさを増した。

あれほど疎らだった人の姿も、今では途切れることなく人の姿が見られる。

透達の関係もこの営みのように急激に変わったわけではなく、ただゆっくりと、だけど確かに歩んでいた。

例を挙げるなら、歩く速度だろう。以前は歩調が合わず、歩きにくさが目立っていたが、今では一緒に歩くのが当然とばかりの歩調となっていた。一人で歩く方が却って違和感を覚えるほどだった。

今現在、透達は入学式の真っ最中だった。

約百名程度の列が四つ並び、計四百名程度の生徒が式典用の講堂に集結していた。百名の列はやはりというか、各世界ごとに分けられている。制服は各世界にかかわらず、同じだというのに服を着る生徒達は、仕方がないことであるが、自分の世界を強く意識している。それはこの世界の現状を表しているかのようだった。

それは生徒のみを表しているのではない。生徒達の両側にいる来賓はアースフィア・ヴェルディン側とカノンフィール・ガイアノーグと分かれ、さらにアースフィアは各国のVIPが多数いるのに対し、他の三界は一、二人程度とこの学園に対する入れ込みようを表している。（親族は警備上の観点から招かれていない）

式も滞りなく進み、残すところ生徒会長の挨拶を残すのみになった。（これが最後になったのはラグナが画策しているためだった）

フィンは講堂にいる者全てを見下ろせる演壇に、四百以上の視線に臆することなく堂々とした立ち振る舞いでここににいる者、いや世界中に自らの意思を伝えるようと声高らかに宣言した。

「皆の物、聞くがよい！ 貴様らは様々な目的でここに居よう。しかし、妾はその是非を問う気はない。だが、一つだけ心せよ！ 妾はアースフィアの住人である透を夫にしておる！ 妾が透の妻であることを否定するのなら滅びを覚悟せよ！ 妾の夫並びに妾達の家族を害しようとするのなら、滅びを覚悟せよ！ 貴様らが妾達の平穏を崩すならば、妾が脅かすものの全てを滅ぼしてくれる！ そのことを胸に刻むがよい！！」

フィンは演壇を去り、そのまま真っすぐ透の元に向かい、どうだ！
！ といわんばかりに胸を張る。

何やら絶叫が講堂内に響いているが、フィンにとっては当然のこ

とを口にただけであるのでどうでもいいことだった。

ラグナが期待以上だと目を輝かせているがそれも些細なことだ。透がやるべきことは彼女を迎え入れる——ただそれだけだ。

「なんともまあ、熱烈な愛の告白なこと」

「あれでもまだ足りないくらいだぞ。透、妾の全てを受け入れてくれるか？」

「答えは当然決まってるよ。……おいで」

「うむ！」

フィンは満面の笑顔を張りつかせ、腕を広げた透の懷に飛び込む。

——この日、この時より世界は混（交）じわる。

第三章 学園都市アカディアと魔法授業 前編

混乱に満ちた入学式が閉会され、生徒達は皆各々の割り当てられた教室に行った。

透達は式が無事に終わり、来賓をラグナ達が見送りに向かったのを確認すると、割り当てられた教室ではなく生徒会室に向かおうとした途端、どこからか耳障りな声がしてきた。

「はーはははは！ 天よ知れ！ 地よ知れ！ 人よ知れ！ 王たる我が名を刻めい！！」

声の出元を確認すると、男性と思われる人物が腕を組み、凛とした立ち姿で講堂の屋根に立っていた。

フィンがうわあ面倒くさい人物が現れた、と顔を顰めている。

透がフィンに誰か知っているのか、と尋ねようすると、件の男性らしき人物はトウと擬音を口に出し、ふはははははと叫びながら屋根から飛び降りる。

「へぶし！」

彼が飛び降りている最中、横から高速で飛ぶ光の弾が彼を弾き飛ばし、うわあああという悲鳴と姿と共に彼は遠ざかっていた。

（……何だったんだあれは？）

疑問が湧きあがるが、その疑問が晴らされないまま変な人物が姿を現す。

次はシャランと華やかなBGMが流れ、薔薇の花吹雪の中をまるで薔薇のような真紅の長い髪を三つ編みに纏めた鋭利な雰囲気を持

つ美女が悠々とこちらに歩いてきた。

「何をやっておられるのですか、姉上」

美女の正体はフィンから明かされた。姉という驚きのお事実に透は驚愕した。

「知れたこと。初登場というのは印象に残るべきものでなくてはいけません。なのでこうして優雅に参上しただけのことですわ。おーほっほっほっほ！」

甲高い声を響かせながら彼女は胸を張る。

「それで？ BGMと花吹雪はどこから見つけたのですか？」

「アースフィアで面白いものがないかと漁っていたところ、面白いものがあったのでそれを再現してみましたの。ちなみに花吹雪は従者の魔法ですわよ」

フィンが何やら落ち込んでいる。

「兄上を飛ばしたのも姉上ですか？」

「ええ。私の登場シーン^{わたくし}を邪魔しようとしたものですから」

二人のキャラの濃さに透は驚きを隠せなかった。
フィンが影を背負いながら、紹介したくないがしなければならな
いと苦虫を潰したような表情で透達に向き直った。

「……紹介するぞ。こちらは妾の姉上で」

「ローゼリア・ヴェルディンですわ。ローゼリアでもローズでもお好きに呼んでくださいな」

「……それで何の用ですか？」

関わりたくないのかフィンは懨然としている。

「妹の夫となる男の顔を見に来ただけですわ」

ローゼリアが値踏みするかのように透の顔を見定める。

透は探ってくるような視線に臆することなく平然とする。

「……何か文句でも？」

今にも喧嘩を売りそうなフィンを気にすることなくローゼリアは返答する。

「いいえ、何も。私は美しいものを好みます。仔細はどうあれ、私は己を貫き通すならばそれを美しいと思います。なので、文句は言いません。……ですが、私のような者ばかりではないと知っておきなさい。あれも少なからず不満を抱いているからこそ、ああして登場しようとしたのだから。……目立ちたかったのもあるのですうが」

「そのようなことは既に覚悟の上です」

フィンはローゼリアを毅然と見返す。

「ならばよろしくてよ。では、皆さま。また会いましょう！ おー

ほっほっほっほ！」

登場した時と同じようにBGMと共に花吹雪が舞い散り、ローゼリアは堂々と去っていった。

「派手な人だったね」

鈴音の言葉は透達の心の声を一様に示していた。

「悪い人ではないのだ。……ただ姉上といると疲れるのだ」

透はフィンの言うことがわかる気がした。

気を取り直せと頭を撫でてみる。フィンは当然、抵抗することなく受け入れる。

しばらく撫でていると気を取り直したのか、生徒会室に向かおうと元気に言ってきた。

「そういえば、最初のあれはなんだったのでしょうか？」

ノルンが思い出したかのように指摘すると、フィンは石化したように固まり、ぎぎぎと緩慢に振り返りながら、

「あれは気にするな。これから嫌というほど思い知るのだから」

フィンは不吉な言葉を残して、沈黙を保った。

透達が割り当てられた教室ではなく、生徒会室に向かったのは必要ないからだ。

入学初日である今日は、ここに不慣れな者達の為に日常生活、学校生活に関するガイダンスが行われる予定になっている。透達は既にそれらの項目に対して目を通しているので必要なく、その旨を担当教師に伝えている。

ちなみに、担当教師の役目は出欠の確認、及び連絡事項の伝達ではない。そのようなことはここに来る時に付けたメモリーリングにその機能が付随されている。では、何のためにいるのか。

それはメモリーリングの機能がわからなかった部分の説明、教師との連絡の指標等といった、いわば案内役が担当教師の役目だ。

正直に言ってしまうえば、透達生徒会、いや透達のパーティーは授業を受ける必要はない。なぜなら、透達、いやフィンの存在でこの学園が成り立っている以上、退学になることはない。

透達の役目はこの学園を運営するための生徒達の纏め役である。同時に、今は理事長達がこの都市の運営を任されているが、将来的には透達がそれを担うことになる。それに慣れさせるため、徐々に仕事を任されることになっている。

故に生徒会の仕事と都市の運営のアシスタントが透達の役目であり、授業はおまけ程度でしかない。とはいっても四界の知識を得るため受けなければならないが。

透達が生徒会室に来たのは、今後学園の運営を担うメンバーとの顔合わせのためだ。具体的には寮長などといった各世界の責任者、男女合わせて計8名。メンバーは各世界が選ぶことになっているので、少なくとも強い権力を持つ者の縁者だろう。推測だが、ローゼリアが言った『また会いましょう』といったセリフ、あれはこの事を指していると思われる。王族であればその条件を満たすし、妥当ではあるからだ。

メルルが入れてくれた紅茶を飲み、雑談しながら相手が来るまで暇を潰すことにする。

ちなみに、メルルは学園の生徒ではない。従者を連れてきているのはノルン達だけではないが、生徒としての条件を満たす者に限ら

れてるし、その者達は主とは違うパーティーに入ることになっている。

基本的に生徒とみなされない従者は都市に入ることには叶わない。メルルは数少ない例外であり、透達の手伝いにのみその労力は注がれる。

「そういえば、誰が来るか知ってる？」

過ごした一月の中で役職や役割など組織的なものは簡単に教えられたが、誰が就くかはまだ教えてもらってなかった。

「妾のところだと兄上とさっき会ったローゼリア姉上だな。この二人はヴェルディン寮の各寮長を兼ねておる。ローゼリア姉上は強さもそうだが、臣下を大事にする方だ。上手くやってくれるだろう。兄上の方は……」

フィンは沈痛な表情を浮かべる。その表情が先ほどのあれと重なったので、そうなのかと聞いてみる。

「そうなのだ。正直言うと、あれを身内だと思われたくないのだ」

「……そんなにひどいの？」

「ひどい」

きっぱりと断言するフィン。確かにあの登場シーンからしてもまともな人物とは思えなかった。

ノルンが沈痛な雰囲気を察したのか、カノンフィールの話題へと転換させる。

「カノンフィールは父とは反対の派閥の党首の御子息と御息女ですね」

カノンフィールの派閥は現在、二つに分けられており、一つがノルンの父親が党首の和平に賛成派、もう一つが反対派となっている。

「父としては、できれば賛成派だけで生徒を構成したかったようですが、相手が議長でもあるので半数が精々だったそうです」

「議長の人のお子さんってどんな人なの？」

ヴェルディンの例もあって鈴音も興味が湧いてきたのか、好奇心を隠そうとはせずノルンに人柄を尋ねる。

「そうですね。会ったことはありますが、ろくに接する機会もなかったので私も風聞でしか知りません。御子息の方はカノンフィールの中でも圧倒的に人気の高い方ですね。……わかりやすく言うと、いわゆる王子様というものですか？」

「例えば？」

「容貌が秀麗であることもそうですが、物腰も非常に柔らかく、誰とも気軽に接し、また博識で武力も優れていると評判の方だそうです。彼を狙う方は少なくとも七割に達するといわれています。……私は興味ありませんが」

「恋人とかはいないの？」

「いいえ。婚約の話は多数挙がっているようですが、本人は全て断っているそうです」

「へえ、そうなんだ」

「なんだ浮気か？」

「違うよ！ 私は透君一筋だよ！」

からかうようなフィンの言葉に鈴音はすかさず返す。
透はそんな二人に構わずもう一人の方を聞くことにする。

「で、もう一人は？」

「彼女を一言で表すなら、ブラコンですね」

「」「ブラコン？」「」

全員の声が重なる。

「はい。何でも彼に群がる女性は彼女が悉く撃退しているだとか。本人もブラコンであることは隠そうともしないそうです」

「面白そうな武勇伝が聞けそうだな？」

「数多くありますよ。本人も兄と同じく容姿などは優れていますから、男に言い寄られることは珍しくないそうです。……ですが、本人はいつもこう言って断るそうです」

「なんて言うの？」

女の子の例に漏れず噂話や恋話が好きなのか、目を輝かせながら鈴音は相の手を打つ。

「『私はお兄様の嫁です』だそうです」

「わぁー！」

鈴音達は嬉しそうに手を重ね、話の続きを待ち侘びている。

「彼女のブラコンぶりに手を焼いている方は多くいるそうですよ」

「面識あるの？」

「はい。……ですが、私は嫌われていますね」

「どうして？」

「なんでも『お兄様を奪う泥棒猫』だそうです。私としてはそんなつもりは毛頭ないので迷惑なだけです」

「ノルンちゃん綺麗だもんね。他には？」

「彼女についてはそれくらいですね。嫌われているのであまり詳しくないですよ。ブラコンが目につきすぎて、他が霞んでしまっているんですね。……ただ」

「ただ？」

「彼らは寮ではなく、近くに家を建てそこに一緒に暮らすそうです」

「寮長なんだから寮に住むんじゃないの？」

「寮長ではあるようですが、寮には住まないそうです。ただ、寮内部の事に関しては親しい者に任せるそうです。彼らには他にもやる事があるので、寮では手狭で何かと都合が悪いとのことなので家を建てるそうです」

「そうなんだ」

フィンが何やら真剣な声で透に話しかける。

「浮気か？」

「何、突然？」

何を聞くのだろうこの子とは、透は少しばかり呆れる。

「いや、なに。妹の方を聞き出そうとしたのでな」

「話をつなげるために言っただけだよ。それ以上でもそれ以下でもない」

フィンとしても本気で言っているわけではないだろう。すぐにこの話題を切り上げる。

「別にするのはかまわんが、妾達をないがしろにするでないぞ」

「……………了解」

「で、ガイアノーグの方はどうなの？」

ルーナは無口なほうで会話に加わることは少なかったが、ここ最近では親しくなった故か少しずつ話しをすることが多くなった。初めの方にあった怯えは今では息をひそめ、話を振られればすぐに対応するようになったのだ。

「詳しくは知りませんが、男子寮の方は龍皇族いずれかの龍種の御子息になるそうです」

龍皇族は獣化した際の鱗の色で種が分けられている。鱗の色は得意とする魔法の属性を表しており、種は分けられているがそれによって上下の関係となることはない。ただ一つの例外――銀龍を除き、ソルガが族長となっているのは銀龍が龍種の中で頂点であり、他の龍種の得意とする魔法と同じ威力の魔法を紡ぐことが可能な存在だからである。故に銀龍が族長となるのが慣習となってはいるが、必ずしもそうではない。族長となる者が拒んだり、他の龍種で抜きこんでたものがあるならばそちらに譲ったりする例がある。他の種族の纏め役を果たせるのであれば誰でもいいとされているが、やはりそんなことは稀で銀龍が族長となることが龍皇族の掟となっている。

「ただ……女子寮の方はボクの妹のステラちゃんがやることは決定事項だそうです」

「寮に住むことをよくあの人が許したね？」

透達の脳裏に浮かんだのは子離れができない暑苦しい巨漢のソル

ガ。彼ならば寮に入れるのは反対しそうなのだがどうなのだろうか？

「父様は最初は反対したそうですが、母様の鶴の一声で休日は帰ることが折衷案として決まったそうです」

やはり脳裏に浮かぶのはプリティの尻に敷かれるソルガ。尻に敷かれるという言葉と連動してあの惨劇が思い浮かび、尻の穴が窄む思いがする。

あの光景を振り払うべく話を続ける。

「妹のステラってどんな子？」

「ステラちゃんですか？　そうですね……すごく頑張り屋さんですよ。……ただ」

ルーナは寂しそうな顔で、ここにいない人物を悼むような顔で呟く。

「力が弱いせいか銀龍の子として認められていません。ステラちゃんはそれを悔しがっていて、自分を認めさせるために頑張っているんです」

「――そうか」

フィンも思うことはあるのだろう。そう呟き、懐かしむように虚空を見上げる。

「あの……だから、お願いがあります！」

今までにない強さの口調でルーナは透達に懇願する。

「ステラちゃんを否定しないでください！　ボクじゃステラちゃんに何かしても逆効果でしかないから皆さんにお願いするしかないんです」

涙目になって頭を下げるルーナ。彼女の言動から察するに強き者からの憐れみと称して拒絶されたのだろう。

彼女達が如何なる境遇にあるかは今は憶測でしか測れない。下手な同情や憐憫は傷つけるものでしかない。

透は彼女達に対して思うことは何もない。透は自分の感情を挟まず、彼女達の境遇や感情、言動をただの情報として取り入れる。

透に出来ることはただ全てを認め、全てを否定し、受け入れる。

——ただそれだけだ。

「ルーナ。俺はお前達の事情がどうであろうと俺がとる行動は変わらない。ただ、お前達をそのまま受け入れる。——それだけだ」

「そう、そう。透君の言う通り。私達にステラちゃんを拒否する理由はないからね」

「うむ。そちらの事情に妾達まで付き合う道理はない。気にするな」

「私は元々興味ないですし」

透達の言葉にゆっくりと頭をあげ、ルーナは満面の笑顔で、

「ありがとうございます！」

と感謝の言葉を述べる。

「アースフィアはどのようなのですか？」

「知らない」

「知らない？」

「ああ。ある程度の予測はつくけど候補が多いから絞りきめない。
……リーネ、何か聞いている？」

「何も聞いてないよ」

ノルンから呆れているような気配がするが、本当に知らないのだ。
風音を含め、三界から注目を浴び、アースフィアでも一躍時の人になったことはあるが、煩わしかったので世間から隔離された環境で透達は過ごしてきた。

アースフィアにとって透達は駒の一つにすぎず、指し手としては見られていない。

学園都市アカディアのアースフィアの理事は、風音ではなく国連から選出された人物だ。もっともその人物にしても学園都市アカディアの他の世界の理事、つまりラグナ達の許可が何をするにも必要だし、アースフィアでも精々調整役、いや窓口にしかな利用されていない。

風音はアースフィアの、いや透達専用のナノマシンに携わった研究員として、三界の魔法の共同研究に関わっている。

その研究内容はアースフィア側に情報が流されることはなく、三界のみに留まっている。

風音はそれ故、双方に重要人物として認識されている。

彼女を確保しようとアースフィア側は動いているが、三界はそれ

を当然のごとく察知しており、彼女の身柄はここ学園都市アカデミアに移されており、手を出すことは叶わなくなっているのだ。

風音本人としてはそのことになんら不満はなく、むしろ娘と魔法の研究に労力を注げると喜んでいる。

そういう背景があるので、アースフィア主要国の重要人物の子供であると告げると、三人は痛烈な皮肉と共に返答してきた。

「そういえば父が言っていましたね。彼らはいちいち決定が遅いと」

「ボク達の方でも問題になってました。父様なんかはそのことにイラついては母様に怒られてましたし」

「こちらでもそうだな。妾達にとっては透と鈴音と風音殿以外はどうでもいいのだ。そのことをまだ認識していないのではないか」

三者三様の皮肉に共通しているのはアースフィア的意思決定の遅さだ。

出身世界ではあるが、彼女達の言うことは的を得ているので、透と鈴音は肩を竦めただけで弁護は一切しなかった。

ここ生徒会室は四界の特殊性ゆえか特殊な構造となっている。

まず、生徒会室に入ると来客用の部屋が配置されている。本日行われる顔合わせもここで行われる予定であり、大人数が入ることを前提に造られているのでスペースは広い。

もう一つが現在透達がいる、作業室。

ここは資料の保管を兼ねてもいるのでセキュリティが高い。入室するには事前に登録を行う必要があり、登録がない者は決して入ることはできない。

ここは位相がずれた空間に配置されているらしく、入る唯一の方法は来客室にある扉から入るのみとなっている。

透達が作業室を出たのはガイダンスが終えたのか、最初の来客が来たためである。

そして透達は出たことを後悔することになる。

透達が来客室に入った瞬間目にしたのは赤金色の短髪で自信に充ち溢れた少年だった。

その少年を見た瞬間、フィンの顔が絶望に染まったが、気付いた者はいなかった。

少年は自分が注目されているのに気づくと、いちいちポーズをとりながら自らを名乗った。

「我が名は！ ヴェルディンの！ 未来の王！ クロウⅡヴェルディン！」

——沈黙が場を支配した。

誰もが無言のまま次の言葉を紡がないでいると、焦れたのかクロウと名乗る少年はポーズを解く。

「我が名乗ったのだ。そちらも名乗るのが筋ではないかね」

そう言われ、透達は自分達の名を名乗る。

そしてこの人物を知っているであろうフィんに彼がどういった人物か尋ねる。

「……これは妾の兄のクロウⅡヴェルディンだ」

そう淡々と告げたフィンには抑揚がなかった。よほどこの人物と

関わりたくないのだろう。

「未来の王と言っていましたか？」

その単語が気になったのかノルンはその真意をフィンに問う。

その問いの答えはフィンではなく言った張本人であるクロウから返ってきた。

「フ……知れたことよ。我がヴェルデインの王となる。その輝かしい栄光の座は既に我が座ることが決まっているのだ」

本当なのかとフィンに問い質す。

フィンがすぐく疲れた顔で真相を明かす。

「今現在、王は不在の状況だ。臨時として、妾が王とはなっているが正式に決まってはいない。妾は王の座に興味はないのだから。いずれ、ラグナ殿が後継者を見定めるだろう。……おそらく、王族の中からな」

そういった瞬間、クロウの瞳に暗い感情が宿ったが、フィンに注目していたことと一瞬のことだったので誰も気づかなかった。

「つまりだ。我がその後継者ということだ」

「正確には候補者だがな」

クロウとの話はここで終わることとなった。

ガイダンスを終え、次々と人がこの生徒会室に来たからだ。

その日、顔合わせは多少の波乱があったが無事終わり、透達は学校を後にした。

透はフィンの部屋で、フィンのさらさらと流れるような髪を掌に掬っては零し、掬っては零す作業を繰り返していた。彼女の髪質はまるでシルクのように滑らかで一度たりとも絡まることなく零れていく。

フィンは透の行動を咎めることなく任せるままにしていた。

彼女は今透の身体に身を預け、とくん、とくんと動く心臓の鼓動に耳を寄せていた。

フィンの部屋にあるベットは二人で寝るには狭く、必然的に身を寄せなくてはならなかった。

だが、彼女はそれを厭うことはない。

なぜなら、愛する者の温もりを、鼓動を、体臭を全身で味わうことができるからだ。

彼女が今している体勢は、彼女が最も好む体勢であり、暇あらばこの状態でいたいと願っていた。

「そういえば、フィンはクロウが苦手なんだよね」

突然の透の話題にフィンは驚くことはない。透の心臓の鼓動がフィンの心を落ち着けているからだ。

「苦手というには些か語弊があるな。そうだな……直接関わりたくないというのが本音だな」

「直接？」

「うむ。傍から見ている分にはあれは愉快なのだ。いちいち芝居がかった言動やポーズとかがな」

フィンの言うとおり、クロウは顔合わせの時も大袈裟なまでに目立とうとしていた。……誰もがどん引きであったが。

「確かに」

「そうだろう？ あれが身内ではなく他人であつたらどんなにいいか……」

しみじみとフィンは言う。確かにあれは恥ずかしい。

「彼は王になるって言ってたけど、実際のところはどうなの？」

「……正直にいえば、無理だな。兄上の実力は妾達の中では最も弱い。ただの戯言に過ぎぬよ」

「五年前も？」

「五年前なら妾が最弱だろう。透がいなければ妾は今も力を求めて足掻いているか、絶望していたかのどちらかだろうよ」

五年前までの自分を思い出したのかフィンは透にぎゅっと抱きつく。

「フィンは王になることに未練はない？」

「ない」

はつきりと些かも未練を感じさせず、その事を全く後悔していない声だ。

「妾にとってヴェルディンの王となるより、透の妻となることの方が遥かに魅力的なのだ。それこそ全てを度外視するほどに」

「そっか」

彼女の少しもぶれることがない真っ直ぐな気持ちが嬉しい。その気持ちに応えるために彼女を優しく、だけど離さないように抱きしめる。

「ん」

フィンも透の意図がわかったのか、抱きしめ返す。

そして感極まったのか激しくフィンは透に激しくキスをする。

二人は知る由もなかったが、時計の針が四半周するほどキスは続き、最早その吐息も、唾液もどちらのものか判断できないほど混ざり合った。

「……透」

「ん？」

「やってみaitいことがあるのだがよいか？」

「何？」

「透をこの胸に抱きしめたいのだ」

「いいけど」

フィンは嬉々として体勢を入れ替える。

「ああ……いつもは透にしてもらっているが、妾がしてもよいものだ……」

フィンは透の頭をいつも自分がしてもらっているように優しく撫でる。

「なんか……恥ずかしい」

「いやか？」

「いやじゃないけど……」

「ならさせてほしいのだ」

「……好きにすれば」

諦めたように脱力する透を胸に閉じ込めるかのように抱きしめる。
——慈愛の表情を浮かべながら

透の息が胸にかかり、こそばゆく感じる。
初めてこういったことをしてみたが、なるほどいいものだ。透が好むのもわかる。

胸が圧迫されて若干息苦しさを感じるが、それだけに相手の存在が感じられて、息苦しさが幸福へと変わる。

機会があれば、またしよう。

先ほど透に王の座に未練はないかと問われた。妾はないと答えたが、その言葉に偽りはない。アウト・オブ・眼中というやつだ。

妾は今、王の座に就いているのと同じ状態だ。この五年間あれほど望んだ王の座、いや力を手に入れたが、何の感慨も生まなかった。妾の頭の中には常に透があり、どうすれば透に会えるか、どうすれば役に立つか、どうすれば愛してくれるかとばかり考えていた。

常に透との繋がりは感じられたが、本人が傍にいないのも相俟って、心に虚無を抱えた状態だった。常に欲求不満だった。今では満たされ……常に透成分が流されているこの身体を愛しく思うものだ。もしも、これが途絶えてしまえば発狂してしまうかもしれない。

余人からすれば透への執着は域を脱しているだろう。だが、最早魂に至るまで透に埋め尽くされている我が身はそれを異常とは思わず、むしろこれこそが常道であり、この道を歩く以外の選択肢は放棄されているのだ。この道以外を歩むのであれば妾は喜んで消えよう。

ヴェルディンの未来も王女としての責務もどうでもいい。ひたすら透と共にある。これを邪魔する要素は切り捨ててまで。

……妾には最早興味がなくなることだが、ヴェルディンはいずれ内乱となる可能性は高い。理由は王の座を巡る後継者の争い。

賢明なラグナ殿ならば察していないわけではない。色々と画策しているようだが、その行動は内乱の事前阻止よりも、誘致しているように思える。ラグナ殿が何故そうするかは計り知れぬが、妾達に支障が出ない限りは放任することにする。……万が一の時は例の場所に逃げだすなり、ヴェルディンを滅ぼせばいい。——ただそれだけのことだ。

さて、愛しきものを抱いて眠るこの時を堪能することにしよう。

——朝、どのような幸福を迎えるか楽しみだ♪

第三章 学園都市アカディアと魔法授業 中編

今日から授業が始まるので、透達は教室に向かうことにした。教室はそれぞれ約四十名の生徒数を抱え、一学年でその数は十に及ぶ。

透達に向かう教室は少し特殊だ。といっても内装などが特殊というわけではない。教室にいる生徒が特殊というだけだ。

何が特殊かというと、透達は言うに及ばず、各世界の寮長を含んだパーティーが集結しているからだ。

これに関しては議論が分かれた。

バラバラにすることで生徒同士の横の繋がりを強化するか、もしくは一箇所に集めることによって縦の関係を意識させるか、この二つに分けられた。

今回選ばれたのは後者の方である。

理由は初年度であることを顧みて、権力者を一箇所に集めることによって、異世界同士で問題が起こったり、手続きが発生した時、迅速に行動させるため。それと生徒の大多数はいわゆる平民であるため、その世界の権力者がいた場合、接する機会があまりないため、彼らは委縮してしまい、行動を阻害してしまう可能性がある。それならば身分を感じさせない者同士を組ませることによって交流を深めさせようという狙いのためだ。

これは初年度に限った話であり、来年度以降は彼らの状況次第で前者の方に切り替える所存だ。

その教室を開けると透達にちらちらと視線を寄こしてくるが、昨日の顔合わせが効いたのか、各パーティーのリーダーでもある寮長がメンバーに透達を気にしないようにと伝える。

透達は空いている五人が座れる長椅子の席に座る。

本来であれば四人が座れるものを用意すべきだろうが、この学園は透達を基準に造られており、五人が座れる席はその証といえた。

席に着くと端末を起動すべく、机の前方にある棚の認証システムにアクセスする。認証画面が眼前に浮かびあがり、認証のボタンを押す。

授業の出欠の有無はこれで確認されている。

前方にスクリーンが浮かびあがる。先ほどまで何もなかった机にはコンソールが組み立てられていた。これもナノマシンの一種で、授業の認証と共に組み立てられる方式になっている。

ディスプレイには既に授業用の画面が表示されており、いつでも授業を受けることが可能になった。

授業といっても講師が来て授業をするわけではない。

四界で共通して問題なく学べるものは少なく、又世界が異なるため学べる教科の授業内容も異なるのだ。

だからこそ、基本は問題なく学べる言語に力を入れ、その他の内容は各世界が自世界の言語以外の授業をカバーすることになっている。

授業は課題形式で行われ、質問があればパーティーメンバーに聞くか、教室で待機している講師に直接質問する、もしくはメールするという方式をとっている。

講師の役目は課題の用意、そして各生徒の理解度、及び進行状況のチェックとなる。

ちなみに一度受けた課題はメモリーリングに登録されており、いつでも閲覧は可能であり、理解が及ばないところがあればメールで質問することも可能となっている。

午前中の座学を終え、昼食を取った後、この学園の授業のメインとなる、仮想世界での魔法実践を受けるべく、その施設に向かった。

この施設はこの学園都市でも最大規模の施設でもあり、中心点でもある。

施設の外形は円筒型の塔の様なものであり、壁面は銀色を基調としており表面も凹凸がなくつるつるとしている。そして、塔には窓もなく外からはその内装が窺い知れない。

施設内部はまず一階が待合室、及び休憩室となっている。数は限られているがパーティー単位で利用できる部屋があり、シャワーを浴びることもできる。

二階以降は仮想世界へ入るための専用機器がずらりと並んでいる部屋がある。

二階以降には中央にある専用エレベーターでいくことになる。エレベーターといってもアスフィアのようにワイヤーを用いることで上下するようなものではなく、かつてこちらに來たときのように瞬間的なものでほとんどタイムラグはない。詳しい原理は透達にはわからないが空間と空間を繋げているそうだ。

そして階の各部屋には仮想世界に入るためのシステム、通称、卵〈エッグ〉が八台設置されている。卵〈エッグ〉と呼ばれているのは、この機械が黒い卵のような形状をしていることに由来している。

透達は受付にいる係員にエッグの使用許可を貰い、空いている部屋の番号を言い渡された。その後、透達はその番号の部屋がある階層へエレベーターで移動した。

エッグの使用はパーティー単位はもちろん、個人単位でも使用は可能である。使用する際は使用目的を告げ、それに応じて係員が番号の部屋にその目的を達せることが可能な仮想世界を利用できるようにする仕様になっている。本人の許可が必要となるが、申請すれ

ばそのエッグを使用中の行動を後から観察することは可能だ。これもメモリーリングに登録され、いつでも個人及びパーティーで見ることが可能である。

仮想世界は魔法の訓練、及び授業の課題として使用される。だが、本人達が望めば現実世界での鍛錬も可能で、周囲にそのための施設が用意されている。また、そのための講師も当然その施設で待機している。

仮想世界で鍛錬を積み、現実世界で成果を結ばせるのが通常の訓練方法だ。

透達は使用許可が下りた部屋に入る。

其処には黒い卵の形状をしたカプセル状の機械が四個ずつ二列に並んでいた。

空いているエッグにそれぞれ入り、体を横たえようと、頭部脇にある開閉ボタンを押す。

すると、エッグが徐々に閉ざされていき、完全な闇に包まれる。しばらくすると『仮想世界に入りますか?』と確認画面が出てきたので、イエスと答える。

秒読みが始まり、それがゼロになると意識は闇に落ちた。

意識が覚醒すると、透は草原地帯に立っていた。

次々と他のメンバーが現れ、全員が揃った。

透達が今回、指定したのはただの草原地帯。望めば的が出てくる練習用の世界だ。

この世界にいる透達は仮想体で、本体はエッグの中で睡眠状態にある。

仮想体はほぼ忠実に本人の能力を再現でき、例えばこの中で怪我を

しても、致命傷を負ったとしても現実の肉体に反映されることはない。仮想体であるがゆえに、多少の無茶はできるが、痛みも再現されている。痛みや五感すべてが忠実に再現されているのは、仮想世界と現実世界を混同させないためである。

また、多少はここでの動きが現実の肉体に反映され、肉体に筋力をつけさせることも身体に動きを教え込むことは可能だ。しかし、若干の違和感が発生するらしいので、それを埋めるために現実で動きを確認するそうだ。

この世界は一定以上のダメージは全て無効化されるため、仮に世界を壊すほどの力を発揮しても、この世界は顕在することはできる。

透達は二手に分かれた。透、鈴音、ルーナとフィン、ノルンといった具合にだ。

こういう風に分かれたのには理由がある。

透達の方は魔法の練習のため、ルーナはその監修。

フィンとノルンは朝にしている鍛錬では物足りないところがあるので、思いつきり大暴れするためだ。

なので、フィールドの大半を彼女達の為に利用するために、フィールドを区切る。四分の三ほどを彼女達に渡し、透達はいそいそと鍛錬に勤しむ。

フィールドを区切っている部分は仄かに光を発しており、透達の方に被害が来ることはない。

透と鈴音は今回、ルーナに三界の魔法を教えてもらうことになっている。

今回、教えてもらうのはガイアノークが好んで使う、無属性魔法だ。

無属性魔法とはいわゆる炎、雷、氷、水といった自然現象ではなく、単純な衝撃、切断、吸収といった物体にかかる作用のことを指す。

ガイアノークは遠距離攻撃を通常時では使えない。なので、こう言った魔法を重宝することで接近戦を制圧するそうだ。

ちなみに、クロウが初めてその姿を見せた時、光の弾が当たり、彼を弾き飛ばしたが、それは衝撃の魔法が込められていたからだそうだ。

ルーナは透達が魔法を理解しやすいように懇切丁寧に教える。

「魔法を使う際、最も重要なのはイメージです」

「イメージ？」

「はい。例えば衝撃の魔法を使う際、その形状は球状が多く使われ、切断の場合は鋭い線状のものが使われるのはそれが相手に当たった際、どうなるかイメージしやすいからです」

「イメージの強さで強弱が決まるの？」

「必ずしもそうではありません。そうですね……ボク達の魔法は二つのパターンに分類されます。一つが即席で創った魔法、これはイメージが優先されますし、エーギルの消耗の割には効果が思ったよりも発揮できない場合があります。もう一つが武器に登録した魔法を使う場合ですね」

「武器に登録？」

「はい。ボク達が通常使う魔法はこちらにあたります。こちらは既にイメージが固まっているので注がれるエーギルの量の差がそのまま強さになります」

「私持っていないよ」

「俺は既に持ってるから今度、リーネ専用のを用意しよう」

「うん」

「無属性魔法に関してはこんなところですかね。じゃあ、あとは実践あるのみです」

ルーナはこの世界でのみ使われるメニューを呼び出し、的を用意する。

的はサンドバックの形をしており、ルーナは拳を密着させて、そこから拳を動かさず、魔法のみで動かすようにと指示する。

魔法は本来、専用の武器ナノマシン、魔法記録装置へレコード＜がワンセットとなっている。

レコードは通常、常備できるように指輪、腕輪などの装飾品に変換されており、戦闘時に登録された武器の形状に変換される。外した状態でもすぐに手元に呼び出せることはできる。それは装飾品に変換されているレコードはあくまで一部であり、本体ではないからだ。装飾品に変換された一部はあくまで武器の形状の登録の変換や性能のアップデートを行うための触媒に使われる。

レコードを介して魔法は初めて制御・強化できるのであり、レコードを介さない魔法は遥かに劣る。

また、レコードが戦闘状態に起動している場合、魔法はそのレコードを介してしかまともにその効果を発揮しない。
故に――。

先ほどから透は衝撃の魔法を使用しているが、ほとんどサンドバツクは揺れない。直接殴った方が遥かにましだろう。

透は魔法の使用を諦め、鈴音の方を見る。

鈴音の方は上手くいつているのか、九十度とまではいかないが三十度程の揺れを繰り返している。

そして、光の壁の向こう、フィン達を見遣ると幻想的でありながらも、暴力的な光景が繰り広げられていた。

フィンは今、目の前の敵に歓喜の心を打ち震えられていた。

彼女は現在、四界でも最強であり、いくら軍を束ねようとも彼女一人に打ち勝つことはできない。

だが、どうだ？ この目の前の敵は自分に対抗している。四界で最強であるはずの今の自分にだ。

彼女の全ては透に捧げられている。透が相手を滅ぼせと言うならば、喜び勇んで滅ぼすし。戦うなど言うならば、戦わない。透が全てにおいて優先されるからだ。

だがしかし、彼女自身は元々力を心棒とするヴェルディンに生まれた。故に、力を奮うことを快楽とすること、強敵と相まみえ戦うことを価値観の一部として引き継いでいる。この価値観は消えたわけではない。まして嫌っている訳でもない。ただ、優先順位が下がっただけだ。故に――。

「ふはははは！」

目の前ではフィンとノルンが戦火を交えている。

余人では二人の姿は霞んで見え、動きを追うことは叶わず、何が起こっているか彼女らの戦いの爪痕でしか悟ることはできないだろう。

だが、ルーナは違った。彼女には類稀なる力があつた。二人の姿をリアルタイムで追うことができる。

フィンとは白と黒の双剣を握りしめ、時には急接近して剣戟を流れるように途切れなく斬り結び、時には遠距離から雷撃を、業火を、空を覆い尽くさんとするかのように相手に降り注がせる。

ノルンは細身の剣を突きを主体に肉迫するフィンを牽制し、彼女の周囲に待機させてあるエーテルの水を凍らせ、爆発させ、解き放てば嵐の如く吹き荒れる風をフィンを逃がさぬように殺到させる。

常人では決して届かぬ、世界を破滅させんとする力を完璧に制御していた。

ルーナは自分の首にある首輪に意識を向ける。ソルガ達とはデザインが異なる首輪には水晶の如き透明度を持つ宝石とは異なる魔石が静かに存在していた。

ルーナにとって二人の存在は眩しすぎた。

何も彼女達の力に憧れている訳ではない。彼女は戦闘は好きではないし、無闇に力を振り翳すことはしない。

では何故か？それは彼女達が力を完璧に制御しているからだ。

彼女は歴代の龍皇族でも一線を二つも三つも画していた。制御できぬほどに。

彼女は恐れている。この世界を枯らすことができる力を。

ガイアノグでは獣化が制御できて成人とされる。彼女が双子の妹は違い、身体が幼いのは獣化が制御できていないことの象徴だ。

両親は獣化が制御できないのは、精神的なものだと言う。力を恐れているから制御ができないのだと言う。だが……何故力を恐れないでいられようか？ 世界を枯らす力を……。

両親が透達と暮らすように言ったのは、何も友好の証だけというわけではない。期待したのだ。環境が変わることで、精神に余裕がで

き獣化が制御できるようになるのではないかと。ソルガは表向き反対していたが、内心ではそれを期待していた。だから本気で反対はしなかった。最後には渋々それを認めていただろう。彼女はそれを知っている。

どうすればいいのだろう、ボクは？ その答えは出ている。だけど、ボクはボクの力が怖い。あんなものを恐れるなど言うのか？

誰もがボクが力を恐れていると知っている。だから制御できる自信を付けさせようと鍛錬させてきた。……成果は一向に挙がらなかったが。

——ボクは本当にどうすればいいのだろうか？

答えは出ているが認めることができない袋小路の中でルーナは迷う。

この晩の団欒の話題は当然の如く、フィンとノルンの戦闘になった。

「ノルン殿があれば強いとは思わなかったぞ！」

「結局は負けてしまいましたか……なんですかあのエーギル量は」

彼女達の勝負の明暗を分けたのは、ノルンのガス欠だった。とってもフィンにあそこまで付いていけるほうが異常なのだ。

「うむ。それは愛の力だ」

ふはははと実に上機嫌よく笑い、ノルンを賛美する。よほど楽しかったのだろう。

ノルンの称賛を嗅ぎとったのは当然の如くメルルで、ノルンを褒めはやす。

「そうでしょう！　そうでしょう！　ノルン様はその女神の如き美貌でも有名ですが、カノンフィールでも空前絶後の魔法の使い手でもあるので、皆の憧れの的なのです」

メルルがそういった途端、ノルンが少しばかり眉を顰める。

透はそれを見ておや、と思う。ノルンは以前から常に無表情であったが、最近では透達の前でだけ、わかりにくいが少しだけ表情が出るのだ。彼女がここまで感情を表したのは珍しいことなのだ。

透は彼女の境遇から推察できるが追及しなかった。

「そうだ、フィン。聞きたいことがあるんだけどいいかな？」

「何だ？　何でも聞くがよい。何でも答えるぞ」

「リーネにレコードを用意した方がいいと思うけど、どうすればいいかな？」

「む、レコードとな？　ならば……ラグナ殿にでも聞くな。あの御仁ならば用意してくれるだろう」

「そのことでしたら大丈夫ですよ」

聞き耳を立てていたのかルキが会話に加わる。

「どういうことだ？」

「風音様が鈴音様専用のレコードをお造りになったとか。休日にも研究所に来て欲しいとのことですよ」

「ママが？」

「はい。研究所の場所はメールにあるそうです」

「あ、ホントだ」

鈴音はメモリーリングのメールボックスを確認する。

「透君も来て欲しいってあるけどどうする？」

「俺も興味あるし、行こうかな」

透は既にレコードを所有しているが、鈴音のレコードがどのようなものになるか気になった。

「どうせならついでにデートでもしたらどうだ？」

フィンの提案に鈴音は一も二もなく喰いつく。

「でもいいの？」

休日一人占めしてしまうことを言っているのだろう。

「妾は別の日にするから構わんぞ」

「そっか」

夜もすでに遅くなっているのでこの日はこれでお開きになった。

「レコードの形状は何にする？」

話題に選んだのは休日に入ることになるレコードについてだ。

「うーん。……どんなのがいいと思う？」

唸りながらゴロゴロと、透の身体の上を転がりながら尋ねる。何故ゴロゴロするかはわからないが、ちょっとした彼女なりの甘え方だろう、多分。

「少なくとも剣とか接近戦の類は駄目だろう。武術の心得とかななし」

鈴音は五年前までは身体を動かすことも儘ならなかったのだ。そんなものがあるわけがない。鈴音がどちらかというとインドア派だということを透は知っていた。

「よくある杖とか？」

「魔法少女とかの類の？」

「うん」

「それでいいなら止めはしないけど。……デザインはどうする？」

「あ、そうか……どうしょ？」

「デザインは後からでも変更は可能みたいだし……探して何か気に入ったのがあればそれにすればいいんじゃないかな。杖にする必要もないんだし」

「じゃあ、何がいいか探さないとね」

そう言ってまた転がりだした。

「で、さっきから何やってんの？」

「これのこと？」

「そう、それ」

「いつもは透君のベットでゆったりと寝てるわけじゃない？」

今日は鈴音の部屋で寝ている。だからフィンと同じく一人分のベットなので狭く感じていた。

「だから転がってみました」

「訳がわからん」

嬉しそうに転がる鈴音。だが、ここは一人分のベットだ。今にも鈴音は落ちそうになる。その度に彼女が落ちそうになるのを防ぐために手で支えている。鈴音はそれが嬉しいのか、それとも楽しいのか何度も往復する。

だが、考えてみてほしい。鈴音が転がるたびに透は彼女の触っていない場所がない柔らかい肢体を、同じシャンプーを使っているのに自分とは違っていいにおいがする体臭を全身で感じるのだ。だからこれは必然である。

「あ……」

一瞬顔を赤らめたが、次の瞬間には妖艶に笑い、何をしに行くのかブランケットの中に潜り込む。

彼女が潜り込んですぐさま、透の下半身の一部から温かく滑った感触がする。……いったい何をしているのだろうか？

「何してるの？」

「ナニしてるの」

返ってきた答えに溜息をつく。

「……リーネもエロくなったね」

「誰のせいだと思ってるの!？」

ブランケットの中にいるためか、はたまた別の理由があるのかぐぐもった声がする。透にとって微弱の振動が少し気持ちよかったの

は内緒だ。

「え？ 誰のせい？」

「透君とフィンちゃんのせいだよ！」

確かにフィンは全く躊躇せず、透から寵愛を受けようとする。鈴音としても負けるわけにはいかないので、必然的に競うことになったのだ。しかも、ルキが次から次へとネタを変えては二人に提供する。二人は二人で何ら疑わずそれに従う構図になっている。

「それは否定できないけど……元からそうじゃないかな」

透はフィンはいわゆるオープンスケベというやつだと思っている。そして、鈴音は逆のムツツリスケベと睨んでいる。なんだかんだ言っても昔から妄想癖とかあることを知っていた。口では否定はするが、結局は従うのだ。——しかも喜んで。

「むう……」

今も唸っているが、止めようとはしない。ぴちゃ、ぴちゃと何かを舐めているかのような音がするが、そこは気にしてはいけなないことなのだ。

「で、嫌なら止めていいけど」

「……………」

リーネから答えは帰ってこなかった。その代わり、下半身の一部に何かが強く吸いついている。

——やっぱり、彼女はムツツリスケベだった。

フィンは今退屈していた。非常に退屈していた。何もすることがなくて退屈していた。

「むう。暇だ、暇だ、暇だ、暇だ、ひくまうだう！」

彼女はソファに寝転がり、暇だと連呼していた。

それもそうだ。今この家にはルキ以外誰もいない。彼女は誰もかまうものがおらず暇を持て余していたのだ。

休日ということもあってか、透と鈴音は研究所に行き、ノルンはアカディアにあるカノンフィルの大使館、つまり用事があるのかスルドの元に向かい、ルーナは同様にソルガ達の元に行ったのだ。

彼女は一人ぼっち。特に用事もない。透がいれば、デートに出かけるなりなんなりしただろうが、愛しの彼はいない。

「何をするべきか……むう」

彼女は今予定を探している。

鍛錬、それは味気ない。ノルンがいるならば話は別だが。

料理、食べさせる相手は今いない。

む、料理？ 街で食べ歩きというものもいいかもしれない。ヴェルディンの料理は食べ飽きてるから他の世界の料理を食べるのいいかもしれない。

ヴェルディンの料理は国柄か、量が多く、味付けも濃く、大雑把なところが多い。カノンフィルは手の込んだ料理が多いと聞くし、ガイアノーグは素材の味を活かした素朴な料理と聞く。アースフィ

アはそれこそ様々な料理があるだろう。

予定が決まり、どうしようかと悩む。

彼女の脳裏には節食という単語はない。

なぜなら、ナノマシンが過剰な摂食をエーギルに変換し、常に最適な状態に保つからだ。食事はエーギルの生成にわずかとはいえ利用されるため、わざと多く摂る者もいるくらいだ。

仮に過剰摂食したとしてもカロリーを消費するために運動すればよい。

例えば、透とプロレスごつことか……。くんずほぐれつの組体操とか……。

そこまで思い至り、彼女の顔は緩むが、その美貌は崩れることはなかった。

「によほ。によほほほほほほ」

奇妙な声をあげるがそれを咎める者はおらず、彼女はその欲望に従い食べ歩きツアーに出ることにした。

その彼女に待ったを掛ける者がいた。ルキだ。

「フィン様。出かけるのであれば、一つ頼みたいことがあるのです
がよろしいですか？」

「珍しいな。ルキが頼み事とは」

ルキはいつもであるならば、このような頼み事はしない。メイドとしての沽券にかかわるからだ。

だが、今回には理由があった。それは――。

「今現在嵌っているものがありまして……。それでどうせならフィン様にも使ってほしいと思ひまして」

「嵌っているものとな……それはなんだ？」

「頼み事の内容でわかりますよ。このリストをどうぞ」

ルキに渡されたリストには薬品名と思われるものが記載されていた。

「これは……」

「ガイアノークの薬品ですよ。あそこの薬は効果が高いんです」

「ふん。で、何に使うのだ？」

「調合して効果が高い薬品を作るのですよ」

「何の薬品を作るのだ？」

ようやく待ち望んだ言葉がフィンの言葉から出てきた。

「フィン様。エステという言葉をご存知ですか？」

——ルキは妖しく笑う。

透と鈴音は風音が待つ研究所に向かった。その研究所は学園の片隅にあり、機密保持のために厳戒態勢をとっていた。

研究所入り口の受付で館内を歩きまわる許可を得た透達は、風音

がいる場所を教えてもらい、研究室の扉を開けた。

風音はいかにも研究者というような白衣のファッションで透達を出迎え、共同研究者であるイリオス・アルケリウスと共に今回の趣旨である、鈴音専用のレコードについての説明に入った。

「まず、鈴音ちゃん専用のレコードは今までアースファイアで使われていたものと違うの」

「どう違うの？」

鈴音は自身の右手にある腕輪を外し、それを掲げる。

「アースファイアの魔法は三界の人達のように自分で生成したエーギルを利用して魔法を使う訳ではなく、世界に満ちているエネルギー、つまりマナを利用して魔法を使うじゃない？」

アースファイアの魔法は物体の内部に干渉して変化を起こしている。だが、アースファイアの魔法はレコードにマナを吸収して保持する装置を必要とし、使用回数、魔法の規模といったものはそれに制限されている。もしも、一つの装置に蓄えられているマナが無くなってしまうばもう魔法は使えない。だから、装置のストックを用意するのが通例なのだ。

「物体に干渉して変化を起こすには、マナを介してじゃないとダメ。エーギルじゃ駄目なの」

何でも、個人の属性に染まってしまったエーギルでは外からしか干渉できないそうなのだ。故に何物にも染まっていないマナしか物体の内部に干渉できないらしい。

「そこで用意したのがコレ」

風音が出したのは鈴音が今まで持っていたのとは違う腕輪だった。星型の台座に宝石が埋め込まれ、リング上には紋様が刻まれている。

「このレコードの名は〈転生〉。これなら鈴音ちゃんにもエーテルもフォースも使えるし、アースファイアの魔法、マギも使えるんだよ」

「どういう仕組みなんですか？」

「それは私が説明します」

口を挿んだのは今まで黙っていたイリオス。研究者の性か、自ら作った作品についての説明は自分でしたかったのだ。

風音も共同制作者の一人だが、何も言わず彼に説明を任せる。

「基本は私達のレコードと同じです。ただ違うのは……エーギルをマナに、マナをエーギルに変換できるということです」

透はそれに思うことはあったが、透の懸念については彼がすぐに解消してくれた。

「両変換できるといっても、これはまだ初期型であるせいか、それともマナを受け入れる器に問題があるのか、変換できる量はまだ少量ですね」

透はそれを聞いてほっとした。

「さて、鈴音ちゃん。調整しましょうか」

説明が終わり、研究成果を早く試したいのか、いつになく風音は張り切っており、鈴音を調整室に引っ張っていった。

透とイリオスは苦笑と共に見送る。

透が付いていこうと風音達が向かった方へと歩こうとするが、エリオスが話しかけてきたため足を止めた。

「あなたにも渡すものがあります」

「それって何ですか？」

「ラグナ様から開発してほしいといわれたレコードです」

「え、でも、既に持っていますよ」

「すいません。言葉が足りませんでした。正確にはレコードの補佐、つまり追加機能をあなたのレコードに追加するのです」

「どんな追加機能を付けるんですか？」

「はい。大量のエネルギーやマナを送ることができるパイプを新たに創ることができ、必要であればストックを容量が許す限り作成でき、それを自由に操作できる機能ですね」

透は聞いた機能の能力からラグナが何を狙っているのかははっきりわかった。

「……わかりました。お願いしますか？」

「はい。では、調整室へどうぞ」

――透の左手の薬指にある指輪が鈍く輝いた。

ノルンは父であるスルドと対談していた。

「彼らとの生活はどうだい？」

「そうですね……少なくとも悪いものではないですね」

それは偽らざる本音だった。透達のいちやつきぶりには少々辟易することがあるが、彼らと過ごして苦痛であったことはない。むしろ、自分が今まで生きてきた中で最も穏やかな時であることには違いなかった。

「そうかい……」

娘がお世辞を言っているのではないとわかり、スルドは安心する。無表情であるため顔の表情からは読み取ることができないが、今まで彼女にあった刺々しい雰囲気を感じられないことから真実だとわかる。

「彼は君にアプローチとかはするのかな？」

「……そういったものは一度もされたことはないですね」

ノルンは今まで星の数ほどの男に言い寄られてきた。言い寄られないことの方が珍しいのだ。――まるで呪いのような美貌によって。

恋人がいるからとも考えられるが、そういったものでもノルンに見惚れ、恋人に咎められ、その恋人に敵視されるというのが、彼女にとってのいつものパターンだ。

だが、透達は彼女が今まで接した中でも異彩を放っている。

透はノルンの美の女神も裸足で逃げ出すような美貌を見ても、平然とし、普通に接してくる。フィンや鈴音は彼女を全く敵視せず、それどころか歓迎までしている始末だ。今までなかったパターンにノルンは戸惑っているのが彼女の現状だ。

「そうかい……」

ノルンのことは彼女の従者であるメリルから仔細に報告を受けている。多少の脚色があるが、娘が自分から男に寄っていると聞いた時は驚いたものだ。それがほんの少しのことでも驚きに値する。ノルンが誰かに近づこうとするのはそれだけ珍しいからだ。

スルドは別に娘がどうでもいいという訳ではない。むしろ彼女の幸福を祈っているといいだろう。

五年前、彼女の母、つまりスルドの妻があの実験の暴走に巻き込まれ死亡した時から、彼には娘しか手元に残っていなかった。

娘はその時塞ぎこみ、母親を通じてあった縁を断ち切り、ますます周囲から孤立していった。

また、彼も妻の死から逃げるように仕事にのめりこんだ。

ラグナから学園都市アカディアの件が持ち上がった時、それに拍車がかかったといってもいい。

彼は別にヴェルディンに恨みを抱いてはいない。

妻の死の原因となった実験の暴走は自分たちにもあること、仮に戦争にもなれば自分達は壊滅的な被害を受けることが分かっていたので、自らの感情を自制することができた。

また、自分達が恨まれても仕方がない立場にいるため、それをいつも覚悟していたのもその一因だろう。

彼はもしかしたら娘の憩いの場を壊してしまうのではないかということを理解していた。

だが、どうしても聞かなくてはいけないことがあった。――今の自分の立場ゆえに。

スルドは精神を落ち着けるために、用意されている紅茶を一飲みし、深呼吸する。

そして、今の平和を崩してしまうかもしれない言葉を発する。

「――ヴェルディンの王女、フィンに勝つことは可能かい？」

聞かれた問いに、今までのデータを冷静に検分し、問いに答える。

「一対一ではまず、不可能です。彼女のエーギルは膨大です。こちらが先に尽きてしまいます」

ノルンは感情を挿まず、導き出された答えを偽りなく答える。

「……そうかい」

それは既に分かっていたことだ。いくらカノンファイルの切られなかった切り札でも勝つことはできないだろうと、調査から分かっている。

――だから、聞くべきことは……。

「――では、君を含めた複数では？」

ノルンは一拍間を空けて、

「――可能だと判断します」

平和を崩す言葉を発した。

透が帰宅すると、満面の笑顔でフィンを出迎える。

「おかえり！」

「ああ、たたいま」

フィンが今にも踊りだしそうな雰囲気をしている。

透はなにかあったのか気になったので聞いてみることにした。

「秘密だ！」

「そう……」

フィンが隠し事をするのは初めてだが、透はそのことを別に怒る気はない。自分に関係があれば話してくれればいいと思っている。

「楽しみにしておれよ！ むふふふふ」

フィンの笑いから関係があると踏み、いわゆるサプライズというものだろうと睨む。

しかし、透はあの妙な笑いが気になっていた。あの笑いをする時、ろくなことが起きないと彼の経験が告げていた。ルキに何か吹き込まれた可能性がある……。

その予感は的中していた。

透はいつもどおりフィンと一緒に入浴しているのだが、彼女は突然用意するものがあると脱衣所に向かった。

戻ってきたフィンが手にしているものは何かの液体が入った容器だった。

外からでは詳しくは分からないが、粘性があるように思える。

「それ何？」

「説明するからうつぶせになるがよい！」

マットを指さしたので、透は言われたとおりにうつぶせになってみた。

「妾が疲れを取ってしんぜよう」

フィンは自分の手に液体を垂らし、透の身体を隅々まで染み込ませるように塗す。

その合間にツボらしきものを押したり、整体したりと丹念にマッサージする。

「その液体は何？」

透は先ほどから聞きたかったことを問う。

「これはだな……マッサージオイルというものだ」

「マッサージオイル？」

「うむ。ルキが調合した特別製のもので、美容効果や、肉体及び精神の疲労回復等、様々な効果があるらしいのだ」

「ふん。マッサージは？」

「夫の疲れを癒すのは妻の役目だからな。一緒にすると効果は倍増らしいのだ」

えへん、と胸を張るので、ある部分が揺れ、注目していたのだが、誤魔化すように続きを頼む。

マッサージし終えたのか、フィンは手を休める。

そして、恥ずかしがっているが、フィンはどこか興奮したさまでいる。

「その……だな……妾にもして欲しいのだ」

「マッサージの仕方はわからないけど……」

「それならここにある」

透達は右手の中指にあるメモリーリングを重ねあい、情報のやり取りをする。

メニューには新しい情報が追加されていた。
その情報に従い、真似してみることにする。

「あまり、気持ち良くないかもしれないよ」

「してくれるだけで嬉しいのだ。……それに上手くなるまで妾で練習していいぞ」

顔を赤らめ、恥ずかしそうに言う。

そして、何かを我慢しているようにもじもじしている。
これに応えねば、男ではあるまい。

「じゃあ、するから……うつぶせになって」

「……うん」

結果だけと言うなら、お互いにマッサージが少し上達した。

余談ではあるが、フィンからは調合された粘り気のある美容液と
同じようなものが出てきたと明記しておく。

そして、透達の間では時々これをする事になったのは当然の成
り行きであった。

ルキとフィンの狙い通りになったことは言うまでもない。

第三章 学園都市アカディアと魔法授業 後編

鈴音が専用のレコードを手にしたので、魔法の扱いは次の段階へと進んだ。

「属性魔法についての説明に入ります」

今日の講師役はノルンとなり、フィンとルーナは鍛錬をしている。ルーナが遠距離攻撃を使えないためか、フィンが接近戦のみで相手をする和张り切っていた。

「フォースに関しては身体能力の向上のみになるので、説明は省きます。精々、エーギルを振り分ける割合、無属性魔法の習熟くらいですので」

ノルンは意識を集中し、エーテルで水を出した。

「フォースは現象の理解から始まります。例えば、この水だと……」

水が氷になり、その後また水に戻った。

「エーギルを粒子だと捉え、停止した状態をイメージするのです」

「炎だとその逆？」

「はい。そのとおりです」

ノルンは水を消し、炎を出した。

「一度イメージを固定してしまえば、レコードが勝手に登録します。私達がすることはエーギルをどれだけ注ぐか、どれだけ数を出すか、どこに出すかなどですね。基本の状態を抑えてしまえば、後することは魔法の登録くらいですね」

「魔法の登録？」

「以前言っていた魔法名のことですね」

大きめの氷を出し、射出する。しばらくすると氷は破裂し、周囲に破片を勢いよく撒き散らす。

「このように、基本状態から次の状態へと変化させることを登録といます。といっても、イメージがしっかり固まるまでは何度も繰り返す必要がありますが」

「この時エーギルの消耗はどうなる？」

「もちろん、変化させる分大きくなります」

透の問いにすぐさま答えが返ってくる。

「属性魔法って使えるものに個人差はある？」

「ありますが、炎を出せて、氷は出せないといった類のものではありません。使う本人が使用する好みといった類ですね。炎が使いやすいなら炎を中心に魔法を組み立てるといった……」

「そうなんだ」

「では、まずは基本の状態を押さえましょうか」

「私を弟子にしてください」

ある日の晩、メリルがハティに必死に縋りつかんばかりに頼み込んでいた。

「……何？」

突然の申し出にハティは戸惑っているようだ。

ハティはルーナの護衛でもあるので、常に傍にはいるが、姿は見せていない。姿を現すのは用を頼んだ時か、食事を摂るときのどちらかになる。

今現在夕食後の団欒にメリルはハティを呼び出し頼み込んでいるというわけだ。

「突然、どうしたのですか？」

そう聞いたのは彼女の主であるノルン。突然の従者の行動に驚きを覚えていたのだ。

「はい。彼女の撮影技術に惚れこんでしまい、こうして弟子入りしようとする所存です」

ハティの趣味は撮影。

といっても、プライベートの時だけではない。護衛中も隙あらば彼女はルーナを撮影しているのだ。

「それで弟子入りですか？　ハティはどうするの？」

「……面倒」

ルーナの問いにスパッとメリルの弟子入りは駄目だと言う。

「お願いします！　私にその技術の真髄を教えてください！」

断られても尚もしがみつくメリル。それほどまでにハティの撮影技術はすごいのだろうか。

「そんなにハティの撮影はすごいのか？」

「はい！　それはもう！　あの被写体の自然な状態。あれはもう、撮影されているとは意識されていないようでした。しかも、表情の決定的瞬間を逃さない、あの予測眼。素晴らしいの一言です」

ハティも自分の撮影技術を褒められて嬉しいのか照れている。

「ハティ……メリルさん、こんなに褒めてくれるんだから弟子入りさせてあげたら？」

「……御意」

ハティも主の意に逆らわないのか、メリルの弟子入りを許可した。

「やった~~~~~！！」

願いが叶って嬉しいのか、メリルは素直に喜びの歓声をあげる。

「ハテイは裁縫も得意なんですよ」

「そうなの？」

「ボクが着ている服のほとんどはハティが作ったんです」

「なんと！」

新たに得られた師匠の情報にメリルは目を輝かせる。

「師匠！ 私にもその技術を伝授してください！」

「……わかった」

「きやつほ～～！」

最早嬉しさが止まるところがないメリルは暴走状態だ。……しかし、何のために使うのだろうか。

「何でそれを習おうと思ったんだ？」

「それはですね……」

うつつつつふ、と何かを言うことを溜めているメリル。顔が緩みまくり、今にも涎を垂らしそうだった。

「ノルン様の麗しいお姿を盗さ……げふん、げふん……記録に残すことです!!」

「今、盗撮って言わなかったか？」

「気のせいです！ 私のノルン様メモリーは十冊に及びますが、まだまだ納得いける物はないですよ！」

ドドーン！ と胸を張って変態的なことをのたまうメリルに、ハティはポンと彼女の肩を叩き、信じられないことを暴露しちゃいました。

「……甘い。私は百冊」

「——なんと！ さすが師匠です！」

変態共が自らの成果をお互いに暴露しちゃってます。

「ねえ、あれ止めなくていいの？」

鈴音の言うことはもつともだ。

ルーナは己の従者の所業に苦笑を浮かべるだけで、何も言わない。ハティの所業には慣れきっているらしい。

「妙なことをすれば調教すればいいだけです」

物騒なことを仰るのはノルン様。……ほどほどにしてくださいね。

「あの組み合わせは相当まずいのでは……」

フィンの言うとおりだ。

ストーカーとマゾ、双方が組み合わせって新たな生物を誕生させるに違いない。

「――始末に負えなそうだな」

透の言葉に全員が首肯する。

――ああ、変態達の明日はどっちに行く……。面白そうだから放置しておこう。

「妾のターンだな！」

開口一番フィンは自分が魔法授業講師の番が回ってきたことを告げる。

「フィン先生、よろしくお願いします」

「うむ、任せよ！」

二人ともノリがいいのか、コントのようなことをしている。

「今日やるのは応用編だ」

「応用編？」

「うむ。妾達は無属性魔法と属性魔法を単体のみで使う訳ではない。例えば……」

フィン hands 炎を現出させ、炎を劍の形に収束させた。

「これは炎の属性魔法に切断の無属性魔法を付加させたものだ」

「熱くないの、それ？」

炎の劍は今尚、フィンの掌で渦巻いている。その熱気が透達にまで伝わってきているので、それを直に握っているフィンは相当なものではないだろうか。

「熱くないぞ。創り出された魔法は創り出した本人を傷つけることはない。他は別だがな」

フィンは炎の劍を消し、説明に戻った。

「複合魔法は単体魔法に比べ、消費は当然大きい。単純計算では二倍になるのだからな」

「球状の形をしたものに切断の無属性魔法って付加できる？」

「結論からいえば、出来る。だが精々牽制、もしくは意表を突くくらいしかできない。何故だかわかるか？」

「イメージしにくいから？」

「そのとおりだ。魔法は登録する際、どうしてもイメージに引き摺られてしまう。故に、炎の球に切断を付加したときと炎の劍に切断を付加した時に比べ、威力は後者の方に分がある」

「どれくらい？」

「そうだな……半分も行けばいい方だろう」

「注ぎこむエーギル量は同じでも？」

「うむ。だから大抵は後者を選択するのだ」

「そっか……」

「さて、では実際にやってみせよ」

「あふん」

恍惚とした声をあげるのはメリル。彼女の表情は完全に逝っていた。

彼女は今、ノルンが創り出した光の縄でぐるぐる巻きにされている。

「何を喜んでますか」

メリルが恍惚としているのが気に障ったのか、簀巻き状態のメリルに座り込んでいるノルンは光の縄に電流を流す。

「——っ！！ あ~~~~~~~~！！」

流される電流は耐えられないほどの激痛を発するものではない。むしろ、痛みを発することができ、なおかつ少し我慢すれば痛みに

耐えられる絶妙な加減の電流だ。

だが、ノルンから与えられる痛みを快楽に変更できるメリルにとって、問題は痛みではなく快楽の方だった。

ノルンも痛みを与えるのは心を痛めるのか、それとも得策ではないと悟ったのか、強い電流と弱い電流を交互に流すことでメリルにお仕置きをしていた。

「で、今度は何やらかしたの？」

ノルンとメリルのSM劇は、ノルンにとって甚だ不本意であるだろうが、珍しいことではない。一週間に一、二回程度は繰り広げられている。

「この子が私の着替えを盗撮していたのですから、こうしてお仕置きしている訳です」

再び電流を流す。メリルが駆け巡る電流に喘ぐが、誰も気にしない。

「メリルが盗撮することってよくあること？」

「ええ。しばしば覗き見します。カメラに収めようとすることは珍しいですが、それでもその度にこうしてお仕置きしているのです」

メリルがぜい、ぜいとさすがに何度も電流を浴びせられるのは辛いのか、それとも別の理由があるのか、息が荒れたまま弁解してきた。

「仕方がないですよ。ノルン様の艶姿は実に麗しく、これはもう記録するしかないと思ったのです」

「で、何に使うの？」

「もちろん、オカズに！ あばばばばばば！！」

最早弁解した所で彼女の罪は許されることなく、それどころか変態ぶりを暴露する始末。

罪人に人権あらず、とノルンは先ほどより強力な電流を流す。

「そんなに下着姿が見たいなら、自分のを見ればいいじゃないのかしら」

ノルンがそういった次の瞬間、メリルの服が所々切り裂かれ、切り裂かれた服の隙間からメリルの鍛え抜かれているためか引き締まった肢体が、フリルのついた扇情的な下着が露出する。もちろんメリルの柔肌には傷一つない。

「自分のを見ても嬉しくくないですよ！ ノルン様のじゃなきや駄目なんです！」

「まだ言いますか」

「にゃあ~~~~~！！」

メリルが痛みを紛らわせようと身を振らせるたびに、服の隙間から覗く肌が面積を増し、見る者に劣情をもたらせる光景が広がる。そのような光景を見逃すはずもなく、

「……いいね」

ハティがカメラを手に、メリルの艶姿を撮影していた。

「いつから撮影していたの？」

鈴音は彼女が撮影していることに気付かなかったのか、己の疑問を解消すべく問いかける。

「……メリルが劣情を白状した時から」

「そっか、気付かなかったよ」

フィン、ノルン、ルーナはなんとなくは分かっていたらしく、ハティの言葉に驚くことはなかった。

「さすが師匠です！ 全く分かりませんでしたよ」

メリルは気付いていなかったらしく、ハティの陰形を称賛している。

「……まだあなたは未熟。欲望を消して、相手に悟らせないことが盗撮の秘訣」

「く！ しかし、師匠……欲望を消すなど私には到底できません！」

「……だから未熟。欲望を完全に抑え込み、気配を断ち、自然と一体化し、景色と同化するのが一流というもの」

「さすが師匠！ 勉強になります！」

変態達の三文芝居は続く。

ノルンもさすがに呆れたのか、はたまた飽きたのかメリルの身体から退き、光の縄を解く。

「私、やります！盗撮の道を極めて見せます！」

光の縄が解かれたこともあってか、所信表明すべく勢いよく立ちあがる。

だが、思い出してほしい。彼女が身に付けているものはノルンによってほとんど切り裂かれていたことを。

——故にこれは必然か。メリルの服は重力に従って落ちる。

「あ」「」「」「」「」「」「」

すっぽんぽーん。

透達の騒がしい夜は続く。

「本日は実戦編だ！」

さすがは力を信条とするヴェルデインの王女。張り切っております。

今日は実戦編とあるだけに三人とも自世界の戦闘スタイルを披露する予定であり、三人が講師となっている。

「応用編まで学んだなら分かるだろうが戦闘の際、複合魔法が戦闘の要となる」

「この複合魔法の使用方法的な差がそのまま三界の戦闘スタイルの差

となります」

ルーナが一步前に出て、ガイアノーグの戦闘スタイルについて説明する。

「ガイアノーグは以前話した通り、遠距離攻撃は通常できません。ですので、基本はフォースとなります」

ルーナの拳に炎が宿り、用意されていた的を、その炎を纏った拳で打ち抜く。

的は粉々になり、破片は後片もなく燃え散った。

「このようにフォースで身体能力を強化し、属性魔法を特定部位に纏わせ、無属性魔法でそれを強化するというのがガイアノーグの戦い方です」

次にノルンが前に出る。

「カノンフィールはガイアノーグとは逆にエーテルを多用します」

ノルンはエーテルで出した水を周囲に纏う。

「このようにエーテルを常に出した状態でエーテルを操り、エーテルを変化させて戦います」

ノルンは水を縦横無尽に虚空に走らせ、時には氷、時には蒸発させたりする。

「私達は主に水や風を使いますが、これは他の属性が使えないのではなく、水や風が流動的で変化に多様性があるからです」

最後にフィンが前に出る。

「最後はヴェルデインだな。ヴェルデインはまあ……二つの中間だな。接近戦を好む者はガイアノークと同じようにするし、遠距離戦が好みの者はカノンフィールのように遠距離から相手を制圧する。どちらの戦闘スタイルもとれるのがヴェルデインといえよう」

「ヴェルデインとカノンフィールの魔法の違いってあるの？」

フィンは透の質問に少し悩み、どう説明したらいいか迷う。

「厳密に言えば、ない。分かたれるまで一つだったのだ。分かれてから技術が異なってしまうほど長く時が過ぎた訳でもないこと、また既に完成された領域にあることからほとんど差はないのだ」

「じゃあ、スタイルが分かれたのは？」

「それは戦闘スタイルがそのまま派閥関係であったことが起因となっていたことだな。妾達ヴェルデインは魔法の速射性、エーギルからエーテルへの変換時のエネルギーの効率化等戦闘に関わることを重点的に発展させていった」

「カノンフィールではエーテルの持続性、精密制御といった戦闘よりも芸術性を重視しています」

「その通りだ。妾達が使う魔法は威力を重視してしまうからか、すぐに消えてしまう」

それを聞いて気になることがあったのか、カノンフィールの魔法

について透は聞いてみる。

「カノンフィールのエーテルってどうしてあんなに持つんだ？」

「ああ……それはですね、カノンフィールは大規模な魔法を使っている状態にあります。ですが、それを瞬間、瞬間で使ってしまうとすぐにエーギルを消費してしまいます。ですから、最初に大規模な魔法を出し、それを自分のエーギル生成量などと相談して最初の大規模魔法を継続させているのですよ」

「妾達は小規模な魔法で牽制して、大規模な魔法で止めをさすスタイルだな」

二人は説明を終えたのか、息を深くつくつくと生徒の二人を見据えた。

「説明はこんなところか。アースファイアは独自の魔法があることだし、妾達の戦闘スタイルに付き合う必要はない。自分達に合うスタイルを探すべきだな」

「うん、わかった」

この日は自らの戦闘スタイルを模索することで魔法教室は終わった。

ラグナ、スルド、ソルガの三人は一堂に集まり、今後のことについて話し合っていた。

「カノンフィールの反対派が演習の申請を議題に挙げているがどう

する？」

「むう、それは……」

スルドがもたらした言葉は事実上、宣戦布告に等しい。演習と銘打っているが、これは演習に負けてしまえば即座に開戦の口実となりうる。

なぜならフィンの戦闘力で和平が成立している以上、彼女が負けてしまうということは和平を崩すきっかけとなるということだ。

仮に、賛成派が多数ならば抑え込むことは可能だ。

しかし、カノンフィールは反対派が多数を占めており、反対派が強行してしまえば成す術はない。

ソルガもそれを分かっているからこそ唸りをあげたのだ。

もちろんラグナはそれを十二分に承知している。

だが、彼は余裕の表情を保ったままである。

「別にかまわないよ。何の問題もない」

これに否定の意を唱えたのはスルドだ。

もし、このまま可決してしまえば、演習はこちら側の敗北という結果をもたらす証拠を握っているため演習は回避すべきだと唱えるのだ。

「しかし、戦闘になれば負けてしまうのではないか？」

「へえ、どうしてそう思うんだい？」

ラグナは根拠もなくスルドがそんなことは言わないことを知っている。彼がそう思う証拠を聞き出す。

「ノルンが個人では無理でも、自分を含めた複数なら勝てると断定した。それだけでは不十分か？」

「なるほど。君達の切り札か……」

ラグナもノルンがフィンに近しい実力を持っていることは知っている。

そして、今のフィンでは彼の言うとおりになることも……。

——だが、ラグナはそれでも問題ないと判断できる。なぜなら……。

「安心したまえ。何の問題もない」

スルドはラグナの尚も変わらぬ余裕の表情に、自分達が知っている以上のことを彼が知っていると悟る。

「他にも何かあるということか……」

「さて、ね……」

誤魔化しているが、あれは確信している者の態度だと、スルドは目の前のこの男との付き合いで分かっている。

「貴公がそういうのなら問題ないのだろう？ いいのだな？」

「かまわないよ。ただし、条件が一つだけある」

「なんだ？」

「君達の相手をするのはフィンとその婿である透君の二人だ」

スルドは目の前の男から出された条件に瞠目する。
やはり、自分の知らない何かがあると確信する。

「いいのか。彼はたいした力を持っていないと聞くが」

「かまわないよ。彼らは二人で一つだからね」

余裕の表情を浮かべるラグナに、スルドは真相を尋ねるべきかと悩むが、この場にいるもう一人、ソルガが躊躇いもなく問い質す。

「ラグナよ……儂らは運命共同体だ。今後の行動の指標の為に真実を教えてくれぬか？」

「わかった。彼らは……」

ラグナからもたらされた真実に、スルドとソルガは衝撃のあまり啞然とした。

「それは……本当なのか？」

「本当だよ」

ソルガはもたらされた真実が信じられず、思わずもう一度問い質したが、返答は何ら変わらなかった。

「それが真実だとすると……まさか実験は成功していたのか」

「それには語弊があるね。彼らに関しては予想外の戦果をあげてし

まったという方が正しいかな」

どちらにせよ、この事実が本当なら演習はカノンフィールの敗北となるのは最早決定事項だ。

「どちらでもいいさ。それなら私達がとるべき道は一つということか」

「理解はできるが……納得はいかんぞ」

ラグナは項垂れる二人をにやにやと笑うと、すぐに顔を引き締め、
「元々僕達は和平を前提に行動している。ならば、より強固になっただけで何の問題もない」

ラグナの言うことは的を得ていた。
だが、二人が問題としているのはそこではなかった。

「まあ、あの様子ならば大丈夫だと思うが……むう、予定範囲内ではあるが」

「確かに許可はした。したが……」

ラグナは今度こそ心置きなく、落ち込む二人をにやにやと笑いな
がら眺める。

「そういう訳だから、そのように頼むよ」

「……わかった」

「納得いかん！　納得いかんぞ！！」

二人は叫ぶソルガを慰める羽目になった。

第四章 比翼連理 前編

鈴音は深呼吸し、自らの精神を鎮める。

今日の訓練は鈴音の戦闘スタイルを確立するために行われるのであり、攻撃面だけを集中してやることに決定した。

「起動、^{アクセス}〈転生〉」

鈴音の腕輪が輝き、腕輪が彼女の身の丈ほどの杖の先端にあるクリスタルが特徴的な錫杖に変わる。

鈴音はそれを前に立て、地面に突刺し意識を集中させた。

鈴音の前方に的が出現する。

的を意識の片隅に置きながら、自分の内にあるエーギルを加速させ、身体の外側に出し、エーテルに変換する。

エーテルは球状の形となり、衝撃の無属性魔法が付与される。

エーテルの球は弾丸となり、的に射出される。

エーテルの弾丸が当たった的は砕け散り、次の的が次々と出現する。

鈴音はエーテルの弾丸を衝撃だけでなく、時には炎、水、氷、雷、風と多種多様に变化させながら的を破壊する。

そして、止めとばかりに地面を槍状に隆起させ、的を貫く。

「ふう」

鈴音は訓練が終了したことで一息つき、見守っていた者たちの方に振り向いた。

「終わったよ」

「うむ。御苦労さま」

フィンは労い、ドリンクを渡す。

鈴音はそれを喜んで受け取り、喉が渴いていたのかすぐに口にする。

「どうだった？」

「悪くはなかったぞ」

「そうですね。少しエーテルの変化や標的を選ぶ速度が遅い気もしますが、まだ始めたばかりですから仕方ありません」

「はい。後は慣れですね」

「そっか。よかった」

三人に褒められたのが嬉しいのか、鈴音ははにかむ。

「でも、やっぱりアースファイアの魔法は使いどころが攻撃面では難しいね」

透は全ての魔法を比較した結果、やはりアースファイアの魔法は攻撃力がないことを指摘している。

「そうだな。大抵は妾達の魔法で事足りるからな。サポート、意表を突く以外の事では使用しないだろう」

「その魔法だけなら話は別だろうけどね」

「やっぱり、使いどころが難しいかな」

「それを探るための訓練ですし、気長にやるしかありませんね」

「そうだね」

鈴音の訓練を終え、この日の訓練は終了となった。

尚、透は余りにも攻撃面が低すぎて訓練しようがなかった。

ルキに知らされた内容は一月後、カノンフィールとの演習が行われるということだった。

「それはかまわんが、相手は誰なのだ」

「フィン様と透様の二名のみになります」

明かされた内容は通常なら考えられないほど酷いものであった。死地に行つてこい、といわんばかりの内容にフィンは慌てふためくことなく常と変わらない様子だった。

「妾と透ならば誰にも負けはしない。いくらでもかかってくるがよいぞ」

胸を張り、臆することなくフィンは言い張った。

「えっと……いいの？」

内容が内容だけに不安なのだろう、鈴音は心配そうに透とフィンを見た。

「うむ。安心して妾達の勝利を待っているがいい」

何も心配はいらないと不安がる鈴音をフィンは勇気づける。

「フィンちゃんがそういうなら……うん、応援してるね！」

やはり不安はあるだろうが、フィンがそういうならと、表情を変させ、明るい雰囲気でフィン達を応援する。

それとは対照的にノルンとルーナの雰囲気は暗く、ただ何か葛藤があるのか口を噤んでいた。

透達は彼女らに何も言わず、ただ彼女達が話してくれるまで待つことにした。

今日の訓練は防御に徹し、攻撃を防ぐことに決定した。

鈴音は向かってくる光の弾丸を、吸収・拡散の魔法を込めたエーテルで防ぐ。

防げば次々と襲ってくるエーテルを、フォースで強化した身体で避け、迎撃し、マジで地面を隆起させ盾にしたりと、練習であることを意識して様々な防御法で防ぐ。

「よし。終了だ」

フィンの合図で鈴音は緊張の糸が途切れ、地面にへたりこむ。

「お疲れ様です」

「ありがとう」

ルーナがタオルとドリンクを渡し、鈴音に一息つかせる。

「大分良くなってきたな」

フィンが鈴音のここ最近の上達ぶりを褒める。

「そうですね。少し気になることがあったのですがいいですか？」

「ん、何？」

「時折エーテルが遅くなったり、マジで隆起した地面が破壊されたものとされなかったものがあったのですが、あれはなんですか？」

「あれはマジでエーテルに干渉して遅くしたり、地面の盾の強度を上げたりしたただけだよ」

「なるほど。防御やサポートには向いているかもしれませんがね」

「そうでもないよ」

透はノルンの認識が少し足りていないことを指摘する。

「マジは基本的に存在しているものにしか干渉できないんだ。だから相手が攻勢に回り、攻撃してきたとしても、相手のエーテルに干渉するには、どうしてもエーテルを認識してからしか干渉できない」

「つまり、彼我の距離が近くなればなるほど、不利になるということですか？」

「うん。エーテルは無機物に干渉するのが基本だけど、有機物に干渉できない訳でもないんだ。ただ、有機物に干渉するには莫大な量のマナが必要で基本は不可能だ」

ノルン達はマギに関する透の説明を聞き逃さないように耳を傾ける。

「以前、マギは物体が辿る変化に限るといったけど、それはその方がマナの消費が少ないからこそなんだ。だけどマナの消費を度外視すれば、その限りじゃない。例えば、空間を指定してその空間を通過する物の速度を変えたり、石を炎に変えたりとエーテルのように指定した状態に変えることは可能だよ」

「その点は私達と同じようですね」

「うん。基本的に俺達が扱う魔法は根本的に同じなんだ。ただ、マナが染まっているか染まっていないかの差だね」

「なるほど」

合点がいったのかノルンは何度も頷く。

「そのあたりはボク達の獣化でも証明されます。あれは自分のエーテルと周囲のマナを同化させ、纏うものですから」

「そうなんだ」

はい、とルーナは首肯する。

「兎にも角にも扱うものは一緒なのだ。ならば後は慣れるまで練習あるのみよ」

フィンの言葉に透達は頷き、訓練を再開した。

「ところでさ……」

「む、なんだ？」

透は前から疑問に思っていたことを聞いてみる。

「服って高速移動した時とか破けないの？」

「破けないぞ。破けるとしたら外部から干渉された時だけだな」

「どうして？」

「妾達の服はいつでも不測の事態に対応できるように、着ている人物とラインを繋ぎ、本体と一体化し、同等の防御力を得られるナノマシンが内蔵されているのだ」

「確かに高速で動く度に、裸になっていくのはあれだしね」

「その通りだ。誰も素っ裸で戦おうとは思わぬ。……ところで、透

よ」

「ん、なに？」

「御奉仕する時の衣装で好みのものがあれば遠慮なく言うがよいぞ」

「最近凝ってるよね？」

そうなのだ。最近、フィン達はルキの薦めやメリルの裁縫の練習の為か、様々な衣装で透に迫っている。

「当然だ。透には色々な衣装で飾った妾を見てほしいからな。……興奮したらいつでも襲ってもよいぞ。いや、むしろ襲え」

メリルの練習やルキの悪ふざけで普通の衣装から、際どい衣装まで多種多様に押さえているのだ。透以外には際どい衣装を見せはしないのだが、見せられている立場としては堪ったものではなく、彼女達も乗り気なので襲うことは結構ある。

「そうだね。楽しみにしてるよ」

「任せておけ！ メロメロにしてくれようぞ」

もうなってる気はしないでもない。

演習があることを知らされた数日後の夜、透とフィンの元にノルンとルーナが訪れた。

「こんな夜更けにどうしたの？」

二人はその訳を話そうとするが、言葉にならないのか何度も閉口する。

そんな二人の緊張を解そうとしたのか、フィンは二人をからかう。

「なんだ？ 二人とも混ざりに来たのか？ 妾としてはかまわぬが、初めての時は二人きりの方がよいのではないか？」

「ち、違います」

フィンの軽い冗談を聞いて、二人は耳まで顔を赤く染めるが、それで緊張がほぐれたのか、ゆっくりと深呼吸して訪れた真意を話した。

「お二人は演習の意味を分かっていますよね？」

ノルンが切り出した話題に二人は分かっていると頷く。

「もし、お二人が負けるようならば和平は崩れかねません。お二人は勝算はあるのですか？」

ノルンの迷いを晴らすかのような、真っ直ぐな声でフィンは答える。

「安心するがよい。妾達は負けはしない」

「私はあなたの実力を図った結果、複数なら可能と答えました。今回の演習が行われるきっかけになったのは私です。そして、あなた

達の演習の相手に私が含まれています。それでも勝てると思いますか？」

ノルンは己の実力を過信も過小評価もしていない。ただ、冷静に相手との実力差を図っただけだ。

フィンもノルンとの対戦で、彼女の言葉が間違っているとは思っていないかった。

——それでも。

「大丈夫だ。妾一人ならノルン殿の言うとおりになるだろう。だが、妾には透がついておる。ならば、絶対に負けはしない」

ただの一片も迷いなく言いきるフィンに妄信かと思うが、彼女がそのような愚か者ではないことはこれまでの過ごしてきた日々で感じ取っている。……透のことを度外視すればの話ではあるが。

だけれども、彼女の言葉を信じてみたいと思う心がノルンにはあった。だからそれに従うことにした。

「相手をする私がこういったことを言うのもなんですが、私はあなた達に勝って欲しいと思います」

「ボクもそう思います。ボクはこれから君達と過ごしたい」

「私もあなた達との生活を気に入っているんですよ」

二人はこれ言うために部屋を訪れたことが透とフィンにも分かり、彼女達の願いに応えるべく力強く二人に首肯する。

「大丈夫だよ。俺達は負けない」

「透の言うとおりで。……負けてしまった時は勝つまでやるか、皆で逃げればよい」

フィンの逃げるといふ言葉に透は苦笑するが、透にとってフィン達といふことが何よりも優先されるのでそれも悪い気はしなかった。

「そうだね。それも悪くない」

ノルンとルーナはいつも通りの二人に胸のつかえが取れたのか、顔を見合わせお互いに苦笑する。

「二人とも言いたいことはそれだけか？」

「「はい」」

フィンの問いに二人は部屋を訪れた時よりも、段違いに明るく答える。

「よし！ それでは、皆で寝ようではないか！」

フィンが言った言葉に透は一瞬惚ける。

「はい？ 何言ってるの？」

「なに、皆で親睦を深めようと思ってな。時には皆で寝るのも悪くはあるまい。……もちろんあれはなしだぞ」

ノルンとルーナも思考が追いつかないのか二人とも惚けている。
フィンは反対意見がないと思い、鈴音も誘うべく部屋を飛び出した。

「えっと……いいの？」

「……………」

透の問いに二人は何も答えない。

沈黙が続く中、フィンと鈴音が共に部屋の中に入ってきた。
その後、どうなったかは五人だけが知っている。

第四章 比翼連理 後編

演習当日、学園都市は異様な熱気に包まれていた。

学園の生徒達は皆、メモリーリングに送信されることになっている映像をパーティーメンバーと、もしくは友人達と共に公開状態にして演習開始を待っている。

透とフィン、ノルンと今回演習に参加するカノンフィールの兵士はエッグ前に待機し、演習開始時刻まで時間を潰していた。

鈴音、ルーナはプリティ、ファイレス、風音達と共にガイアノーグの大使館の一室で落ち着きなく開始時刻を待っている。

「透さん達大丈夫でしょうか？」

ルーナは不安がる表情を隠しめせず、透達を心配する。

「きっと大丈夫だよ」

鈴音はそう口にするが、先ほどから何度も紅茶をお代わりし、視線を上下左右にと忙しなく動かしている。

明らかに落ち着かない様を見せる娘達に風音とプリティは苦笑し、落ち着くように慰める。

「大丈夫よ、鈴音ちゃん。透君達なら大丈夫だから」

「そうですよ、ルーナ。私達が心配した所で何も変わりません。ならば、しっかりと彼らを信じる事が彼らに対する礼儀ですよ」

そう慰められ、多少は落ち着きを取り戻したが、やはり待っているだけという状況が彼女達を不安にさせるのか、すぐに落ち着かなくなる。

三人もそれを分かっているのか、話をする事で気を紛らわせることにした。

「以前にもフィンはこのような状況になり、そこから勝利したという事ですから大丈夫ですよ」

「それは聞いてますが……今回はノルンさんがいますから……」

「大丈夫よ。透君がいるから」

「そうですね。あの人もこの戦いは透さん達が百パーセント勝利するって言ってましたから」

プリティはソルガから真相を聞いていたため、今も尚落ち着いていられる。結果が既に決まっているのだ。プリティは演習に関しては何も心配していない。むしろ、心配しているのは演習の後だ。

風音もフィレスも同じことを知っているため、プリティと同じ心境だ。

それを疑問に思うのが蚊帳の外にいる二人で、何故そう思うのか三人に確かめてみる。

「母様、どうして百パーセントだと思うのですか？」

「あら、まだ教えてもらってないの？」

ルーナはこくりと頷き、プリティから真相を聞き出そうと待つ。

鈴音もそれは同じでプリティに注目する。

二人に注目され、プリティは可愛らしい仕草で指を口にあてる。

「秘密ですよ。ネタばれしたら面白くないですからね」

まだ話すつもりはないと誤魔化すように二人に告げる。

二人はそれを聞いて慙然とするが、話す気はあるようなので今は追及しなかった。

「フフ……面白いことになるわよ」

風音はどのような結果がもたらされるか知っているため能天気を開始を待つ。

プリティはふと思ひ出した事があつた。演習が終わった後でルーナに知らせることがあるのだが、今の内に教えてしまおうか、それとも後で纏めて教えてしまおうかと迷つたが、始まるまで退屈なので娘をからかつて暇を潰そうと思ひ、先に教えることにした。

「ルーナ……こちらにいらっしやい」

プリティはルーナを招き、演習で透達が勝利した後どうなるか、こそつと耳に吹き込む。

ルーナはそれを聞いた後、カチンと石像のように固まり、石化から解けた。

[illegible]

ルーナは頭の中から足の指先まで真っ赤に染まって絶叫した。

「そ、そ、そ、それ……ほ、本当なんですか!？」

「本当よ」

思った以上の反応が得られ、ホクホク顔でプリティは満足する。

「で、で、で、でも……ぼ、ぼ、ボクには早いというかなんというか」

炎で炙られたかのように顔は真っ赤になり、もじもじとしながら口籠る。

プリティはそんなルーナを可愛いと思い、さらに煽ったらどうなるか気になり、好奇心のままにさらに煽ることにした。

慌てるルーナを決して逃さぬように後ろから抱きつく。

「あなたは嫌かしら？」

「い、い、い、嫌じゃないというかなんというか……」

「じゃあ、ス・キ？」

「——っ~~~~~~~~!!」

最早ルーナの叫びは声にならず、恥ずかしさのあまり気絶しそうだった。

そんな光景を見て鈴音は傍にいる母親にルーナが何故あんなって
いるのか尋ねる。

「うふふふ……それはね……」

チェシャ猫のような笑みを浮かべ、プリティがそうしたように風

音も鈴音に耳打ちする。

「ふん、ふん……って、えええええ~~~~~!!」

鈴音もルーナと同じように絶叫し、今自分が聞いたことが本当のことなのか再度尋ねる。

「本当よ」

鈴音はそれを聞き、最早叫ぶ気力もなく、気絶しそうなほどぐったりとしているルーナの肩をつかみ、満面の笑顔でルーナに呼びかける。

「ルーナちゃん!」

「ほえ?」

何も考えられず無抵抗のルーナに、鈴音は再起不能にするかの如く、決るように容赦なく、追い打ちをかけるように止めを刺す!

「ルーナちゃん! これからよろしくね!」

「——っ!!」

ルーナ昇天!

ルーナの口からは魂が出ている。

「ルーナちゃん! しっかりして! ルーナちゃん!」

天に召されようとしているルーナの魂を捕まえ、鈴音は暴れるル

ーナの魂を口の中に押し込む。

「ふう〜！ 危なかった！」

ルーナは真っ白に燃え尽き、痙攣していた。

二人の幕劇を見て、彼女達の両親が思ったことは！

「これから面白くなりそうね」

「「ええ」」

面白くなりそうだと、にんまり笑い合っていた。

ある一室ではラグナ、スルド、ソルガ、アースファイア理事とカノンフィール議員達が一堂に会していた。

この部屋の雰囲気は鈴音達の部屋の雰囲気と異なり、和気あいあいとした雰囲気ではなく、どこか殺伐としている雰囲気となっている。

だが、カノンフィールの反対派はどこか浮ついた雰囲気をしており、演習開始時刻を周りの者と雑談しながら心待ちにしていた。

彼らは言葉少なにただ彼らの運命を決する刻を待つ――。

ノルンはメリルと共に、エッグのある部屋のベンチに座って待っていた。

他の者とは既にミーティングを済ませており、彼らとは話す必要はないので、群がる人込みを避けるために別室で待機することにしたのだ。喧騒から静寂へと移行した環境の中、彼女は目を閉じ、心静かに開始時刻を待つ。

彼女の胸に去来するのは、透達と過ごした日々だった。

透達と暮らすことになった時、彼女が胸に抱いていたことは煩わしさだけだった。

彼女はその類稀なる、呪いのような美貌から人付き合いというものにうんざりしていた。

男性は彼女を美辞麗句に飾っては口説き、女性は男性に言い寄られる彼女を表向きは賛美し、裏では好き勝手に妬む。

また、彼女の敵う者がいないという戦闘力が拍車をかけていたのであろう。

彼女の周りには、羨望と嫉妬と劣情を含む視線が、彼女の行く先行く先所々付いて回った。

メルルのように羨望を抱く者が多数いるが、メルルを今も粗相をしでかすにもかかわらず、従者として傍に置いているのは、メルルには不快に思う感情が感じられないからだ。

ノルンは置かれてきた環境からか他人の機微に敏感だ。

しかし、メルルには彼女が今まで付いて回ってきた感情が感じられるが、不快に思う負の感情が付いておらず、また暴走気味ではあるが彼女の言いつけはきちんと守る。また欲望を表だって晒しているので、ある意味安心できるからだ。

だからだろうか？ 透達との日々は彼女にとって新鮮に充ち満ちていた。

ノルンはくすりと笑う。

フィンが、力を心棒としているヴェルディンの王女が力を持たず、文明も大きく劣っているアースフィアの平民に心を奪われているのが驚きだった。

彼らが会った瞬間、周囲の目もくれず、世界にいるのは二人だけといわんばかりにいちやつき、キスをしたのは驚きだった。

修羅場にはなりかけたが、透とフィンが鈴音を受け入れ、三人で幸せになろうと言ったのはさらに驚きだった。

初めて暮らした日、最近まで敵対していたにもかかわらず、まるで何事もなかったように彼女を受け入れ、友人として接してくれるのは驚きだった。

メルルが変な言葉を口にしたにもかかわらず、彼女をそのままに受け入れてくれたのはありがたかった。

なんだかんだいっても、メルルはお気に入りなのだ。……おもちゃとしての意味合いが非常に強いが。

彼女がその嗜虐心に従い、メルルを苛めていたことも、透達はそれをそのままノルンとして受け入れたのも驚きだった。

憧れを抱かれ、勝手にイメージされた理想の彼女を彼女自身として抱かれることは度々あったので、余計に驚いたのだ。

家の庭にある大樹の下で一緒に寝たことはあるが、その時に自分の取った行動は自分でも不思議だった。あれほど自分でもはっきりと分かるほど人付き合いが嫌いな自分が、彼らに寄り添って寝たのだ。しかも、安らぎを覚えて……。

その時からだろうか？ 彼らの傍にいたいと思えるようになったのは？

では、何故そう思うようになったのか？

そこまで彼女の思考が及んだ時、傍らにいるメルルから声がかかった。

私はノルン様がくすりと笑われたことに驚きを覚えた。

私の記憶にあるノルン様の顔はどれも無表情で、笑った顔など見たことはなかったからだ。

彼女に憧れ、従者に志願した時から笑顔を見たかった。

ノルン様の境遇を外側から知っていただけに、何故ノルン様があなっているかは知っている。

だからこそ自分は道化になり、例え彼女に疎まれようとも、苛められようとも彼女を笑顔にしようと道化を努めていたのだ。

決して苛められるのが好きという訳ではない。ないったら、ないのだ。いや……少し気持ち良くなってきたというか、今ではしてくれないと物足りなくなってきたという気がしないでもないが。

……マゾではないのだ、多分。いや、でも……。

思考が逸れてしまった頭を振り、追い出す。考えてはいけなないとのだ。

ノルン様は今笑っている。そのことが最も重要なのだ。

ノルン様が笑えるようになったのは、やはりあの人達との暮らしが心地よかったからだろう。

最初の内は、以前と同じように警戒していたが、彼らと過ごす内に警戒心が薄れ、徐々に無表情であったノルン様の顔が、雰囲気が柔らかくなっていった。

私ではできなかったことに、あの人達に嫉妬を覚えるがノルン様が笑っていることが私にとっては重要なので、私のやさぐれたった心はたいしたことではない。むしろ、感謝すべきだろう。お零れ、万歳。

私がノルン様のことを画像や動画に収めようとしたのは、今のノルン様が非常に魅力的だからだ。あの人達と居るノルン様は本当に魅力的である人達と離そうとは思わない。いずれ、もっと魅力的になるだろうノルン様を記録するのだ。……何も本当にオカズにしよ

うとは思っていない。……思っていないのだ。……ごめんなさい。

またもや逸れてしまった思考を戻すため、頭を振る。

今回の演習を企画した者をすり潰したいと思いました。ええ、もう、ゴリゴリと！

演習でカノンフィールが勝利するということは学園を続ける理由が無くなる。

そうになると、ノルン様はあの人達と離れることになる。それは許容できない。ノルン様を以前の状態に戻したくない私にとっては今回のことは憤慨ものです。ボコボコにしたいです！ 元の顔の形が分からないくらいパンパンと膨らませたいです！ とうかさせろや、コラ！ 代々伝わる一子相伝の奥義を味あわせてやるからよう！ ……そんなものではありませんが。

コホン！

そういえば、ノルン様は最近、演習が近くなるにつれ五人で寝ることが多いようなんですよね。あれはしていないようですが……透様と密着して寝ることも偶にはあるとか。なんて羨ま、コホン……破廉恥な！ ……私もノルン様と一緒に寝たい！ 混ざりたい！なんて思ってますよ。……すいませんでした。

でも、スルド様がまだノルン様には知らせていませんが、演習がフィン様達の勝利で終わった時、ノルン様は……。

——私も混ざれるかな……じゅるり。

そうなった時の為に聞いておかなくてはならないことがある。

「ノルン様は透様のこと、どう思ってますか？」

そういわれ、私は透さんについて考えを巡らせた。

フィンさんの陰に隠れ、目立つところはないが、彼がいたからこそ和平はなつたともいえる。正確にはフィンさんが彼に惚れ、彼に会う為だけにこの学園都市を造ることになったのだ。

フィンさんが彼に惚れた経緯は分からないので、彼自身について考えてみる。

彼の容姿はいい方だとは思う。黒髪黒眼で無表情ではあるが、フィンさんと鈴音さんと居る時は優しい顔をする。

性格についてはよくわからない。彼は何事も中庸でどちらにも傾いてはいない。……例外があるとすれば彼女達についてだけだが。彼自身が言っていたように、冷静で物事に対しては感情を挿まず、機械的などころがある。

能力についてはもっと分からない。魔法の使用に関しては目も当てられないほどではあるが、防御……防御魔法というよりは彼自身の防御力は異常だ。彼自身には何をやっても傷一つつかない。私達の防御力はエーギルに比例しているので、あの防御力に関してはエーギル量で説明はつくが、攻撃面に関しては説明がつかない。一応、レコードの起動で説明はつくが肝心のレコードの姿がないのだ。

彼について一番分かっていることはフィンさん達に対する態度だろう。

なにしろ彼らは初めて会合した時から、いちゃつく。それはもういちゃつく。

それに関しては最初は辟易していたが、もう慣れた。あんなに毎日いちゃつけば慣れるというものだ。

フィンさん達が甘え、彼がそれを許容するというのが彼らのスタンスなのだが……見ているこっちは常にハートが周りに飛び散るのが見え、甘いもので胸やけをおこすかのようだ。ブラックコーヒーが欲しくなるほどに。

フィンさん達の肌艶はほぼ毎日つやつやしているので、何をしているのかと問い詰めたいところがあるが、答えは分かりきっている。藪蛇をつつくこともあるまい。さすがに毎日というほどではないが、しない日の方が少ないだろう。……時折、フィンさんのメイドであるルキが私とルーナさんもどうかと薦めてくるが無視している。

彼らの近くにいるのはある意味辛い時があるが、慣れてしまえば楽なものだ。なにしろ、彼らにはカノンフィールにいた頃のような負の感情はない。彼らには正の感情しかないのではと思えるほど安らげるのだ。

ルーナさんも同じだろう。私達はなんだかんだいってもあの人達の創り出す雰囲気が好きなのだ。……すぐく安心できるし、落ち着く。

最近では一緒に寝ることもある。

それを思い出し、顔が熱を発しているのがわかる。

一緒に寝るといっても、大抵は彼を中心にその隣がフィンさんと、鈴音さん。その隣にいるのが私とルーナさんになる。時々、彼を包むように寝ることもある。

時折、逆になることはある。あんなに男の人と密着したことはないので、最初は緊張気味であったが、彼の鼓動の音を聞いたり、彼の自分とは違う体臭を嗅いでいると、何故だか暴れる心臓の鼓動も次第に平常になっていき、ぐっすりと眠ったものだ。それはルーナさんも同じだろう。

朝起きると、何故だかすっきりと目覚めるが名残惜しく、このままでもいいと思うことはある。……いつも五人でいるのでその空気に中てられたのだろうか？

私もルーナさんも朝起きると彼をぎゅっと抱きしめているので、その度に彼を困らせている。彼に密着していると何故だか甘えたくなるのだ。……フィンさん達の影響だろうか？

むむむ……よくはわからないが、フィンさん達にでも毒されたのだろうか？

毒されるといえば……あれはしていないが、いいのだろうか？

する気はないと言っていたが、透さんが辛い目にあっているのは分かる。男性の生理現象にはある程度理解はある。あんなに密着しているのだ、相当辛いということは密着していたので分かる。でも、我慢している。私達は仲良くするのが条件だ。そういうことは条件に入っていないが、不和の原因となり得ることはある。

ならば、した方がいいのだろうか？ ……いや、私は何を考えている。やはり、毒されたのだろうか？

仮に、そういう雰囲気になったとしたらどうだろう？ 以前の私なら拒否するだろう。

だが、私は透さん達と居るのが好きだ。そういう雰囲気になったとしたら、断わっていただろうか？

想像してみる……靄がかかっているが断る自分が想像できない。どうしてだろう？

煩惱を振り切るように頭を振ってみる。

「ノルン様？」

私の行動を不審に思ったのかメルルが声を掛ける。

はっとし、彼女に聞かれた問いに今まで考えていた思考から彼についての私の答えを聞かせる。

「そうねえ……傍にいと安心できるといったところかしら」

私が透様についてどう思っているか、と問いた後のノルン様は実に可愛らしいものでした。

ええ、それはもう……襲っちゃいたいくらいに。

ぼんやり考えたかと思うと、突然顔を赤く染め、うっとりとしてました。

余人では分らないと思いますが、そこはノルン様マニアの私。彼女の変化は見逃しません！ あんなノルン様を見れるなんて感無量！ 生まれてきてよかった！ ノルン様最高！ 私最高！

「そうねえ……傍にいと安心できるといったところかしら」

——！ これでもう迷いはありません。不肖、メリル・ルリエル。あなた様の幸福を守って見せます！ ……だから私にもおこぼれを！

「ノルン様。例え、カノンフィールが演習で勝とうとも問題ありません。ノルン様が透様達に付いてしまえば万事解決です！」

「でも、それは……カノンフィールを裏切ることになるのではないかしら？」

それについては私も考えた。しかし、国の決定に背く訳には……。

「ノルン様。私はノルン様の幸せを一番に考えます。私はノルン様が幸せになれるには透様達と居ることが必要だと思います。……大丈夫です。国の決定に背くことになったとしても和平という大義があります。大義がなくてもあの人達ならノルン様を受け入れてくれます」

メリルの言葉に電流が背中に流れた気がした。

だとしたら、後は私の意思次第。……私にそんなたいそれた決断ができるのかしら？

何故だろう？ フィンさんが羨ましく思う。

「……私は……」

わからない。私はどうしたらいいのか。国の決定に従うか、背くか……。……わからない。

「……透様達が絶対に勝つと言ってるんです。彼らに私達の運命を任せてもいいかもしれません」

運命を任せるか……。流されるままに決断を委ねるのは良くないことかもしれない。

——だけど。

「……そうね。あの人達に全てを任せてみるのもいいかもしれない。……もしも透さん達に屈服させられたその時は……」

——私は……。

透とフィンはまだ静かに開始の刻を待つ。

透はベンチに座り、背もたれに身を委ねている。

フィンはその透に自身の全てを委ねている。

フィンの髪をゆっくりと撫でながら、ぽつり、ぽつりとフィンに透は話しかける。

「この演習が終われば……俺達は世界から弾き出されるかもしれないね」

フィンは何故透がそう判断するか理解している。だが……。

「世界から弾き出されるのは嫌か？」

「いや……それは常に想定している事だからね。そうなれば……消えるだけだよ。用意してるんだろ？」

「当然だ。妾達がいざという時に逃げ込める場所を用意してある。それに……ラグナ殿がそうならないように手は打つはずだ」

「そうだね。……でも人というのは流動的で不安定なものだ。いつ掌が返されるか分からないし、想定通りに行くとも限らない。常に最悪を考慮すべきだ」

フィンは透を見上げる。透の心臓の鼓動が聞こえるほど寄りかかる。そうなったとしても……自分は傍にいと示すかのように。

「正しいことをするのも人間。酷いことをするのも人間。……いや、どちらともするから人間だし、どちらも含んでいるからこそ人間だ。群衆としては信用できるものじゃない。この世で最も恐ろしいのは人間だ」

「個体としては？」

「個体でも環境に作用されるし、時が変われば個体も変わる。それが自然の理だ」

透はフィンの手を握る。

「俺は全てを含む故にあやふやで曖昧な存在。ただ混ざり合う世界の全てを容認し、否定し、受け止める器。そして変わりゆく世界の中でただ在り続けるだけの不変の傍観者。そんな俺が望むことがあるとすれば一つの世界でありたい——フィン達を愛する一つの世界として」

「ならば妾も愛し続けよう。透の世界の決して変わらぬ要素として。——女として。透を愛する、一人の女として」

「君達がいなくなればただ朽ち果てるだけの世界で……家だね……俺は」

「妾は永久に居続けるぞ。離れようともせぬし、朽ち果てることもさせぬ」

二人は思いを重ねようとするかのようにキスをする。

——重なる二人の掌。そして二人の左手の薬指には二人を結ぶ指輪があった。

開始時刻を迎えるベルが鳴る。

二人は名残を惜しむように唇を離す。

「続きは今夜のベッドの上で」

「楽しみに待っておるぞ」

二人は立ち上がり、エッグの中に入る。

「さてと……妾と透の愛の絆を皆に見せつけてやろうか！」

「あまりにも強すぎて見てられないと思うけどね」

エッグの中で待機状態になり、開戦の刻を待つ――。

何物も存在しない荒涼とした荒野に透達は降り立つ。

ここには視野を遮るものは存在せず、ただ荒野が続くだけ。風も吹かないことで何物も存在していなかった荒野はただ静寂が支配していた。

透とフィン、カノンフィールの千名を越える軍勢は約一キロメートルの距離を隔てて、対峙していた。

ノルンならばこの距離を十秒とかからず、踏破できるであろうが、他の者と足並みを揃えるならば、それ以上にかかることは明白だ。

本来であるならば、透達はノルン達から距離を空けた状態で、遠距離攻撃で数を減らすのが定石だ。――本来ならば。

透達は自分達を遥かに上回る数の軍勢を目にしても、動揺はしていなかった。

ただ自分達にやられる数が増えただけ、その程度の認識でしかなかった。

「フィン怖い？」

「透がいるのだ。恐れるものは何もない」

「相変わらずなこと」

「それが妾だからな」

軽口を言いあう二人はいつもと変わらない様子だった。

「しかし……はぁ……面倒だな」

「すぐに終わらせるから我慢せよ」

「はいはい」

開戦のカウントが空中に浮かびあがる。

ゼロに近づくにつれ互いの緊張感が増すのが分かる。

透はそのカウントがゼロになる少し前、戦闘態勢に入るため、自身のレコードを起動させた。

「さぁ……始めようか。起動、^{アクセス}〈比翼連理〉」

透とフィンの指輪が光を発した。

光は透とフィンの背中に廻りこむと、翼にその姿を変える。

透の背中には左翼の黒翼が、フィンの背中には右翼の白翼が圧倒的な存在感を発しながら存在している。

「『雷神変生』」

透がそう呟くと、フィンの背中の白翼が大きくなり、フィンを包み込む。

その白翼が翼を広げると、白い光を発しているフィンがその姿を現す。

カウントがゼロになる。

「フィン、やれ」

フィンは一瞬でカノンフィール軍勢の上空に移動すると、エネルギーを純粋なエネルギーに変換し右手に現出させ、槍状にして、軍勢の中心部に投擲する。

軍勢の中心部に到達すると、槍状のエネルギーは解放され、破壊の渦を周囲に撒き散らす

閃光が発した後、轟音と共に灼熱が、衝撃波が軍勢を駆逐する。彼らは何をされたかを認識する間もなく、この世界から消え去った。

破壊の暴虐が収まった後、残っているのは先ほどの軍勢が丸々収まっただけだ。不思議ではない程のクレーターだけだった。

この世界に残っているのは、その破壊をもたらした本人であるフィンと――。

フィンは自身に繋がっているパイプを元に透の位置を割り出す。

透は衝撃波の巻き添えを食らったのか、初期の位置から随分と遠くまで飛ばされていた。

フィンは透に瞬時に駆け寄り、彼に付いている土を落とす。

「……けほ。酷い目にあった」

「すまぬ。防御壁を張っておくべきだった」

「気にしない、気にしない。どうせ、俺には傷一つつかないんだから」

透の言う通り、透の身体にはかすり傷一つ付いていなかった。フィンが破壊の嵐を撒き散らす前と何一つ変わっていなかった。

「さて、俺達もここから出ようか」

「うむ！」

透達もこの世界からログアウトした。

フィンがもたらした破壊の後をただ茫然と、青褪めた表情でカノンフィールの議員達は眺めた。

スルド達もこうなることは分かっていたが、自らの想像以上の惨事に若干青褪めている。

「なんだ……あれは？」

そう茫然と呟いたのは誰だったか……。

彼らは答えを知っているだろうラグナにその目を向ける。

ラグナは視線を受け、先ほどまで受けていた動揺を微塵も見せず、先ほどの光景について説明した。

「あれは我がヴェルディンの王女、フィンの真の力です」

「だが……以前戦った時はあれほどまでの力ではなかったはずでは？」

「出す必要もなかったということですよ」

侮辱ともいえるラグナの言葉に反論する者など誰もいなかった。それほどまでに先ほどの光景は彼らの心を打ち砕いていた。

「……だが、あれほどまでの力を個人で持つことは不可能だ」

「お忘れですか？ 私達は五年前ある実験を行ったことを」

「実験？ ……あれか！」

「ええ、それです。彼女はその被験者で成功例なのですよ」

五年前行われた実験……それは世界の外側にあるマナを個人のエーギルに変換させることを目的とした実験だったのだ。

この世界はマナによって出来ている。正確にはマナが粒子の結合を強め、物質化の手助けをしている。

認識されている世界は器のようなもので、器には常に過不足なくマナが枯れることがないように注がれている。

エーギルはいわば物質固有の色に染まったマナのことで、ナノマシンはマナを自分たちに取りこみ、エーギルを生成するための装置にすぎない。

では、マナはどこから生成される、もしくは世界の器に注がれるのか？

その答えが世界の外側であり、詳しいことは分かっていないが、ここから無限ともいえるマナが各世界へと注入されているのだ。

「だが！ 個人の器で耐えきれはるはずはない！！」

五年前の実験が何を目的としていたかは知っている。だからこそ、カノンフィールは実験を止めるべく、その研究所を襲撃したのだ。成功すれば脅威になると分かっていたから。

「はい。私達も精々個人の器が常に満たされれば十分と考えていました。だからこそ個人の器以上のものが成功するとは思っていませんでした。……あれは私達も誤算だったのですよ」

「どういうことだ？」

「私達も理解はしていませんのですが、どうやら彼、透君がフィンを自身のレコードとすることによって、フィンを膨大なマナを操れる器に変化させ、その膨大なマナを操れるようにしているようです」

議員達に衝撃が走った。あまりにもラグナがいうことは常軌を逸している。

「……信じられない。何なのだ、彼は？」

「透君は膨大なマナをフィンに注ぐためのいわば仲介役といったところですよ。……もっとも理由は定かではありませんが彼自身は、仲介役であるだけで、自身は魔法をろくに使えないようです。彼に出来ることは精々マナを補充するか、マナをエーギルに変換させること、レコードであるフィンを自身の思った通りに変えることしかないようですね」

それを聞いて議員達はほっとしたが、すぐに事態は自分達に好転しないと気づき、青褪めた。

なにしろ、透自身は問題ないにせよ、ヴェルディンの王女フィンは使えるのだ。もしも、牙を向けられれば成す術もなく蹂躪される

しかない。暗殺しようにもエーギルの量が自身の防御力に繋がることは知っているので、暗殺することは不可能だ。

議員達にすれば八方塞がりであり、身を委ねるしか手はなかった。

「幸いにして、彼らは手を出さなければ何もすることは無いようです。触らぬ神に祟りなしといったところですか」

スルドは最早何とも言えぬ議員達に追い打ちを掛けるべく次の策に出る。

「では、手を出さない証として和平を進めていきたいのだが……」

鈴音達は透達がもたらした光景に啞然として言葉を紡げなかった。対照的に風音とプリティは冷静に事態を検分し、これから予測される事の推移を推し量っていた。ある程度の推測をたてるとプリティはルーナを後ろから抱きしめ、どう予測をたてようと重要な立場にいるルーナを透から離れていかないうちに落ち着けることにした。

「ルーナ、彼らが怖い？」

ルーナは怖いかと聞かれ、彼らを恐れる気持ちがあることを認識するが、すぐに自分も似たようなものだと言った。

「怖いといえば、怖いです。……だけど、少し安心します」

プリティは何故ルーナがそう思い至ったかを判っている。そして、それ故に彼らから離れることはないと言った。

「ルーナ、演習が始まる前に言ったこと覚えてる？」

「へ？」

ルーナはみるみるうちに真っ赤になり、頭から湯気が出そうなほど熱を発していた。

母様にそう言われ、ボクは恥ずかしさのあまり何処かに消えてしまいたい思いだった。だけど、それを分かっているかのように母様は離してくれない。確かにそういうことは覚悟してたよ。それが手っ取り早い方法だし、理解もしている。だけど、ボクにも心の準備があるというか……。やっぱり早いというか……。

いや、別に嫌っていうわけじゃないよ。ボクは一緒にいるのは好きだし、これから一緒にいたいと思うし、いつかみたいになでなでして欲しいと思うし……。でもでも、今まで人を避けてたからどういった距離感でいればいいかわかんないし……。鈴音さんやフィンさんみたいにすればいいのかな……。いやいやいや……。さすがにあんなに甘えるのは気が引けるというか……。恥ずかしいというか……。

えへ……。えへへへ……。なんだかいいかも……。いやいや待て……。さすがに自分からは恥ずかしい。でも……。わるくないかも。

「彼、無限にマナを引き出せるらしいから、ラグナさんがフィンちゃんの他にも多量のマナを引き出せるパイプを創れる機能をレコードに追加したみたいなのよね。……。この意味分かるわよね？」

相手は透さんだし……これから透さん達と一緒にいられるわけだからむしろ大歓迎……いやいや、ボク何言ってるんだろう？ どうしたらいいんだろう？ ハティに相談すればいいのかな？ ううう、恥ずかしいよ。

ポンと肩を叩かれる。誰だろう？ あ、鈴音さんだ。

「ルーナちゃん……透君に全部任せれば大丈夫だよ！」

あう！！

チーン！

またもやルーナは昇天した！

あ、綺麗な光……。

私には何が起こったかはわからない。ただ、エッグからログアウトしたことから負けたことを認識しているだけだ。

何故だろう？ 今心が物凄く浮足立っている。踊りだしたい気分だ。……踊らないけど。

「ノルン様……こちらをご覧ください」

メルルが先ほど起こったことを、メモリーリングを公開状態にし

て見せてくれる。

……なるほど。彼らが言ったことは本当だった。これではどうやっても勝てる気はしない。……というか勝つ方法はあるのだろうか？ いや……そんなことどうでもいいか……負けてしまったことが今は重要だ。これで彼らには従属しなければならない。しなければ、まさしく消滅してしまうだろう。……本来ならば、屈辱に思うべきことだろうが……私には喜びしかない。どうしてだろうか？

「ノルン様？」

メリルが今の私を不審に思ったのか心配そうに覗いてくる。邪魔しないでほしい……いい気分なのだから。いつものようにお仕置きしようかと思っただが、そんな気にもならない。本当にどうしたのだろうか？

「スルド様が演習が終わった後、話があると仰っていましたから執務室に参りましょう」

お父様が私に話？　なんだろう？

——ああ……でも……今は透さんに会いたい。

しばらく待っているとお父様は上機嫌に執務室に入ってきた。

「すまない。待たせたようだね」

一息つくようにメリルが淹れてくれた紅茶を飲んでいる。

話すなら早くしてほしい。今は早く透さん達に会いたい。

「まず、演習の件だが……こちらが敗北したことで反対派はショツクのあまり放心状態でね……下手に抵抗されないようにさっさと今後の方針を決めたんだ。その結果、和平が推し進められることが正式に決まったんだ」

それは喜ばしいことだ。透さん達と離れないで済む。早く会いたい。

「そこでだ……和平が正式に決まったことで、こちらからその証として、しなくてはいけないがある」

お父様がこちらをちらりと見た。すると、上の空の私を見てひどく驚いている。

「ノルン……大丈夫かい？」

「大丈夫です。それで決定したこととはなんですか？」

大丈夫に決まっている。何を言っているのだろうか？ 最高にいい気分なのに……。急かした様な物言いになってしまったが、今の私の心境はまさしくその通りなので早く言ってほしい。一秒でも早く会いたいのだ。

「あ、ああ……その決定したこととは」

お父様が仰った事に耳を疑ってしまった。

信じられないことというか、本当であってほしいという思いから、本当かどうかと再度確認するとしっかりと頷いてくれた。

——私の中で何かが弾けた。

家では祝賀会が開かれ、誰が淹れたのか酒も入ったことにより狂騒状態にあった。

未成年だからという理由はここでは通用しない。そんなものは国が定める法律によって異なるのだ。当然、アカディアでもそんな常識は通用しない。

アカディアでは許可はされているが、基本的にはアルコール度数が低いものしか購入できない。

メンバーはラグナさん達三人がいなくて初めてこちらに来た時と同じ人員が来ていた。

フィンとリーネが絡むことはいつものことだが、今日は何故だかノルンとルーナも絡む。

ルーナはいつものように熱暴走を起こした状態でこちらをちらちらと見ており、目が合うとすぐさま目を逸らし、近くにいる人に泣きつく。現在、犠牲になっているのは彼女の双子の妹のステラで不仲であったためか、泣きついてくるルーナに戸惑っていたようだが、あまりのルーナの狼狽した様子に呆れたのか、はたまた諦めたのかは今はずがままになっている。彼女達が以前どのような関係だったかは知らないが、こんな風だったのかもしれない……あまりにも様になっている。

ルーナはまだいいが、問題はノルンだ。

彼女はフィン達のようにべったりではないが、常に傍に控えめに

ピッタリと付いてくる。

どうしたのかと尋ねると、今までの無表情が何だったのかというほどにこのこと笑うだけで何も言わない。笑った彼女はすごく魅力的ではあるのだが、熱情を含む視線がどうも気になる。

メルルなんかはそんなノルンを見て、もう狂喜乱舞状態で手がつけられない様になっている。鼻血や涎を垂れ流しながら、笑うノルンをカメラに収めているのだ。正直言うと、きもかった。

ノルンはそんなメルルを見ても、全く気にも留めず俺の傍でにこのこと控えるだけ。

今は膝の上にフィン。両脇にリーネとノルンといった両手に花とつか身体に花といった状態だ。

ラグナさん達が到着したことで、宴は一時中断となった。

なぜならラグナさん達が今回、演習で決定したことを報告するためだ。

にもかかわらず、俺の膝にはフィン。両脇にはノルン、ルーナとルーナが離さないため離れられないステラ。後ろにはリーネが抱きついている。

内容としては真剣なものであるはずだが……俺達を見てにやにやしているラグナさん。豹変した娘に目を丸くしているスルドさん。今にも血の涙を流しそうなほどこちらを睨みつけるソルガさん。そして、こちらの様子を肴に盛り上がる女性陣。俺達の様子も相俟って一向に真面目な雰囲気になりそうもなかった。

「さて、今回の演習に勝ったことで……いや、君達の力を見せたことによって世界は君達に従わざるをえなくなった。何か御用命はあるかい？」

ラグナさんはおどけながらも真剣に聞いてくる。彼に対する回答は一つだった。

「何も。強いて言うなら俺達の暮らしを邪魔するな。これだけかな」

「そうだな。妾としては透達と一緒にいることができるのなら特にこだわりはないな」

彼はそれを聞いて幾分かは安心ともがっかりとも思っているようだった。

俺達にそういうことを期待されたとしても困る。俺達にとって世界とは俺達が楽しむためのスパイスの一つでしかない。あった方がいいとも思うし、できるだけ協力はするが、究極的にはどうでもいいのだ。

それに……俺達は世界を手にするのも英雄になるのにも全く興味はない。あくまでそれはこいつらと居るため、もしくはは出会う為の過程に過ぎないと思ってる。目的は既に叶っているのだ。俺にとってはこの目的は至上であるので、他の余分な要素には興味はさほど持てないのだ。

「少し残念な気もするがね……君達がそういうなら出来る限り従おう。それと……今回和平が正式に決定したことでカノンフィールとガイアノーフグはある証を立てるそうだよ。受け取ってくれないかな」

ラグナさんはスルドさんとソルガさんをにやにやと意地が悪そうに見詰めている。

その視線を受けた実に複雑そうな表情を浮かべている。

「カノンフィールは友好の証としてカノンフィールの至宝であるノルンⅡベルウルドを君の婚約者とする」

「同じくガイアノーフグは友好の証としてルーナⅡドラニコルを捧げ

る」

これはいわゆる政略結婚というものだろう。
ノルンの方を見る。

「不束者ですが、これからよろしくお願いします……貴方♪」
にこりと笑って擦り寄ってきた。
ルーナの方を見る。

「よ、よろしくおねがいしましゅ」

緊張のあまり噛んでいるようだが、彼女もこうすべきと思ったのか擦り寄ってくる。

「嫁が四人になったな♪」

フィンにもぱっと、邪気もなく微笑んでいらっしやいます。

「といっても今まであまり変わらない気もするけどね」

リーネも忘れちゃ駄目だよと、ぎゅっと抱きついております。

「ちくしょー！！ 祝杯じゃー！」

自棄になったのか浴びるように酒をがぶ飲みしていらっしやるお方もいます。

政略結婚ではあるが、俺も彼女達とはこれから一緒にいたいと

思っていたところだ。

——だから、俺が言うことは一つだけ。

「これからも一緒にいようか」

「」「うむ（うん）（はい）（ええ）」「」「」

——これからも騒がしくなりそうだ。

第一章 新婚生活　（五年前）

「では、新たに加わった二名を含めた新しい新婚生活について話合おうぞ！」

宴会が終わり、透達だけになった後、フィンがこれからの秩序の為に言い出したのがそもそもの始まりだった。

「ふむ、具体的には？」

「御奉仕と夜伽についてだ！」

透の問いにすかさずフィンは答えた。

「私達の夫は透君なんだから、希望があれば透君に従うよ」

「ふむ……一応希望は聞くか」

透はノルンを見る。

「そういった行為は大丈夫？」

「貴方が望むのであれば」

同性であろうとかまわず魅了するであろう笑みを浮かべながらノルンは了承する。

透はルーナを見る。

「その……ボ、ボクもだ、大丈夫です」

氷でも置けばすぐにも溶けそうなほど顔を赤くしながらもルーナはしっかりと意思表示をした。

「うーん……夫婦生活に外部の事を持ちこむのは野暮だけど、無視するわけにもいかなから最初は一緒に寝るだけにして、双方がしなくなったら夜伽をして、慣れてきたら風呂での御奉仕もしよう。それでいいかな？」

「……いいですよ」

「は、はい」

二人の反応はなかなか対照的だった。

ノルンは拗ねた様子を見せ、ルーナは緊張を見せながらもほっとした様子だった。

「透よ、初夜からせぬのか？」

「うん。俺達是这样いった関係になったけど、二人とは夫婦生活を送ることを前提にしていなかったからね。だから、まずはさらにお互いを知ってからしようと思ってるね」

「今でも二人の事については結構知っておるのではないか？」

「そうだけど……まあ、心構えをつくる期間って言ってもいいかな。これからも一緒にいるつもりだから焦らず、ゆっくりとするつもりだよ。もちろん、心構えができればいつでも構わないと思ってるけど」

透がちらりと見ると、二人はどこか嬉しそうに照れていた。

「透君がそう言うならそれでいいけど……とりあえず、順番に一緒に寝て行って、心構えができたなら御奉仕もローテーションに入れると」

「うん。そう」

「なら、一緒に寝る順番を決めないかね」

「今日は妾だぞ」

「なら、二、三、四番目は……」

「二番でお願いします」

ノルンはすかさず二番目を主張した。早く一緒に寝たいといわんばかりだった。

「あはははは……ルーナちゃんどうする？」

「その……やっぱりまだ心構えができていないので四番目に」

「じゃあ、私が三番と」

夜伽の順番が決まり、一同に一仕事終えた空気が流れた。

「しかし……まさかこんな風になるとは夢にも思わなかったな」

そう呟いたのは透。彼とて、今の自分の身分が分不相応だと理解

している。彼はフィンがいなければ、彼に惚れていなければこのようにはならなかったと確信を持って言える。

「全ては透君とフィンちゃんが発端となっているんだよね」

「確かに……四界が和平の道を選んだことも、私達がこのような関係になった事も元はいえ、お二人の関係が元となっているんですよね」

「なんだか、物語みたいで憧れちゃいます」

きらきらと眩しい瞳に見詰められ、透とフィンは照れた。

「妾と透の出会いが全てを変えたか……悪い気分ではないな」

愛しい男と結ばれる為に、行った結果がこれなのだ。まだまだこれからだというものの、今現在の良好な関係を築くきっかけになったのであれば、嬉しさから照れが混じるという物ものだ。

「そういえば……」

飲み物を差し入れながら、メリルが口を挿む。

「お二人が惚れたきっかけというものはなんですか？」

「あ、ボクも聞きたいです！」

「私も興味あります」

「そういえば、私も聞いてないかも」

三者三様の反応であるが、誰もかれもが興味深々で、透とフィンの馴れ染めを聞きたがっていた。

「惚れたきっかけか……」

フィンはそのきっかけとなった五年前の出来事に思いを馳せる。

「妾とて最初から透に惚れていたわけではない」

「……想像がつきませんね」

ノルン殿の言葉に誰もが首肯する。

だが事実なのだ。最初からべた惚れの方がおかしいだろう。まあ、妾が透にべた惚れの姿しか見せておらぬからそう思うのであろうが。

「今までの四界の関係から分かる通り、ヴェルディンの住人である妾はアースフィアの住人である透を蔑んでおった。妾達からすればアースフィアの文明は原始人となんら変わらぬからな」

妾の言葉に反論はない。これは確固とした事実であり、三界の住人に共通する思想なのだから。和平が成り立っているからこそ、いや妾が睨みを利かせるからこそアースフィアは交渉する機会を得たといってもよい。それを活かすか潰すかは彼ら次第だろう。

「じゃあ、それが覆るきっかけになった機会があったんですね」

相対する世界の二人が結ばれる。物語としてみれば王道といってもよい。ルーナ殿は目を輝かせておる。目の前にその生き証人が居るのだ。わからぬでもない。

「うむ。実験が暴走してしまった時の事だ」

ノルン殿が若干顔を曇らせたが、気を遣っても仕方がないだろう。構わずに話を続ける事にする。

「実験の暴走の結果がどうなったか知っておるか？」

「はい。確か、外側に繋がる穴が空いてしまい、その結果一定範囲内にいたものの全てを呑み込んだんですね？」

「うむ。妾達は呑み込まれてしまい、どうしようもなくなってしまったのだ」

「そういえば、呑み込まれてしまったらどうなるのですか？」

ノルン殿の問いに妾はあの中での出来事に身震いしてしまい、つい透の膝の上に乗ってしまった。

透が後ろからぎゅっと抱きついてくれている。むふふ、これよ、これ……。

「抽象的で分かりにくいと思うが……地に立っているかさえ分からない闇の中で、視界は黒一色、何も見えず、何も感じず、何も匂わず、五感の全てが閉ざされた状態になるのだ」

その状態を想像してみたのか、息を呑んでいるようだった。

「しかも、周囲のマナが妾を呑みこもうとするのだ。妾達は外側と繋ぐ実験を行っていた為か、意識は何とか保てたが、それも時間の問題であつたであらうよ」

「他にも呑み込まれた者がいたと思いますが、どうなっていたかわかりますか？」

「悪いが、分からぬ。妾以外、何も存在を確かめられるものはなかったのだ。おそらく意識が呑み込まれると同時に、周囲のマナに溶け込んでしまったのであらうよ」

「そうですか……」

もしかしたらと思ったのだろう。分かっていたこととはいえ、少し落ち込んでいるようだった。

「ノルン、こっちにおいで」

透が手招きし、横に座るように指示する。

きよとんとした後、ノルン殿は嬉しそうに透の隣に座った。

透はノルン殿を抱き寄せた後、続きをと目線で促す。

「妾の意識も呑み込まれそうになった時、妾の他にも意識がある事に気付いたのだ。――それが透だ」

それは地獄の中で天から垂れた一筋の蜘蛛の糸であつた。妾はそれに必死にしがみついたのだ。

「実験前に繋いであったレコードか何かだと思っただけ、繋がっていたから声を掛けたんだ」

「意識が朦朧としておったところに透からの声が聞こえてひどく驚いたのだ」

「それで、どうしたの？」

「お互いの場所は分からなかったが、話すことで何とか妾は意識を保つ事ができ、マナに溶け込まずに済んだのだ」

「透さんは大丈夫だったんですか？」

「それはもう……いつもと変わらなかったぞ」

そうなのだ。この男は弱っている様子を見せず、普通に話しかけてきたのだ。その後も、意識を普通に保っておったし。

「その……透さんはどうなっていたんですか？」

「俺？ 俺はフィンと同じような状態だったけど特に何も思わなかったな」

全員珍妙な生物を見ているような眼で透を見ておる。そうだが、これが普通なのだ。それをこの男は――。

「透君、怖くなかったの？」

「なんで？ 何も見えなかったから退屈だったけど、心地良くもあったし、快適だったけど。まあ、難点は暇だった事かな」

顔が引き攣っておる、引き攣っておる。これが普通の反応なのだ。あれを心地よいと思っておる方がどうかしておる。

「まあ……なんだ……それで話しておる内に妾はすっかり透に慣れ親しんでしまい、今の気持ちの元ができてしまったといっても過言ではない」

「そうなんだ……」

誰もが二の句を継がないでおる。透が異常なのだ。うん、仕方がない。

「あ！　それでどうやって出たんですか？」

ルーナ殿が場の雰囲気はどうにかしようと必死に聞いてくる。妾もそれに便乗する。

「どうやって出ようかという話になった時、身体が無ければどうにもならなかったからな。それでどうにかしようという話になったのだ」

「どうしたんですか？」

「妾の身体はほとんど消えかけておったからな。そこで、透が妾を自身のレコードにすることで解決を図る事にしたのだ」

「そんなことができたんですね……」

「通常ならば出来る筈がなからうが……周囲がマナに充ちていたこ

とと妾の身体がほとんど消えかけていたことが要因となったのかもしれぬ。試行錯誤の上でようやく妾の身体は再構成できたのだ」

「ほえ」

ひどく感心しておるようだ。妾とて良くできたものだ后感心しておる。それしかなかったこともあるが。

「それでようやく出れたんですね？」

「いや、あくまで妾の身体が再構成されただけだ。そこから出る方法を何度も試行したのだ」

「まだ続くんですか!？」

「続くぞ。再構成できたものの出る方法が分からなくなてな。とりあえず当時の妾が持てる大火力の魔法で穴を空けようとは思ったものの、空けられなくなてな……暫くそこで過ごすこととなったのだ」

だが、何をしようとも空回りをするだけ。抵抗するのが馬鹿らしくなったほどだ。絶望に包まれるのは当然といえよう。

「どれくらいですか？」

「確か妾達が呑み込まれておったのは、一日も経っておらぬよな？」

「うん。実験の暴走を聞いて、ママと一緒に駆けつけたんだけど、その時には透君達が出てきていたんだよね」

「じゃあ、半日程度ですか？」

「いや、その程度では済まなかったと思うぞ。確か、体内時計では五年は経過しておったな」

「五年って本当ですか!？」

「そういえば、透君は実験前より成長していたっけ……」

途中で成長を止めたものもあるがな。透と再び会えた時、妾だと分かる様にそれから成長は止めておったが。

「五年の間に妾はエーギルの操作の向上を学んだのだ。出る為にはどうしても必要だったからな」

「その間にお二人に愛が芽生えたのですね」

そうなのだ。挫けそうになる度に、透に支えられてきたのだ。透のレコードになった事もあるが……。それに――。

「うむ。ただ……一つだけ恥ずかしい事があったのだ」

「何ですか、それは？」

「そこにいる間中、ずっと裸だったのだ」

「」「へ?」「」

「再構成したはいいものの、服までは再現できなくてな。しかも、一步踏み出せば、どこまで墜ちていくかは分からない暗闇の中。必然的に離れることはできず、裸で密着。しかも、相手は妾の好まし

く、そして命の恩人ともいえる愛しい男。これは、もう意識しまくるしかあるまい」

誰もが顔を赤くしておる。妾とて、思い出すのは恥ずかしいのだ。何をするにも、闇が怖いから離れるわけにもいかない。何をするにしても、裸を晒さねばならぬ。しかも、レコードで繋がっていたためか、お互いの姿ははっきりと見えるのだ。その上で、折れる心をその度に支えられ、透からのマナで身体が満たされるのだ。妾が透に堕ちるのは時間はかからなかった。墜ちた後は、お互いしか感じられない中、これ以上ないほど、愛されたのだ。身も心も魂までも透に埋め尽くされたのだ。これは、もう――透のものになるしかあるまい。

「コホン――まあ、とにかくだ。透が妾を変換し、抜け出す事が出来るエネルギー量を放てるようになって、晴れて出る事が出来たのだ」

顔を赤くしておるが、気になったのかノルン殿が疑問を投げ掛けてくる。

「そういえば、透さんは魔法は使わなかったのですか？」

「できなかったんだよね。フィンがレコードになったから分からないけど、使える魔法はフィンを変換する事だけ。それしか、碌に使えなかったんだ」

「レコードを一旦解除して取り込んだ後に、魔法を使うことはできないんですか？」

おそらく、そうすれば透は魔法を使えるだろう。

だけど、透は――。

「そうしてしまえば、フィンがどうなるか分からないからね。だから、その方法は使えないんだ」

妾の身体はほとんどが透のレコードで再構成されておる。故に、解除されればどうなるかは妾にも分からぬ。

だからこそ――。

「だからこそ、妾の全ては透の為にあり、透に捧げるのだ」

それは妾の誓い。誇り。生きがい。全て。愛しい男に全てを捧げる。妾ほどこれを体現できる存在はおらぬ。妾は文字通り、透のものなのだ。

「俺達の関係は奇妙なものでね。俺達は恋人関係でなければ、命を盾に脅して功績を根こそぎ奪う関係、脅迫者とその被害者になるかな。いや、恋人関係でもそれは言えるかな」

失礼な！ 妾は自分の意思でやっておるのだ。

抗議の意味を込めて、睨みつける事にする。

「はいはい、分かってる、分かってる」

膨らんだ頬をツンツンしてくる。

分かっておるのなら良いのだ！

だが、妾の心は深く傷ついた！

慰謝料を要求する！ 具体的にはチュツチュしろ！

「実際、その気はないけど、似たようなものである事は事実だしね」

妾の気がおさまらぬ。説教も込めて、可愛がってもらわねば！

「なるほど。だからこそ、そんなにメロデレなんですネ」

「そのとおりだ!!」

メロデレなど聞いた覚えのない言葉だが、メロメロとデレを掛けた言葉だろう。これは新天地だな！ 妾に相応しい言葉だ！

「それはよいのですが……私も可愛がってくださいね」

ノルン殿が透の耳に息を吹きかけておる。色っぽいな！

「明日ね」

「はい。楽しみにしております♪」

「ハイ、ハイ、ハイ、ハローーイ!!」

メリルが激しく自己主張しておる。何だ？

「ノルン様！ 私も可愛がってください！」

「……私にそういう趣味はありませんよ」

嫌そうな顔をしておる。本当にノルン殿は表情が豊かになったな。

「承知しております！ でも、できればノルン様に私の処女を頂いてほしいであります！」

「……そんなことできるの？」

「できます。そう言った方面でも魔法は発達しているのです」

うむ。それ専用の魔法をダウンロードできるしな。戦闘方面がある程度開発された後、どこぞの馬鹿がそっち方面を開拓しおったのだ。

今ではナイスと言わざるをえんがな。

「透様！　お願いします！　ノルン様とする時、私も混ぜてくださいー！！」

見事なジャンピングスパイラル土下座だ。たしか、土下座の中でも上位に位置するとか。確かではないがな。妾としてはもう一捻り欲しいところだ。

「……どうする？」

「……貴方が望むのであれば構いませんが」

「じゃあ、ノルンが慣れてきた時かな。ノルンもいずれフィン達と一緒にさせようと思っているし」

「はい。私は構いませんよ」

ノルン殿と一緒にするのか……その時が来るのが楽しみだな。どのように乱れるか興味があるし。どれほどの魅力を放つのであろう。

「至上の歓喜！！」

鼻血を流しながら、漢泣きをしておる。

確かに、ノルン殿にあれほど入れ込んでおるのであれば、おかしくはないが……ひいておるぞ。

「……今日はもう遅いし、さっさと寝ようか」

透の一言で解散の運びになった。

メルルを見て、気落ちしたのであろう。気持ちはわからぬでもない。

——だが……。

「御褒美の時間だな？」

「……ご注文は？」

「——特上で!!」

たっぷり可愛がってもらいました。てへ。

第一章 新婚生活 くファンクラブく

透達はすっかり歩き慣れた通学路を歩く。
だが、今回は少し違っていた。

「あ！ ごめんなさい！」

ルーナは緊張の為か先ほどから何度も躓き、しばしば足を止めていた。

透の左手にルーナ、右手にノルン。

後ろにフィンと鈴音が付いてきている。

昨日までとは逆の立場となったのだが、彼女達に不満はない。

彼女達は一人の夫を共有する同士であり、家族。

多少の差異があるのは仕方がないが、できるだけ平等に接し、同じ機会を設けていくことが、これからの生活を送る上での不文律と決めていた。

今、フィンと鈴音は先日までしていた腕組みをノルン達に奪われている。

だからといって、彼女達が憤ることはない。

今はノルンとルーナに機会を奪われているが、帰り時、明日と機会はこれからもあり、ローテーションで腕を組むメンバーを交代するのであった。

「やっぱり、まだ一緒に歩くのは慣れないね」

「……ごめんなさい」

透の指摘にルーナはしょんぼりと落ち込む。

透は別に怒っている訳ではない。ただ事実を指摘しただけだ。

「気にすることはないよ。俺達はまだこういう関係になったばかりで日は浅い。一緒に歩く事に不慣れでも仕方がない。

でも、俺達はこれから一緒に歩き続けるんだ。ゆっくりと慣れていけばいいさ。

な、ノルン？」

「はい、貴方」

ノルンは透の腕を自身の豊満な胸を押しつけるように抱え込む。

柔らかな感触が透の腕を包み込み、ノルンの鼓動さえ聞こえてきそうだった。

彼女との関係もまだ日は浅い。彼女との歩みもルーナに比べればましだが、それでもぎこちなさは拭えない。

一人だけでも歩きにくいのだ。二人も重なってしまえば、歩きにくい事この上ない。

だが、透はそれでもよかった。

彼女達との関係はこれからだ。ゆっくりと自分達の歩む速度を学んでいけばいい。

自分一人だけではなく、一緒に歩むべき相手もいる。

一緒に歩む相手は一人じゃない。

だけど、自分達は皆で歩む事に決めた。

お互いを知り、意識しなくても一緒に歩いて行くのが普通になればいい。

——そう思った。

秋の風が透達の頬を撫でる。

アカディアには四季がある。

安定した気候を一年中、続けさせることも出来たのだが、しなかった。

アカディアは四界が集うところであり、変化も流動性も多いといえよう。

ならば、安定した型に押し込めるよりは、不定形の方が文化、及び経済を発展を促せるのではないかと、この世界を作る際に議論されたのだ。

かくして、アカディアは四季をその世界に彩る事ができ、そこに住む人々もそれに対応せざるをえなかったのだ。

透は目の前の光景に頭痛がする思いだった。

もう少しで校舎に着く所であったが、今現在足を止めている。

その理由は、目の前にいる男達だった。

「我々はノルン様ファンクラブ。通称、NFCだ。

我々が申し立てることはただ一つ！ ノルン様は貴殿の婚約者となったのだが、我々はそれを認めていない」

そうだ、そうだと抗議を申し出た男の周りにいる男達が呼応する。

世界は異なっているが、住人達の顔貌は大して違いはない。

ガイアノグの住人ならば、龍皇族を除けば、各々の種族を表すものをその身体に表している。例えば獣耳、尻尾、翼など……。

他の三世界の住人はあまり変わらない。あえて言うならば、カンフィールとヴェルディンの住人は美形が多いことが特徴だろう。

NFCだと思われる男達は大抵がカンフィールの住人と推測さ

れる。

だが、周りにいる者達には他の世界の住人が混じっている事が分かる。

男は先ほどから演説を繰り返し、要約すると、ノルンを不当な立場で手に入れたのだから彼女を不幸にすることは許さないと主張している。

「はあ……それで？」

「貴殿がノルン様に不釣り合いな事は間違いあるまい。だからこそ、貴殿とノルン様は別れた方がお互いの為になるに違いない！」

彼がそう言った途端、透の右手から冷気が吹き荒れた気がした。

「今、なんと言いました？」

「え？」

それは聞く者に恐怖を抱かせる絶対的な支配者の声だった。

見ると、まるで以前に戻ったかのような無表情で——いや、あの頃よりも威圧を伴い、冷酷で、どのような目にあってもおかしくないような酷烈な残酷さを伴う瞳が無表情の中でノルンを際立たせていた。

「何といったのかを聞いているのです」

「え、いや、その……」

言葉にはならず、まるで絶対的な捕食者を前にした獲物の如く震えていた。

「私はこの人のものです。邪魔をするなら……どうなるかは分かっていますね？」

「は、はい!!」

男は哀れな程怯え、敬礼までする始末だ。

「どきなさい、下郎」

「はい!! 妃殿下」

まるで虫けらを見るような瞳で、校舎への道を塞ぐ男達を睨みつけ命令すると、モーゼが海を割ったかのような動きで男達は道を空ける。

「では行きましょう、貴方」

「あ、ああ……」

先ほどまでの冷酷な瞳を伴う無表情が一転して、慈悲深き女神の様な笑顔を透に見せつける。

未だ敬礼する男達を背に透達は校舎に入っていた。

NFCの会長であるアドラスは透達が入ると、敬礼を解いた。

彼は自分が失態を犯したと理解している。

彼とて、別に本気で言ったわけではないのだ。妬みが入っていることは否定しないが。

彼らが理不尽な存在でないことは入学してからの寮長の報告で、または彼らの言動で皆に知られていることだ。でなければ、こんなことはしない。

ただ、認めてもらいたかっただけなのだ。――ファンクラブの存在を。自分達の存在を。あまりにも届かない人に覚えて欲しかったのだ。

だが――それだけであっただろうか？

フィンの夫である透は彼女を抑止する存在である。彼女が和平を勧める以上、何らかの象徴が必要である。

フィンの元に四界の男を婿入りさせるのもその象徴としてありえない話ではないが、彼女は自身を夫一筋の人間と公言して憚らないのであるならば、透の元に四界の女性を嫁がせるのは間違った判断ではない。

それを理解しているが、先ほどあ言ったのは、演説に熱が入り、つい妬みから失言してしまったのだ。

だが、彼以外にノルンに相応しい人物がいなくても考える。

何しろ、ノルンの笑った顔など、カノンフィールでは誰も見たことはないのだ。にもかかわらず、彼はあんなにも綺麗に笑うノルンを引き出したのだ。

ならば、相応しいと言えるのではないか？

そんな考えが彼の中を駆け巡るが、もう一つの思いが彼を支配する。

「――いい」

まるで虫けらのように見る視線。蔑むような瞳。彼の中にある何かが燦られる。

命令された時など、まるで心酔している主人に命令される従僕ではないか。

そこまで至った時、彼の身体に電撃が奔った。

「もっと罵って欲しい、ノルン様。自分は貴方の忠実なる僕です」

突然の会長の奇妙な言行に戸惑い、蔑みを覚える者もいたが、多くの者が彼の言行に納得がいき、理解と共感を得た。

自身の内に芽生えた欲望に彼らは何の躊躇いもなく従った。

「ノルン様！ 貴方こそ我らの女王様です！」

声高らかに宣言する彼に待ったをかける者が居た。

「何を言っている貴様は……馬鹿か？」

自身の忠誠を汚されたような気がして、アドラスは親の仇を見るような眼で馬鹿にした男を睨みつける。

「馬鹿だと？ 貴様はノルン様の偉大さを知らんのか？ 恥を知れ！」

アドラスは男を罵倒するが、男は不愉快な物を見る様を崩さない。

「貴様こそ何を言っている……女王に相応しいのはフィン様だろうが……！」

正常な感性をしている者は揃ってズっこけた。

男は周りを気にすることなく、恍惚とした表情で語る。

「あの圧倒的なまでの強さ、己を貫く凄烈な意志、眩いまでのお姿、どれをとってもあの方こそが女王として相応しい！ 臣として忠誠を誓うのであればあの方以外に誰が居ようか！！」

語る姿は狂信者のそれに等しい。

だが、負けじと返すのはアドラス。自覚して間もないものの、ノルンへの忠誠は彼にも劣っていない。ここで引いては会長として立つ瀬がないと、一步も引かずノルンを褒めちぎる。

彼らと同じ感性をしている者は呼応していたが、正常な感性をしていた者にとっては頭痛の種でしかない。

誰かあの馬鹿どもを止めてくれないかと祈る。

その祈りが通じたのか、

「待ちたまえ！」

彼らを止める声が響き渡った。

彼らはこの馬鹿げた諍いを止めてくれると、声を高らかに挙げた者に期待を寄せた。

その男はガイアノーグの男だった。

もしかしてという希望と、まさかという絶望が入り混じる。

期待と失望を半々に混ぜた瞳で彼の言葉を待つ。

「ルーナ様を忘れてもらっては困る！！」

——お前もか。

正常な感性をした者達は虚ろな目をして、現実逃避をした。
やがて、耐えられなくなったのか静かに去っていった。

彼らの諍いは混沌へと誘われ、未曾有の混乱へとノンストップで
向かっていった。

その様を外側から見ていた女子達。

「なに、あれ？」

「さあ？」

そう、呆然と呟いた――。

第一章 新婚生活　（静いの対応）

「今朝の静いの原因は、ファンクラブの抗争だったようだよ」

フィンは今朝方に起こった静いの原因について、カノンフィール寮長、バルセティィグリスヘイムに報告を受けていた。

「ファンクラブ？」

「ええ。貴女、ノルン、ルーナがアカディアで最大規模のファンクラブを有しているのよ」

なんだそれは、と聞き返すフィンに返答するは、カノンフィールのもう一人の寮長であるナンナィグリスヘイム。

彼らの相貌はともよく似ており、翠緑の髪、黄金の瞳も彼らが彼らの美貌を光輝かせている。違いは髪の長さもそうだが、バルセティィは温和、ナンナは伶俐な顔立ちをしている。

「そうなのか……妾達以外にもファンクラブはあるのか？」

「ありますわ。貴女達の他には私、ナンナ、ステラ、鈴音が小規模ながらもありますわ。男子側は、セティとイルが占めますわね。私が小規模なのは、納得いきませんが」

ローゼリアとしてはフィンに後塵を拝しているのが、気に食わないのか拗ねた様を見せている。

「その通りだ！　何故我のファンクラブが出来ん！」

クロウは理解できないとばかりに唸り、頭を抱えている。
彼らとしてもクロウの大袈裟な表現にも慣れたのか平然としている。

「ファンクラブの人員の構成はどうなっておるのだ？ やはり、同じ出身の者ばかりが集まっておるのか？」

「そうでもないですよ。初めはそうだったようですが、途中から会員の数を競うようになって、他の世界の者も入れているようですね」

答えたのは、ローゼリアにイルと呼ばれた、ガイアノーグ寮長、イルドーラIIアラドファル。真紅の瞳と鮮やかな金髪を尻尾のように揺らす、少女に見紛う程の少年だ。

「ふむ、そうか……今朝の抗争で怪我人はどれくらい出たのだ？」

「僕達が確認したところ、争いはほとんど口論で終わったようだ。多少は殴り合ったようだが、それ以上にはなかったようだな」

ルーナを成長させたような姿を持つステラは、彼女の特徴である固い口調で今朝の争いの詳細を報告する。

応接室には、フィンの他に三界の寮長が集い、今朝の抗争について調べ、報告しあっていたのだ。

「死傷沙汰にはならなかったのだな？」

「ああ。彼らにも規則という物があって、ファンクラブ同士の争いでは口論はしても、死傷沙汰にはしないように気をつけているようだ」

それを聞いて、フィンは少し考え込み、彼らの意見はどうであるかを尋ねる。

「妾達が介入すべき事であるか？」

一同は少し考え込み、

「いや、それは得策ではないよ」

「そうですわね。死傷沙汰にはならないように気をつけていますし、気にしなくてもよろしいでしょう」

「我のファンクラブがないのは納得いかん」

「内容はどうかあれ、共通の目的意識を持つことはいいことですよ」

「そうだな。一つの世界が固まるならともかく、四界が混じっているのだ。交流する機会があることはいいことではないのか？」

「その通りよ。私達がやることは小規模の諍いを止めるのではなく、大規模になりそうならば介入する。それがいいでしょう？」

一人見当違いの事を言っているが、皆の意見は同じで、放置することが得策だと判断している。

フィンもそれには賛同している。だから、彼らについての話題はここまでということだ。

「では、監視に止めるということでは……では解散！」

解散の運びになり、彼らは応接間から出て行った。

「へえ……そんなことになっているんだ」

先ほどあったことを透に報告しての第一声がこれである。

「でも、私まであるのは何でかな？」

鈴音としてはそれが不思議だった。自分は彼女達のように特別な立場も力もないのだ。そんな自分にファンクラブができるのはおかしいと思ったのだ。

「そのことなのだが……どうも対抗してというのが大きいらしいのだ」

「対抗？」

「うむ。アースファイアには実際、妾達に対抗できる者がいないと判断されておったのだ。だが、アースファイアにとってもそれはまずいと思っただけで、鈴音も含めていくつかファンクラブが立ち上がったのだが、その中で鈴音の容姿が良かったことと、妾達と同じ立場に居ることから他のファンクラブが消える中、残ったのが鈴音のファンクラブの現状だそう。鈴音が好みという理由もあるそうだが……」

「そうなんだ……」

実際、鈴音は容姿は三人には劣ってはいるものの、さほど差は開

いておらず充分追いかけている。

「フアンプラブの交流から他の寮に出入りすることも今では珍しくなく、休日でも街中でその姿を見るそうですよ」

ルーナの言うことは、本当であった。

この街はパーティー単位の当番制で街中を警備している。もちろん、警備する者は学生達だけではないが、これも交流の一環として積極的に取り入れられている。

彼らの報告によると、入学当初は学生達は自分達の街からは出ていなかったのだが、ここ最近では他の街でも見かけるそうなのだ。

警備で街中を回っている事も、他の街へ出かける理由にもなるのだが、フアンプラブの交流によって人々は他の世界の街中で交流することが、フアンプラブの中での不文律となっているところがあるそうだ。

「この前の演習で、自分達の立場が確定した事が大きな理由ともなっているそうだ。どうも、入学当初は不安定なところがあったため、積極的になれなかったそうだが、今では開き直ったのか多少はパーティ内の陰悪さも緩和されてきているそうだ」

「それはよかったです」

「うむ。妾達の仲が良かったため、表立っては騒ぐことなどできないとのことだ。……ところで……」

「ん？ どうしたの？」

「ノルン殿はどうしたのだ？」

フィンは今まで会話に加わっておらず、ぼうつとしているノルンを見る。

ここに意識がない事は明らかだ。

幻覚だろうか？ 花畑が見えているようだった。

透達は苦笑している。

朝の内はこんな風ではなかった。放課後に近づくにつれて、今の在り様になったのだ。

「ノルン殿？」

「……………」

「ノルン殿！」

「——はい！ 何でしょうか？」

フィンは溜息をついた。

おそらく今晚の事が気にかかっているのだとフィンは推測をたてていた。

フィンの推測は的をえており、ノルンの頭の中では、今晚自分はどうのような服装で透を出迎えればいいか。どのようにすれば妻として相応しいのか。今晚は話をするだけであり、場合によっては多少は関係を進めるそうだが、何をされるのか。もし、何かされれば自分はどうすればいいのか。下手な事をして、嫌われてしまわないだろうか。

彼女は今晚の夜伽の事で頭が一杯になり、他の事に頭が回らなかった。

彼女自身、このような思いを抱いたのは初めてなのだ。経験不足が祟って、暴走状態にあるといってもいい。彼女は自分の思いを持って余し気味なのだ。それがまた心地良いから彼女も困惑している。

フィン達が凄く幸せそうに見えたから、自分もそうなってしまおうではないかとも期待しているのだ。しかも、自分が思いを遂げたとしても邪魔する者はいない。彼女は思いにブレーキをかける事が出来ずにいたことが、今の状態を作り出していたのだ。

「そんなに今晚が楽しみなのか？」

「――はい♪」

フィンは再び溜息をついた。

これはもう、自分の夫に丸投げするしかないと思った。夫ならば、きつと何とかしてくれるだろうと思った。

夫の恐ろしいところはその懐の深さだ。大抵の事は許容してしまう。ある意味、自分達の中で精神が一番異常だといってもいい。でなくば、あの闇の世界を受け入れる事が出来るはずもない。

しかも、夫は悪く考えるよりも、いつも良くなるように考えている。悪い部分を見ないのではなく、一部だと考えている。

夫は常日頃よりこう言う。『所詮、人間の言葉は自己を、他者を納得させる為の欺瞞に過ぎん。どっちを選ぶかはその人次第だからどうとでもなる』と開き直りといってもいいほど迷っておらず、自己に忠実だといってもよい。

妾達にもそれは言えることだが、よくもまあ民主主義好きのアイスフィアでその自己を確立出来たものだと思う。

異端といってもいい精神が妾達を受け止める器となっておる。目の前にいる家族候補はどうなるのだろうか？

妾達は人が生きる社会で異質だといってよい。その力で、その精神で……。鈴音は違うが、ノルン殿もルーナ殿も単体の世界では異常といっても不思議ではない。妾達四人が同じ時に生まれた事に何か意味があるのだろうか？

——どちらでもよいか……。

確かな事は妾達は透を縁に結ばれており、元々一つの物であったといっても不思議ではないほど、相性は良い。

今夜きつと、目の前の家族候補は家族になるだろう。

書類という薄っぺらい絆ではなく、魂で繋がるのだ。

今夜愛されるであろう家族を見てそう思う

第一章 新婚生活　ノルン初夜伽

一歩歩く度に、足音と共に心臓の音が高鳴る。

既に二月以上も同じ時を過ごしたとはいえ、ノルンとこれから新しい関係を築くことになる事に緊張を覚える。

ノルンの部屋の前にはメリルが何やら興奮した様で、今にも倒れてしまいそうな程ふらふらと佇んでいた。

「大丈夫か？」

「今夜のノルン様にひどく興奮してしまいまして……」

顔を赤らめ、息を荒げ、鼻血が出そうなのか鼻を押さえている姿は変態じみていた。

「そ、そうか……」

「ええ……実に愛らしく、淫？で、理性を保ってられるのが不思議なほです」

だが、メリルは今までの風貌をガラリと変え、真面目な顔を作る。

「ですから、透様……ノルン様を幸せにしてやってください」

「そんなの当然だろ」

「はい。当然でございますね！……ところで透様、例の件忘れな
いでくださいね」

可愛らしく科を作るメリル。多彩豊かな感情表現は透達の中でも随一だった。

「ならノルンに嫌われないことだ」

「御安心ください。私、ノルン様が絶対嫌がる事だけはしませんよ」

自慢げに胸を張るメリルだったが、彼女とノルンが繰り広げてきたSM劇に透は苦笑を禁じ得なかった。

この主従のコミュニケーションは余人では計り知れない所があるので仕方ないだろう。

「では、是非今夜のノルン様をご堪能ください」

メリルは朗らかな笑顔で扉を開ける。

透は部屋に入り、扉が閉じられると、ベットにいるノルンに目を向ける。

ノルンは目を凝らせば下に着ている下着が透けてしまっているネクリジェを恥ずかしげに着ながらも、透からは決して逃げない。

「今宵は宜しくお願いいたします」

透は三つ指をつくノルンの傍により、豪奢なベットに腰を落ち着ける。

「ノルン、こっちにおいで」

「はい」

透が膝に座る様に指示すると、ノルンはその魅惑的な身体を押し

つけるように座る。

ノルンの髪を梳くように撫でると、囁くように今夜の事について告げる。

「今日はまだ、最後までするつもりはないよ」

「……私はいつでも貴方に捧げるつもりですよ」

「そう言ってくれるのは嬉しいけど、今日はお互いの事を知って、少しずつ俺達の間を近づけていきたいんだ」

肩すかしをくらったのか、少し不満げな表情を見せる。

「もう……私はいつでもいいですのに……」

「何もしないわけではないよ。ただ……お互いこういう事に段階を踏んで慣れていこうと思ってね」

「段階……ですか？ 具体的には何をするんですか？」

「お互いの事に質問して、それに相手が応えてくれたら、少し関係を進めるんだ。例えば……」

透は少し質問の内容を考える。今この場でする質問としては相応しくはないが、関係を進める以上外せない問題でもあるので先に聞くことにした。

「今はこういった質問をするべきじゃないと思うけど、気になった事があるから聞かせてくれないかな？」

「何ですか？」

「昔、実験の後にヴェルデインに侵攻したらしいけど、ノルンはしなかったの？ ノルンが居れば大分戦局が変わったと思うけど……」

ノルンは不機嫌そうな顔をする。ノルンにとってはあまりいい話題ではないのだろう。

「――愚痴になりますけど、よろしいでしょうか？」

「妻の愚痴を聞くのも、夫の役目だよ。その程度の事で嫌いになったりはしないから安心していくらでも話していいよ」

ノルンはそれを聞いて、嬉しそうに身体を寄せる。少し、機嫌が直ったようだ。

「戦争時、私は一番に戦功を挙げた者に対する褒賞となっていたのです。ですから、私は戦争には出ることは禁じられ、他の者が私の事を競うように手に入れようと躍起になっていたのです」

「スルドさんは反対しなかったの？」

「父も反対していました。ですが、実際私の夫となろうとする者は後を絶たず、一時は内戦にまで発展するとまで言われたので、仕方なく褒賞としたのです」

「美貌、地位、立場、力どれも超一級品が纏めて手に入るからノルンはどうしても手に入れたかったということか……」

「はい……」

憤っているようで、悲しんでもいるのだろう。酷く沈痛した表情を見せる。

「――ノルン」

透は話は終わりとばかりに、彼女の額にキスをする。

「貴方？」

きょんとした表情も魅力的であり、男ならば彼女を手に入れたと思うのは間違いではないだろう。

「俺の質問は終わり。次はノルンが質問する番。俺が質問に応えたら、俺と同じように額にキスをして」

「――はい、貴方」

その後の質問はさっきみたいな堅苦しいものではなく、何が好きか、これはどう思うかなど簡単な質問ばかりを繰り返し、相手の頬に、耳に、手の甲に、首筋にキスをお互いに繰り返ししていった。

ノルンの顔はキスをこなしていくほど蒸気を発しているように紅くなり、瞳も潤っていた。唇へのキスをまだかとばかりに待ち焦がれている様は妖艶であった。

「ノルン、俺達が関係を進める上で、どうしても聞かなくちゃならない事があるんだけどいいかな？」

「――何ですか？」

「俺とフィンはいつ世界から弾き出されてしまってもおかしくない存在だからね。だから、そうなった時は、この世界から去るつもりなんだ。だから、俺達は地位や名誉、金銭といった社会的なものに価値観を置くわけにはいかない。ノルン、それでもいい?」

「私も連れて行ってくれますか?」

「俺の妻となる者は例外なく連れていくつもりだよ」

「――貴方が行く所ならばどこへでも付いていきます」

透は彼女の瑞々しい唇に誓いの口づけを交わすかのようにキスをする。

「次はノルンの番だよ」

ノルンは意識がどこかに彷徨っているように茫洋としていた。

「――貴方は私に何を望みますか?」

透の中では決まっていた答えだった。

「特に何も。強いて言うならば、傍にいて、一緒の時間を過ごしてほしいだけだよ」

「それ、だけですか?」

ノルンにとって予想外だったのか、惚けている。

「うん。ノルンの立場を利用して、カノンファイルにしようと思う

ことは精々四界の平和を、そして俺達の生活を邪魔しないようにする事だけだし、彼らが何もしなければ何も無理に干渉することはしない。

力に関してもそれは同じで、何かあるならばフィンが動くだろうし、防衛やさっき言った事にしか使う機会もない。結局、することといえば、一緒の時間を過ごすしかやることはないんだよ。

ノルンは、俺にカノンフィールに限らず四界に対してやって欲しい事はある?」

ノルンはしばし考えるが、彼女の中にはその問いに対する答えはなかった。

「――ないですね。私も貴方に愛されたいとしか」

ノルンも質問を答えたことで口づけを返す。

「だろう? 一緒にご飯を食べて、これが美味しい、不味いとか言い合ったり」

ノルンの唇を何度も軽く咥える。

「デートして、季節の彩りを一緒に感じたり、服や小物をショッピングして、相手の好みや自分の好みを言い合って、揃えたりして」

ノルンも透の唇をはむつと美味しそうに味わう。

「人によってはそんな生活を墮落者とか、上昇志向を忘れた愚か者とか言うに違いないけど、俺達にとってはこれこそが望むものだからね」

ノルンの口腔内を舌で蹂躪して、唾液を飲ませる。

「私としても望むべきものはそこにはなく、貴方の傍にいますから」

ノルンの舌が、拙く透の口腔内を舐める。

ノルンが舌使いを学べるように、透が先に実践して、ノルンに学ばせる事を繰り返す。

いつしかお互いの息は荒れていて、自分のものか相手のものか分からない唾液が二人の口の周りについている。

「ねえ、ノルン……」

「――なんでしょうか、貴方？」

透はノルンのネクリジェにそっと手を掛ける。

「最後までするつもりはないけど……嫌なら嫌って言ってね。すぐに止めるから」

ノルンはくすりと笑った。

「私が貴方の事を嫌がる筈ないじゃないですか」

「じゃあ……確かめないとね」

「はい……確かめてください」

二人は今夜どこまでお互いを受け入れたのか確かめ合った。

「――ひどいです、貴方。最後までしてくれないなんて」

「初めにそう言っただろう？　次はノルンの全てを貰うから、それまで我慢ね」

「もう……ひどいです。次は絶対ですよ」

約束を守ったのに、怒られました。

次の日の朝はノルンの情熱的なキスから始まった。

ノルン曰く、我慢できなくなってしまっ、つい襲ってしまったそうだ。

お返しに、透からも襲ってしまい、つい勢いで苛めてしまった。その後、部屋に備え付けられている浴室に入って、お互いに流しっこをしたのだが、諸々の結果、上機嫌ではあるものの、拗ねているという珍しい精神状態のノルンが出来上がってしまった。

ノルンを伴い、リビングに入ると、フィンがにやにやとした顔でノルンに昨夜の事を尋ねた。

「ノルン殿、昨夜はどうだった？」

ノルンは愚痴の吐き出し口を見つけたとばかりに、フィンに愚痴る。

「聞いてください、フィンさん。透さんったら、意地悪ばかりをして、最後まで可愛がってくれなかったんですよ」

「透は鬼畜だからな。妾達を苛めて楽しんでおるのだ」

「そうなんですよ。私が欲しいといっても欲しいものはくれず、苛めてばかりで」

「ノルン殿は初めてだから気を遣ったのだろうよ。まず、行為に慣れるべきだと考えたに違いない。まあ……慣れてからも透が妾達を苛めるのは常套手段だから覚悟した方が良いな」

「これが調教されるという事なんですネ」

「その通りだ。ちなみに、ノルン殿よ。透が最後まで可愛がってくれたのならば、接続した方が良いぞ」

「接続ですか？」

「うむ。いつも全身が透を感じられて、しかも抱きしめられているようで心地良いのだ」

「それは……次の夜伽の時に、無理をしてもして貰わねば」

「それがよいぞ。次ならば、透も最後まで可愛がってくれるに違いないからな」

「ああ……待ち遠しいです」

ノルンがフィンに愚痴っている間に、ルーナと鈴音も起きてきた。

ノルンが二人にも愚痴るが、透は気にしない。いたら気にしないの精神で四人の視線を無視した。

ほとんどの者が朝食の場に来ているのだが、ただ一人だけ姿を見せなかった。

「メリルはどうしたんだ？」

「そういえばいませんね？」

大抵ノルンが起きる前にはメリルも起きている。

ルキと共に、朝食の手伝いをしているのだが、今日はハティが準備をしている。

「……メリルは体調不良」

「昨日は元気だったけど？」

昨夜は無駄に元気だった。あれから体調を崩すとは思えなかった。

「……只の貧血」

透は貧血という単語で一瞬納得しかけたが、ある可能性に思い至った。

ノルンもそれに思い至ったのか、若干顔を青褪めている。

「少し、メリルとお話してきます」

ノルンはゆらりと、ある種のオーラを纏ってメリルの部屋に向かった。

それから数分後、メリルの嬌声がリビングにまで響き渡った。

頬に付いている血を誰もが無視する中、ノルンは今後の予定についておねだりした。

「貴方、私も御奉仕に加わってもいいですか？」

「いいけど……次の夜伽までは最後までしないよ」

ノルンはその事が不満なのだろう。若干頬を膨らませている。

「次の夜伽は三日後ですよ。ですからそれまでの間にどなたかと一緒に、御奉仕について学びたいのですが……」

透は了承の確認のためにフィンと鈴音の方を見る。

「妾達は構わんのだが……」

「どっちにする？」

ノルンは少し考えを巡らす。

「できれば明日がよろしいのですが……」

「じゃあ、私だね」

「御指導よろしくお願いします」

ノルンは鈴音に丁寧な頭を下げる。

「でも、結構急だけど、どうしたの？」

「私としても、他の皆様に後れを取りたくないのです。それに……」

「それに？」

ノルンがちらりと流し目で透を見る。

「何処かの誰かに苛められたせいで、三日後まで我慢できそうになりですから」

——ごめんなさい。

透は少し反省したのだった。ほんの少しだけ。

第二章 銀龍の苦悩（旧友）

先日と同じように透達の進路上に立ち塞がる者が居たが、ファンクラブのものではない。

その少女は白い髪を風に靡かせ、真紅の瞳で俺達を睨み、服の上からでも分かるノルンよりも大きい胸を強調するように腕を組み、小さな体躯で行く手を妨げんとばかりに透達の前に立ち塞がっていた。

「ようやく、来たみたいですね」

透にはその少女に一応見覚えはあった。だから確かめてみよう、一芝居をうつことにした。

「誰？」

透の言葉に少女は拍子抜けた事をその小さな身体で大袈裟に表現した。

「誰って、あたしが分からないのですか!？」

透は少女が自分の知り合いだという事を十二分に承知していた。
だからこそ――

「むむ！ 記憶の片隅から蘇ってきそうだ」

少女は望んだ事を思い出されてしまいそうで、わくわくしていた。

「わくわく。わくわくです」

これは期待に応えねばなるまいと、透は当然の如く意気込んだ。

「……気のせいだったようだ。リーネ知ってる？」

ちらりと脇にいる鈴音を見る。透の前振りに鈴音は心得たとばかりに頷いた。

少女は期待に胸を膨らませるが……現実には甘くはなかった。

「知らない。人違いじゃないかな？」

「ガーンです」

あまりのショックに少女は目に涙を堪えていた。よよよと、大袈裟に落ち込む少女。

「ひどいです！ 友達の事を忘れたのですか!？」

「もちろん！ 覚えているとも!」

「おおー！ さあ、お名前をどうぞです」

「……………ふう」

「おぼえてないのですか!」

透は汗を拭く動作をしたことで、誤魔化そうとしたのだが、そうもいかなかった。

もちろん透は覚えている。覚えているからこそこの仕打ちだっ

た。

「確か……………」

「確か……………」

少女が息を吞んで透の答えを待ち望む。

「月野メジロ」

「そうそう、あたしは月野メジロ……違うよ！ 惜しいけど鳥じゃないよ」

「マグロ」

「そう、あたしからはとれる大トロは絶品……またしてもニアピン！」

「マシロ」

「違うよ！ あたしはマシロじゃないよ！ 真白^{ましろ}だよ！ ……ってあってるし！」

「うんうん。懐かしいやり取りだ。からかいがいがあったいいね」

「弄ばれた！ あたし、弄ばれた！」

「久しぶりだね、シロちゃん」

漫才のようなやり取りを終え、鈴音は真白に抱きつく。昔から透

は真白をからかって遊んでいたのだ。鈴音もそれをわかっており、わざと惚けたのだ。

「透よ。その者は誰だ？」

蚊帳の外に置かれていたフィンが声をかける。透がこのような人をからかうやり取りをすることはなかったので、目を丸くしている。

「こいつは月野真白。んで、俺のペット」

「初めまして、月野真白です。透君とは古くからのペットの関係で、仲良くやっています。……って、ペット！ 友人じゃなくて！」

「お手」

「わん♪」

真白は条件反射で透の手に自分の手を重ねる。真白とは友人関係でもあるのだが、からかいまくり、弄くり回した結果、半ペット化したのはいい思い出であった。真白のノリがいいもので、ついからかってしまうのである。

真白は自分がした事に苦悶しており、頭を抱えている。

フィン達も真白に対する対処が分かったのか、気軽に接する。

「透のペットだな。あい、わかった。これから宜しく頼むぞ」

ノルンもルーナも真白への対応が分かったのか、次々と透のペット扱いをしていく。

「ウニャー！ー！！」

観念しろ。お前の扱いはこれが一番いいのだと、透は心の中で嘯く。

べそを掻いている真白を無視する。しかし、なんで今頃になって姿を現したのだろうか、透は疑問を持つ。

「それで？　なんで今頃俺達の前に現れたんだ？　入学式直後にも姿を見せればいいのに」

「うん。そう思ったんだけど、どうせなら街角で突然会う二人。そして、深まる親交を再現したかったのですよ」

「ふむふむ」

「あたしとしてはそうならなくても不満はなかったですけど、自分から会いに行くのもなんか癪だし、あたしに会いに来てくれないかと待ってたのですよ」

「いや、いること自体知らなかったし」

「やっぱり……それで、このままではいけないと思って会いに来たのですよ」

「つまり、寂しくなって会いに来たと」

こくりと頷く。

昔から小動物系の雰囲気をしていたので、つい撫でてしまいたくなるのだ。今も、透は真白のあごの下を指で撫でている。

真白は撫でられる事を気持ちよさそうに受け入れているが、はっとし、猫が毛を逆立てるように透を威嚇する。

「また、ペット扱いされてるです！ 断固抗議するです！ 訴えます！」

「何処に？」

「えと……裁判所？」

「言っておくが、妾達には意味がないぞ」

「え？ どうしてですか？」

「妾達が法律だからな。いくらでも法を変えることができる」

アカディアはフィンのために造られた箱庭だ。
故に、いくらでも暴君になれるのだ。
それが分かったのか、真白も青褪めている。

「というわけで、だ。……お主は透のペット、これを法律とすることが可能なのだ」

「横暴です！ 暴君です！ 独裁です！」

「何とでもいうがよい。さあ、愛でてやろう」

フィンが真白のノルンよりも実っている果実を弄るように揉む。

「犯されるですー！ー！」

「よいではないか、よいではないか。……なんと、これは羨ましい」

フィンとは真剣な顔つきで真白の胸を揉んでいる。真白の顔は熱を帯びており、息も絶え絶えだ。

「透……おっぱいは大きい方が良いか？」

フィンは今までにないほど真剣な顔つきで透に聞く。
安心しろ、問題ないと透は嘯く。

「胸に関して、嗜好は昔から様々な談義があるが、俺としては大きいだけでは駄目だ。形も整っており、尚且つ全体のバランスが良くなくて駄目だ。フィン達は形もよく、バランスも良く、感度までいい胸だから、俺としては何の問題もないから安心しろ」

フィン達も透の胸談義を聞いて安心している。
だが、フィンの揉み揉みは依然として終わらない。

「ほら、フィン。いつまで揉んでいるんだ？ いい加減離しなさい」

「おお！ マシュマロの様なフワフワ感だったからつい揉みすぎてしまったぞ。男が胸を好む気持ちがかかってしまったぞ」

透は今も宙を揉んでいるフィンを無視し、真白に教室に向かうように告げる。

「いつでも、生徒会室なり、家なり遊びに来ていいから、今は授業に出なさい」

「はいです」

ふらふらとした足取りで真白は校舎へ向かっていった。透は途中で転ばないだろうかと心配になる。

「――透」

悩ましげな表情でフィンが呟く。

「あれを可愛がってもよいか？」

百合が咲き乱れるかもしれないと透は戦慄した。

「それでこれとはどういった経緯で仲良くなったのだ？」

昼休み早速遊びに来た真白をフィンは弄くり倒している。

真白も諦めたのか、ぐったりと疲れており、フィンの成すがままになっている。

「たいしたことじゃないよ。リーネのお見舞いとしてやってきた真白と気があって、そのまま五年前のあれがあるまで親交があっただけだよ」

最初は当時の担任教師のお節介としてのクラスメイトのお見舞いだったのだが、事の後透とも鈴音とも気が合い、そのまま友人関係を結んだのだ。

「たいしたことあるです！ その……あたしはこんな髪の色だから

苛められてて、そんなあたしを受け入れてくれたのが透君達なので
す」

「たかだか、髪の色でそうなるんですか？」

ルーナ含む異世界の三人は不思議な顔をしている。

そうだったことは単一民族でしか、体験できないものなのかもしれない。

「他の三界や、アースファイアの一部の国では馴染みがないかもしれないけれど、俺達の国では黒髪が一般的だね。黒髪以外は認められていないんだよ」

「馬鹿ではないか？ たかだか髪の色くらいのことを気にするなぞ、狭量にもほどがあるぞ」

「人間は異質を怖がるからね。特に俺達の国は集団を常に意識するから、それからはみ出る者は除外しようとする傾向が強い」

三人とも呆れている。透としても馬鹿らしいと思うのだが、それも国柄というものだから仕方がないといえば仕方がないだろう。

「私達はそんな事を気にしないから、シロちゃんも安心して仲良くなっただよね？」

「はいです」

真白はアルビノとよばれているものであるが、髪と瞳の色以外は透達となんら変わらない。健康体そのものであった。

「では、ここに入学したのもその関係か？」

「はいです。あたしの髪は行く先々で問題になりますから……それに」

真白は顔を赤く染め、ちらりと透達を見る。

「透君と鈴ちゃんに会いたかったですから」

透達は既にこの学園に入学することは決定事項であり、入学を促すためにパンフレットに記載されていた。真白はそこから知ったのである。

「学園はどう？」

「思ったよりもいいところですよ。皆さん、あたしの髪や瞳の色は気にしていませんし」

「私達も様々な色の髪や瞳を持っていますからね」

「でも、一般枠だから大変だったんじゃないですか？」

上層部でも大規模にはならなかったが、小規模ならばたびたび衝突はあった。ならば、一般枠でも衝突は避けられないのは必然でもあった。

「初めの頃はそうでしたよ。でも、何度か話しかけたら次第に仲良くなっていったんです。最近では皆とは言えませんが、大分打ち解けてきてますし、他の寮に寝泊まりする事もあるんです」

「そうなんだ」

四界の交流を促すためにそういった規則は比較的緩くできている。効果はちゃんとあったことに透達は安心した。

「魔法授業はどうなのだ？」

「その……正直に言うと、足手纏いにはなってますが、皆さん気にしてはいないようです。皆さん、精々護身用や生活を便利にするために魔法を学んでいるので、あまりそういった事は気にしてはいないようです」

「軍人になるのは専ら上層部だけだからな。下層部でも自警団を目指す者しか気にする者はおるまい」

「そうなんだ」

「うむ。そのあたりのことは今度聞かせてやろう」

「そろそろ、昼休みが終わってしまいますね」

「あ、そろそろ戻らないといけません」

真白もパーティーに所属しているため、午後からはその関係で授業がある。

透達はそういったことは緩いが、真白はそうもいかない。

「うむ。また、来るがよいぞ」

「はいです」

真白は急いで駆けて行った。

真白の話は透達にとっても有意義になるので、今度も是非聞いておきたかった。

第二章 銀龍の苦悩（最強の銀龍）

「ステラちゃん、母様の話は何だか知ってる？」

「いいや、僕は連れてきてほしいと頼まれたただだから、知らないよ」

「そっか」

透とルーナはステラの案内の元、ガイアノークの領事館——つまりソルガ達の家へと向かっている。

放課後、ステラはプリティがルーナを呼んでいると頼み事を頼まれたのだ。その際に、透を連れてきてほしいという伝言も。

ルーナと透は二人で歩くときは腕を組むよりも、手を繋いだ方が歩きやすいのでこうして手を繋いで歩いている。

顔を少し赤くしているが、これもいつものことであり、次第に慣れていくこともあるだろう。

「じゃあ、僕はこれで」

そう言って、ステラはそそくさと去っていった。

ルーナを呼ぶには、ステラを介する必要はどこにもない。

なのに、プリティがルーナをステラを介して呼び出したのは接点を作るためだろう。

二人は喧嘩中ではあったのだが、この前の婚約発表の時に、少しわだかまりが溶けたのかぎこちないながらも交流をしている。

元々、二人は仲が良く、喧嘩の原因もステラの劣等感が原因とな

っており、ルーナにとってはステラに対して含むものはないので、ステラがわだかまりを溶いてしまえば、仲良くなるのは時間の問題でもあった。

しかしながら、二人の間にはまだまだわだかまりがあるので、それを解消するためにプリティはわざわざ接点を作ったのだろう。

「あら、いらっしやい。少し待って貰えるかしら。今、お茶を用意するから」

使用人の案内の元、透達はプリティの自室へと足を運んだ。

「母様、話って何ですか？」

「ルーナ、慌てない。少しばかり長くなるからお茶を用意しているのよ」

その幼い体躯とは裏腹に、プリティは落ち着きを払っており、彼女の夫とはまるで逆だった。

館に控えている使用人がすぐさまお茶を運びこむ。

プリティはそれを優雅に飲んだ後、話を切り出した。

「話というのは、他でもないわ。ルーナの事よ」

「ルーナの事ですか？」

「ええ。ルーナにとっても話にくい事だから私が話すわね」

透が横を見ると、ルーナは身体を硬直させており、息もしているか怪しい程緊張していた。

「婚約者であるあなたにとっても、無関係とはいえないから話すのだけど、ルーナはまだ獣化を制御できないために、成長が止まっているのです」

確かにルーナの身体はステラに比べて大分幼い。これは個人差ではなく、獣化が問題なのだろう。

「獣化が制御できないことで他に不都合な事はあるんですか？」

「ええ。これは獣化が制限時間があることと関係があるのだけど、一般的にエーギルが多い方が制限時間が長い。だけど、獣化はある危険性を孕んでいるの」

「ある危険性ですか？」

「これも私達が獣化できることと関係があるのだけど、私達にはガイアノークにいる生物達の因子が含まれているの」

「龍だったり、狼だったりですか？」

「ええ。その因子が制限時間を超えてしまうと、私達を呑み込んでしまい、その生物そのものになってしまうの」

つまり人としての理性を失くした存在になるということである。

「特に、それは成長しやすい時期に起こってしまっただから、

その獣化を制御できる事が成人の証という事になるの」

「じゃあ、ルーナのように制御できなければ？」

透がそう質問すると、ルーナはびくりと震えた。

手に持っているカップもカタカタとわずかに震えている。

「……残念だけど、殺さざるをえなくなるわ」

（放っておけば被害が出てしまう可能性があるということか……。ガイアノグの生物の因子ということはその生物はいるということだ。ならば、そこに置くという選択肢もあるのだが、殺すということとはせめて人として死なせるという選択をとるということか……）

透は生じた疑問を解消すべく思考を巡らせ、ガイアノグの習慣に一先ずの決着をつける。

「ルーナが制御できない理由は？」

「精神的なものよ。ルーナの力は並外れているからこの子は怯えているの」

「そうなの？」

ルーナはこくりと頷いた。

「時間はどれくらい残ってますか？」

「……こればかりは私達も分からないわ。ただ、この子が獣化を制御できず、暴走してしまうと、周囲に被害が出すぎてしまうし、私達では対処できないからその前に――」

プリティからは続く言葉は出てこなかったが、透の方をじっと見ている。

「暴走した場合は俺達でルーナを殺せと」

「……そうなる、わね」

それはまさしく苦渋の決断。
できればしたくはないだろうが、周囲に被害が及ぶとなるとしなくてはいけない決断。

「わかりました。そうなる前に、制御できればいいんですよ」

「ええ、私からは以上よ。後は、二人で話し合って頂戴」

プリティは少し名残惜しそうに、そして苦悩を滲ませながらこの部屋から出て行った。

彼女としてもなんとかしたいが、打つ手はもううったのだろう。
（聞いた話によると、ルーナがどうにかしなくてはいけない問題だからな……その手助けはするかな）

「ルーナ、こっちにおいで」

透は部屋にあるソファに座り、ルーナを招いた。

ルーナは顔を俯かせながら、ゆっくりと透に近づき、恐る恐る膝の上に座った。

「ルーナは自分の力が怖い？」

透は彼女が今までこのことを話さなかった事は一切触れない。触れたところで、ルーナを追い詰めるだけだ。そのような意味のない事はするつもりはない。ただ、彼女の制御の助けとなるべく、彼女の話を聞く。

「――はい」

冷たい雨に晒され、弱りきった子犬のような声でルーナは返事をする。

「どんなところが怖い？」

「……制御が外れてしまえば、周囲を無差別に枯らしていくんですよ。怖くないわけじゃないですか」

破壊ではなく、枯れる？ 透はルーナの言葉の選択が気になった。

「枯れるって言ったけどどういう意味？ 破壊するではなくて？」

ルーナは透が言った事にはっとしたのか、言葉を選ぶように説明する。

「以前説明しましたが、龍皇族は各々得意とする属性があります。銀龍はその中で得意とするものは全てと話しましたが、理由があるんです」

そのことは以前聞いた。ガイアノークは得意不得意がはっきり分かれる。銀龍がその中で特筆しているのは不得意なものがないためだ。

透がこくりと頷くと話を続けた。

「獣化した時に龍皇族に限らず、ガイアノークの人々は種族に応じたエーテルを発揮できます。龍皇族のエーテルはその種族の名を示すとおり『龍の吐息』^{ドラゴンブレス}。エーギルを圧縮し、得意とする属性のエーテルに変え放つ、最高の攻撃力を発揮する必殺技です」

「そのあたりはテンプレだね」

透の軽口にルーナはくすりと笑った。

「はい。でも、銀龍の場合少し違います」

「というと？」

「これは他の種族にも言えることですが、獣化した時は周囲のマナを自分自身に同化させるので、周囲のマナを利用する事が出来ます。特に、必殺技の時はそれが顕著で、自分のエーギルだけでなく、マナも利用して放ちます」

ルーナは自身を落ち着けるように深呼吸する。自分の力に触れる部分に関しては話しにくいのだろう。

「龍皇族もそれは同じで、自分のエーギルと周囲のマナを圧縮して放つんですが、銀龍はその周囲のマナを取りこむ力が凄いんです」

「それが銀龍が強いわけ？」

「はい。銀龍の得意とするのは『吸収』。自分だけでなく、相手のエーテルも吸収できるから銀龍は龍皇族の頂点に立ってるんです」

「つまり、自分だけでなく、相手の力も上乗せできるから強いと」

「はい」

それぞれのキャパシティはあるのだろうが、相手の力を上乗せできるのであれば、それは敵なしだろう。反則にもほどがある。

「それと枯れるにはどういう関係があるのかな？」

ルーナは痛みを堪える様に胸を押さえる。

「この世界のあらゆるものはマナがその物質化の手伝いをしていきます。だけど、銀龍が制御することなく際限なく吸ってしまえば、その物質は結合を解かれます」

「つまり、消えてしまう」と

「ボクの場合は少し、違いますね。花が水分がなくなると枯れてしまうように、萎びれていき、枯れていくんです」

つまりはミイラのようになってしまふということだろう。そして、ミイラのようになってしまった物質は塵の様に消えていく、そういうことだろう。

ルーナが怯えてしまうのは、それこそその枯れる力が底なしだからだろう。

制御を失ってしまえば、際限なく吸いこんでいくブラックホールの様な存在。

それがルーナの銀龍としての力。

だからこそ、ルーナは怯えている。世界を枯らしてしまうから。

透はルーナを壊れ物を抱くかのように優しく包み込む。

「あ……」

「ね、ルーナ……俺達と一緒にいたい？」

優しく、幼子をあやすかのように囁きかける。

「——一緒にいたいです」

ルーナはそれに応え、透の胸にしがみつく。

「そっか、なら制御できるようにならないとね」

「でも、怖いんです！ 気を緩めてしまえば、世界を枯らしてしま
いそうで！」

ルーナは怯え、幼子の様に泣き叫ぶ。

透はルーナから流れる涙をそっと唇で掬う。

「大丈夫だよ。精神的なものらしいし、俺達も手助けする」

「でも、何をやっても駄目でした。鍛えれば、制御できるかと思
いましたが、結局はだめでしたし……」

「ルーナに必要なのは、そういうことじゃないよ」

「え？」

「自分が納得できる理由。自分を騙す事が出来る詐術。力を揮った

としてもどうにかなる安心感。そういった諸々の精神の余裕が必要だね」

「でも、それこそどうしたらいいか……」

「なんだっていいんだよ。ルーナが納得できれば……。例えば、力を揮う理由を他者に預けたりとかね」

「それは駄目だと言われました」

それは確かにそうである。これほどの力だ。安易に他者に預けてしまえば惨事になりかねず、安易な依存を人間は嫌う。だが、透はそうではない。

「確かにそれは人として、精神的に自立する事を妨げる事だろうね。でも、俺はそういった在り方も人としてならおかしくない事だと思うし、愛しくもある。こう言った在り方も人たる所以だからね。それを否定することは人を否定することだ。俺にはできそうもない」

宗教がいい例だろう。あれは神に理由を預ける。言われるままに戦争が起った例も数あるし、そういったことから人が嫌うのも当然だろう。

だからといって、だれもが自立しており、我を持ちすぎるのも考え物だ。

誰もが自己を主張してしまえば、それはそれで人々が争う理由になる。

極論ではあるが、どちらもたいした違いはない。

考えの論点はそこではないのだ。

どちらの考えも、良い方にも悪い方にも転がり得るのだ。

どちらが良い悪いで計るものではない。

精神的依存も適度であれば、自己の形成の助けにもなる。

要は考え次第。悪い方ばかりを見ても始まらない。

まずはいい方を考え、悪い方を把握したうえで、物事を進める。

悪い方に転んだとしても、それはそれで人たる所以、愛しくもある。

「俺はルーナの夫だからね。それに、いざというときは止めることもできる家族もいる……命令するのは俺だけだね。ルーナ、何も君一人で背負うことはない。今は俺に預け、背負えるようになれば背負うという選択肢もあるんだ」

「でも、透さんは辛くないんですか？」

「何、この程度ならば問題ないよ。お前が納得できれば、それでいいんだ。それが制御できるきっかけになる」

「きっかけですか……」

「だからゆっくり考えてごらん」

ルーナの額に口づけをする。

ルーナは顔を赤くするが、抵抗はしない。

後は彼女が考えることであつた。

いかなる選択であろうと、受け入れるつもりだが、自分から離れるという選択はださないように気をつけないと、と透は心中で思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0806y/>

カオティック・スクエア

2011年11月20日16時11分発行